

TOHOKU GAKUIN ARCHIVES CENTER

# 東北学院史資料センター年報

LIFE  
LIGHT LOVE

Vol. 11  
2026.3.1



## 2024年度公開シンポジウム「工学部のこれまでとこれから」から

「東北学院大学の理系学部の過去・現在・未来」

岩谷 幸雄

「多賀城キャンパスの60年：1962-2022」

崎山 俊雄

## 寄稿

「史資料センター所蔵史料「東北学院年次報告  
(Annual Report of Tohoku Gakuin)」の調査と分析②」

藤野 雄大

「東北学院大学研究ブランディング事業及び  
東北学院宗教センター刊行『水曜通信』への寄稿文」

日野 哲

## 2025年度行事紹介

仙台市戦災復興記念館「戦後80年 戦災復興展」

企画展「配属将校と学校教練-東北学院の苦悩-」開催報告

2025年度公開シンポジウム「土樋キャンパス百年のあゆみ」開催報告



学校法人 東北学院

# CONTENTS

---

## あいさつ

- 『東北学院史資料センター年報』第11号発行にあたって  
「東北学院デジタルアーカイブス」への期待 院長 大西 晴樹 …………… 1

## 2024年度公開シンポジウム「工学部のこれまでとこれから」から

- 東北学院大学の理系学部の過去・現在・未来 岩谷 幸雄 …………… 2
- 多賀城キャンパスの60年：1962－2022 崎山 俊雄 …………… 6

## 寄稿

- 史資料センター所蔵史料「東北学院年次報告  
(Annual Report of Tohoku Gakuin)」の調査と分析② 藤野 雄大 …………… 33
- 東北学院大学研究ブランディング事業及び  
東北学院宗教センター刊行『水曜通信』への寄稿文 日野 哲 …………… 47

## 2025年度行事紹介

- 仙台市戦災復興記念館「戦後80年 戦災復興展」  
企画展「配属将校と学校教練－東北学院の苦悩－」開催報告 …………… 70
- 2025年度公開シンポジウム「土樋キャンパス百年のあゆみ」開催報告 …………… 72

- 受贈資料一覧（2025年2月～2026年1月） …………… 74

- 東北学院の沿革 …………… 75

## 『東北学院史資料センター年報』 第11号発行にあたって

### 「東北学院デジタルアーカイブス」への期待

院長 大西 晴樹



東北学院は今年2026年に創立140周年を迎える。もちろん、本院は、2036年の創立150周年を中途に中長期計画TG Grand Vision 150を策定・実行し、また史資料センターも東北学院百五十年史編纂委員会を立ち上げて年史編纂作業をスタートさせており、その意味では140周年は通過点に過ぎないのだが、140周年記念事業として、東北学院デジタルアーカイブスを製作し、公開する予定である。

一般にデジタルアーカイブスは、歴史や建物、文化財を記録する資料や画像、音声や映像などをデジタルデータにして保存、デジタル技術を駆使して知的財産として蓄積・統合・整理し、ネットワーク通信技術を活用して、すべての端末から検索・出力でき、持続的な活用が可能となる文字通りデジタル上の史資料である。その利点は、文字情報を中心とした年史よりも、視聴覚に訴えて可視化できることから、いくつかの学校史においても近年急速に普及している。私が知るデジタルアーカイブスには、明治学院創立150周年に製作された明治学院図書館「和英語林集成デジタルアーカイブス」、同「聖書和訳デジタルアーカイブス」、自由学園創立100周年に製作された「デジタルアーカイブ自由学園100年+」などがある。

東北学院のデジタルアーカイブスには、法人が製作した「東日本大震災の記録」がある。今回東北学院創立140周年を記念して製作される東北学院デジタルアーカイブスでは、史資料センターが百五十年史編纂のために蒐集してきた資料や写

真、図面などから以下の3つのテーマが構想されている。一つ目は、三校祖の事績と人柄、二つ目は、戦争と東北学院、戦後復興期の東北学院、三つ目は、泉キャンパス開設、在りし日の多賀城キャンパスである。

創立140周年記念行事は、10月に開催されるホームcomingデーに併せて開催されるが、そこで披露される東北学院デジタルアーカイブスに期待したい。おそらく本院の長い歴史のなかで蓄積されてきた貴重な文書や史料、写真や図面が編集されたうえで公開されると思われる。また東北学院デジタルアーカイブスはその後、HPの一角を占め、本院の建学の精神や本院と地域社会との歩みの可視化、本院所蔵資料の公共財化、アクセス数の増加による東北学院の認知度の向上に寄与し、『東北学院百五十年史』編纂のプラットフォームを形成することになる。可視化された東北学院の歴史が楽しみである。



# 東北学院大学の理系学部の過去・現在・未来

東北学院大学工学部長  
東北学院大学工学部電気電子工学科教授

岩谷 幸雄

## 1. 東北学院における理系学部の系譜

2024年現在の東北学院大学で純然たる理系の学部としているのは工学部しかない。しかしながら、東北学院大学には過去理系の部局が置かれたことがある。1895年に理科専修部がおかれ、3年後に廃止されている。また、第二次世界大戦末期、1944年には東北学院航空工業専門学校が設立され、1945年には工業専門学校と名称が変更されている。当時、キリスト教主義学校であった東北学院には思想統制で廃校危機にあったが、国策に沿った航空の専門学校に改組することで存続を図ったようである。しかし、これも1947年には廃止されている。

## 2. 工学部設置へ向けた動き

その後、1951年に小田忠夫先生が院長・学長に就任し、1957年の『東北学院時報』182号には「何れ仙塩地帯の工業計画と相俟って理工科系の学部の増設の方向に進みたい」という工学部設置に向けた決意のような言葉が掲載されている。工学のような学問に対しては「唯物的思考」を養うものとして反対の声もあったようであるが、キリスト教学校教育同盟の会合において「東北でも理系学部をつくってはどうか」という意見があり（『東北学院時報』197号・1964年）、設置に向けた全国的なサポートの下、1961年に工学部設置準備委員会が設置されている。小田先生の有名な言葉に「東北をして日本のスコットランドたらしめん」という押川先生の理念がある。東北学院創立75周年の記念礼拝において小田先生の、「キリスト教主義学園における理科系職員の養成と補給を図り、進んでは低開発地域としての東北開発のためのキリスト教的信念の豊かな技術者を養成し、ひいては日本現下の技術者養成の国策にも一段の協力を尽くしたいと切望する」という発言があったが（『小田忠夫 回想と追憶』）、大英帝国におけるスコットランドがそうであったように、工業を基に強い東北を目指す思想が存在したことが裏付けられる。

このような強い信念の下、多賀城キャンパスの設

置に向けて動き出す。多賀城キャンパスの場所は、戦時中の軍需工場である「多賀城海軍工廠」の一部であった。敗戦後連合軍に接収されていたが、その後大蔵省の管理下に置かれていた土地である。1961年に大蔵省に払い下げ申請をし、翌1962年に許可された。多賀城キャンパスの当初の利用予定には、工学部の他に宮城県仙台第二高等学校、小学校、中学校、幼稚園、商工高等学校なども含まれていたようである。工学部設置準備委員会は、成瀬政男先生を座長として8名で発足された。工学部設置の趣意書には、機械工学科、電気工学科、応用物理工学科の3学科の設置が明記されている。また、「科学技術者の養成が急務とされ、特に東北地方は着々開発計画が進められている時に私立の理工系大学がなく又国立理工系大学の卒業者は殆んど中央に就職して地元に残留する者が皆無」という文章も見られ（『東北学院百年史 資料篇』P661）、東北に工学人材供給をする工学部の存在意義を改めて感じざるを得ない。教授陣は、東北大学の全面的支援と協力を得て充実したものとなった。

## 3. 多賀城キャンパスにおける工学部組織の変遷

晴れて1962年4月に工学部が発足した。初年度は学科の垣根がない一括募集で学生が入学し、2年生で学科に配属されたようである。当初、設置準備委員会の座長であった成瀬先生が学部長就任予定であったが、中央職業訓練大学校長に就任要請され東京に転出したため、小田先生が工学部長を兼務する状況での船出であった。学科の構成は答申にあった、機械工学科、電気工学科、応用物理工学科の3学科体制であったが、1967年に土木工学科が設置され4学科体制になった。工学研究科の設置は、1年前の1966年である。その後定員を増やしつつ、2002年に機械工学科を機械創成工学科に、応用物理学科を物理情報工学科に、土木工学科を環境土木工学科に改称した。2006年には機械創成工学科を機械知能工学科に、電気工学科を電気情報工学科に、物理情報工学科を電子工学科に、土木工学科を環境建設工

学科に改称している。その後、2018年に電子工学科が募集停止となり、新学科として情報基盤工学科が設置され、電気情報工学科が電気電子工学科に改称された。このように、工学部は時代に要求されている技術に応じ改称・改組を重ね、2022年に60周年を迎えた。人でいえば還暦を迎えたことになる。還暦と言えば、人が生まれ変わるという意味もあるが、翌2023年には多賀城キャンパスから仙台市内の五橋キャンパスへ移転しあらたな歴史を刻むことになったことは、人生にも似た年月に照らして感慨深いものがある。なお、2023年の大学全体の大幅な改組に伴い情報学部が設置されるにあたり、情報基盤工学科の学生募集は停止され、現在工学部は、機械知能工学科、電気電子工学科、環境建設工学科の3学科の体制となっている。

#### 4. 歴代工学部長

前述のように、初代の工学部長は成瀬先生が予定されていたが、都合により小田学長が兼務することになった。第2代工学部長、つまり専任の初代の工学部長は、永井健三先生が東北大学電気通信研究所から迎えられた。永井先生は、1964年から1984年の長きに渡って工学部を率いていただいた。永井先生は、磁気記録の研究者であり東北大学電気通信研究所の初代所長の抜山平一先生の門下生である。多賀城キャンパス3号館と4号館の中庭にあった「創意工夫」の石碑の書は永井先生の直筆のものである。2023年の工学部移転に伴い、石碑は五橋キャンパスの研究棟南に移設され、現在も工学部の学生、教員を見守ってくれている。1980年に同じく東北大学から赴任された二村忠元先生も抜山平一先生の門下生である。二村先生は小職の師匠である曾根敏夫東北大学名誉教授の師匠であり、小職にとっては遠い親戚筋にして先達ということになる。永井先生の顕著な業績としてテープレコーダーの原理である「高周波バイアス法による磁気録音に関する研究」は東北大学電気通信研究所の顕著な発明として展示されており、オーディオの国際学会であるAudio Engineering Societyから功績賞を授与されている。

第3代の学部長は佐藤利三郎先生であり1984年から1999年までお勤めいただいた。佐藤先生は、永井健三先生の門下生に当たる。通信工学の研究者で、環境電磁工学の創始者としても有名である。佐藤先生の時代には、実験棟や大学院の増設が積極的に進められた。第4代中鉢憲賢先生は、超音波の研究者であり1999年から2002年までであった。中鉢先生は

若手研究者の育成に尽力され、2002年に初めて開催された東北地区若手研究者研究発表会は現在でも開催され、東北地区の私立大学、高専を中心とした若手・学生が多く参加する一大イベントになっている。第5代の鹿又武先生では前述の2002年の改組がなされ、第6代の遠藤銀朗先生の時代にはハイテクリサーチセンターが設置され、2006年の改組がされた。第7代の伊達秀文先生時代では、工学総合研究所が設置された。第8代の中沢正利先生では、2018年改組が行われた。小職で第9代の学部長となる。

#### 5. 60周年記念とキャンパス移転に伴う活動

工学部60周年を迎えた2022年は、祝賀行事と共に、多賀城キャンパスから五橋キャンパスへの移転作業が佳境を迎えることになった。10月22日には、東北学院ホームカミングデーが多賀城キャンパスで開催された。翌年のキャンパス移転を控え、長年親しまれた多賀城キャンパスに別れを告げるという意味を込めて開催された。記念礼拝が多賀城キャンパスの礼拝堂で行われ、工学部卒業生の思い出を講演いただくなど旧交を温める行事が行われた。11月30日には、河北新報朝刊に設置60周年を祝う企画広告が掲載された。挨拶文として「仙台駅から最寄りの工学部として、これまでより広く東北地域に貢献して参ります。さらに東北最大の私立総合大学として、他の文系学部の学生と学びを共にする機会を通し、技術のみならず文理融合の意識を持った人材を輩出していきます。」という小職の文章が掲載された。また、環境建設工学科の櫻井一弥教授が60周年を象徴するロゴのデザインを行い学部内で広く使われた。さらには、工学部の現状を周知するために、学部のホームページ上に各教員が作成した1分動画を掲載し、工学部の幅広い研究分野を紹介する取り組みも行われた。

#### 6. 多賀城キャンパスのデジタルアーカイブ化活動

多賀城キャンパスからの移転は、工学部教員にとって新しいキャンパスへの期待と同時に、慣れ親しんだキャンパスへの積年の思いが募ることになった。多賀城に工学部があった様子を100年後にも残したいという思いを持つ教員が中心となり、工学部らしく先端技術を用いたデジタルアーカイブを作成する取り組みが行われた。

機械知能工学科の佐瀬一弥先生は、360度動画撮影をすることで視聴者が視点を自由に変更でき、バーチャルリアリティのヘッドセットにも対応でき

るとして音声を含めた視聴覚体験を保存する取り組みを行った。多賀城キャンパスには、樹齢数十年を超えると思われる桜の樹が沢山あり、新入生を迎える季節には春らしい景色が見られていた。また、冬が多賀城キャンパスを雪の中一周する動画には、雪を踏みしめる音も入っている。さらには、クリスマス時期のイルミネーションの動画などもあり、バーチャルリアリティのヘッドセットを使って自由視点で視聴できる。

環境建設工学科の三戸部佑太先生は、キャンパスのドローンを使った空中撮影を行った。春夏秋冬の同じ位置からの撮影は四季の移り変わりに伴うキャンパスの変化が見て取れる。また、国土地理院の空中写真をもとにした3Dモデルを作成し、1961年の工学部設置前年から2013年までの変遷をタイムマシーンに乗ったように体験することができる。

この他、電気電子工学科の金義鎮<sup>きわうじん</sup>先生も、長期間の定点撮影や建物内の撮影を行う、バーチャルリアリティ体験ができるコンテンツを作成している。

このような取り組みとコンテンツが、多賀城キャンパスの記憶として長く残ることを期待している。

## 7. 礼拝堂とパイプオルガンの多様な組み合わせによる音響測定

小職の専門は音響工学であるが、デジタルアーカイブの一部として礼拝堂の響きの録音を行った。多賀城キャンパスと泉キャンパスには、それぞれ礼拝堂がありパイプオルガンが設置されていた。今回の五橋キャンパスへの移転に伴い、泉キャンパスのパイプオルガンが五橋キャンパスに移設され、多賀城キャンパスのオルガンが泉キャンパスに移設されることになった。1991年の『音響学会誌』のパイプオルガン特集において、永田穂氏は、オルガンは空間の響きと最も密接な関係にある楽器であると言及している。これは、ホールや礼拝空間に固定されるという特色や、空間の音響特性に合わせて整音が行われるなどの理由のためである。今回のオルガンの移設に関して、ホール・礼拝空間とオルガンの組み合わせが多数あり、さまざまな影響を測定することができる世界的にも希有な機会になることから、楽器と音空間の組み合わせで響きがどのように変化するかを調査した。さらには、本学教養教育センター教授でオルガニストの今井奈緒子先生の協力の下、さまざまな礼拝堂とオルガンの組み合わせによって、演奏や響きがどのように異なるかを検証するための録音も行われた。なお、多賀城キャンパス

の礼拝堂の建設当初の音響設計と測定は、前述した二村忠元先生が行っていたが、二村先生の急逝に伴い、当時の東北大学の曾根敏夫教授に引き継がれている。今回の計測は、その1984年以來の測定になる。その測定を行ったのが曾根教授の門下生の小生であることは、何かの導きを感じざるを得ない。

残響時間を測定するために、インパルス応答という音を録音する。ここでいうインパルス応答とは、ステージ上に多面体スピーカを置き、音源を拍手のようなパルスにして、聴取地点で録音したものである。直接音と反射音がどの時間にどのくらいの大きさでやってくるかの情報が分かる。ホールの残響時間は、音の強さが1,000,000の1になるまでに掛かる時間のことである。実際にはインパルス応答からエネルギー減衰曲線を求め残響時間を算出する。今回の測定では、さまざまな特殊なマイクロホンを使用した。残響の測定には騒音計のマイクロホンを用いた。ダミーヘッドマイクロホンは、マネキンの頭と耳との音響特性を含んだ測定が可能である。ダミーヘッドで録音されたインパルス応答を用いることで、残響のない音源にバーチャルな音場特性を加えて、人間の3次元音場知覚に近い音場を提示することができる。これを音場のバイノーラル合成という。Ambisonicsマイクロホンは、多チャンネルのマイクロホンが球状に配置されており、球面調解析という数学を用いたデジタル信号処理によって、測定点に集まる波面を方向ごとに分解することが可能なものである。B-formatマイクロホンはAmbisonicsの簡易版で、4チャンネルのマイクロホンで測定を行うものである。球面調解析を用いた収音をすることで、多数のスピーカを用いて音場を合成することが可能となる。これを音場の可聴化という。以上のようなさまざまなマイクロホンを、多様な座席位置で測定して残響を算出した。また、ホールでは聴取者がいる場合と空席の場合で残響時間が異なる。これは、一般的に、人間が吸音体として作用するためである。これらの違いを測定するために、空席状態に吸音材として全席に布を敷き疑似満席状態でも測定を行った。

泉キャンパスのオルガンがあったときと無いときとの礼拝堂の残響時間3.3秒程度は、ほぼ変わらなかった。一方、同じオルガンを五橋キャンパスへ移転する前後ではオルガンが設置されているときの方が残響時間は短くなった(2.5秒程度)。つまり、同じオルガンでも、ホールへの設置方法によって残響への影響が異なることが分かった。これは大変興味深

い結果となった。

測定には、竹中技術研究所の全面協力を得た。Ambisonicsマイクロホンで録音した今井教授演奏の3次元音場録音は、竹中技術研究所の無響室で視聴することができる。

## 8. 移転後の工学部と東北学院大学の理系の未来について

2023年4月に工学部は五橋キャンパスに移転した。移転後、文系学部との交流の機会が増えたと思われる。また、学生の気質も都心に来てから着るものを含め小綺麗になった感触もある。なにより、五橋キャンパスは仙台の中心部であり、修学へのメリットとしては絶大であると考え。一方、これまで多賀城工業大学的に独立して活動していた教職員であったが、移転以来工学部は東北学院大学の土樋、五橋一体運用されるキャンパスの中の多数ある学部の1つになったことになる。このことは、多くの場合で工学部教員が、多勢に合わせなくてはならない状況を生み出している。外部から見ると一番変化したことは、情報基盤工学科が募集停止になったことであるが、内部の教職員からすると、多賀城キャンパス事務室が、ほぼ工学部事務室として機能していた状況が失われてしまったことが最大の変化ではないだろうか。多賀城では何かあればワンストップで完結していたが、移転後では要件に応じて、行く建物や事務室が異なる。また、教員のメールボックスは研究棟にはなく、高層棟にあるため心理的距離は遠くなったかもしれない。また、五橋キャンパスでは研究棟という1つの建物に全ての教員がいるはずであるが、多賀城キャンパスよりも他の先生に会う機会が少なくなった気がする。新しい環境で、どのように他の教職員とコミュニケーションを取って快適な職場環境を作るかは今後の課題になるかもしれない。

さらに、60周年の祝典行事や、移転の準備、さらには、2020年ころから発生した新型コロナウイルス感染症への授業対応や、情報基盤工学科の募集停止など、工学部にとっても、さまざまな案件が重なってしまう数年間であった。工学部に関わる教職員のストレスや疲弊もあるかもしれない。これに輪をかけて、東北地区の18歳人口の急激な減少は、入学者数へも確実に影響しつつある。このような状況の下、我々は「東北をして日本のスコットランドたらしめん」を忘れずに東北に必要なクリスチャンエンジニアとはどのような人材であるかを随時更新しな

がら、東北学院大学に理系学部がある意義を確認し続ける必要がある。

東北学院大学は、文部科学省が、私立大学・高専強化事業として2024年の第2回公募に応募し、特定成長分野への転換として新たな理系学部の設置に向けて文科省からの支援を受けることになった。応募の時点では、学部名称は「未来探究学部」であった。従来からの学問体系では、機械、電気、土木といった縦割りの学科が設置されていたが、少子高齢化を始めとするさまざまな課題を抱えた現下の東北地区の状況と、人工知能やデジタル技術の急激な普及状況から、東北に必要なクリスチャンエンジニアを再定義することにした。すなわち、「デジタル技術を活用して、東北地域の抱える観光、一次産業、防災・減災などの課題解決に挑む人材」が現代に求められるクリスチャンエンジニアであるとし、東北地区に社会的イノベーションを起こす役割を担う人材を養成することが本学部の目的である。順調に推移すれば、2027年4月の学部設置が期待される。東北が抱える問題は、数年後に日本や世界が直面する問題となる。デジタル技術を活かし、挑戦的に課題解決に臨む人材を養成する。課題先進地域であればこそ、卒業生がさまざまな業態に就職、もしくは起業するなどして東北地区を活性化できれば、ピンチを好転させたモデルケースとして東北地域が世界の一線に躍り出るチャンスに転換できると期待される。東北地区最大の私立総合大学としての本学に理系学部が存在し、東北地区に必要な人材を供給する拠点であり続けることが、大学全体のブランド力も向上させると信じてやまない。

### 岩谷 幸雄プロフィール

IWAYA, Yukio

1967年生まれ。1993年東北大学工学研究科博士課程前期修了。1999年博士（情報科学）を東北大学から授与。1999年より秋田大学鉱山学部助手、講師を経て2002年から東北大学電気通信研究所准教授。2012年から東北学院大学工学部教授。2007年から2009年度まで内閣府上席調査員を兼務。2020年から工学部長。現在に至る。専門は、音響工学。

# 多賀城キャンパスの60年：1962-2022

東北学院史資料センター調査研究員  
東北学院大学工学部環境建設工学科准教授

崎山 俊雄

## 1. はじめに

本稿は、工学部旧多賀城キャンパス（多賀城市中央1丁目13-1）の60年に及ぶ変遷を振り返り、東北学院の歴史の中に、その歩みを位置付けようとする試みの一部である。

旧多賀城キャンパスは、工学部の設置に伴い、1962（昭和37）年に開設された。JR仙石線多賀城駅の北方約500mに位置するその土地は、もともと第二次世界大戦中に多賀城海軍工廠<sup>1)</sup>の工具寄宿舎が置かれ、戦後に駐留米軍や関係者の住宅地に転用されて使用された場所だった。以来60年。東北の私学として最も歴史ある工学部は、2023年3月に五橋新キャンパスへ移転した。役割を終えたキャンパスでは、2025年の夏までにすべての施設が解体され、かつてのキャンパスは更地となった。

広い敷地に複数の建物が集合して複合体を成し、時間と共に形態を変化させる大学キャンパスの変遷は、生活史、教育史、あるいは都市史的背景の上に、大学が時勢に応じて成した意思決定の結果を教えてくれる。とりわけ、失われてしまったキャンパスにとっては、残された記録が過去を振り返る貴重な手がかりとなる。本稿ではこうした視点から、試みにその成立過程の時系列的整理に重きを置きつつ、多賀城キャンパス60年の変遷過程を素描してみたい。

## 2. 東北学院における理工科系教育の沿革

- 1895(明治28)年 従来の予科3年・本科4年を廃し、普通科5年の上に文科専修部と理科専修部(2年)を設置
- 1898(明治31)年 理科専修部廃止
- 1944(昭和19)年4月 東北学院航空工業専門学校設置
- 1945(昭和20)年12月 東北学院航空工業専門学校を東北学院工業専門学校に改称
- 1946(昭和21)年4月 東北学院専門学校(英文科・経済科)設置
- 1947(昭和22)年 東北学院工業専門学校廃止
- 1949(昭和24)年4月 東北学院大学(文経学部英文学科・同経済学科)設置

- 1962(昭和37)年4月 大学に工学部(機械工学科・電気工学科・応用物理学科)を増設
- 1966(昭和41)年4月 大学院に工学研究科修士課程(応用物理学専攻)を設置
- 1967(昭和42)年4月 工学部に土木工学科を増設
- 1968(昭和43)年4月 大学院工学研究科に博士課程(応用物理学専攻)を増設
- 1971(昭和46)年4月 大学院工学研究科修士課程に機械工学専攻および電気工学専攻を増設
- 1974(昭和49)年4月 大学院工学研究科博士課程に機械工学専攻および電気工学専攻を増設
- 1990(平成2)年4月 大学院工学研究科修士課程に土木工学専攻を増設
- 1992(平成4)年4月 大学院工学研究科博士課程に土木工学専攻を増設
- 2002(平成14)年4月 機械工学科を機械創生工学科に、電気工学科を電気情報工学科に、応用物理学科を物理情報工学科に、土木工学科を環境土木工学科に改称
- 2006(平成18)年4月 工学部を機械知能工学科・電気情報工学科・電子工学科・環境建設工学科の4学科に改組
- 2017(平成29)年4月 工学部を機械知能工学科・電気電子工学科・環境建設工学科・情報基盤工学科の4学科に改組

## 3. 多賀城キャンパスの取得と工学部設置の経緯

### 3-1. 設置構想の萌芽

東北学院の歴史上、理工科系教育は、工学部設置以前に2度行われていたことが知られている(前章参照)。1度目は1895(明治28)年に設置された理科専修部(1898年廃止)、2度目は第二次世界大戦下の1944(昭和19)年に東北学院の存続のために設置された航空工業専門学校(戦後工業専門学校に改称し、1946年廃止)である。しかしながら、これらはいずれも短命に終わった。結果的に東北学院は、創立から70余年をほぼ一貫して文科系教育機関として存続してきたと言える<sup>2)</sup>。そのような東北学院に

において、初めて長期間に渡って成した理工科系教育の試みが、工学部であった。

戦後の東北学院大学が、理工科系学部設置への意思を公にした記録の初見は、1957（昭和32）年12月8日付の『東北学院時報』<sup>3)</sup>と見做される。ここで院長・小田忠夫が記した「母校の現況と展望」と題した文章の中に次のような記述がある。これを見ると、この時期、①新制大学の完成、②米国からの支援を受けるための五ヶ年計画の立案、③多賀城キャンプの土地払下げ問題、④社会的背景としての仙塩工業都市計画などが重なりあって、理事会の中に、多賀城における理工科系学部の増設計画が芽生えていったことを読み取れる<sup>4)</sup>。

…大学は今年で発足以来九年目にあたり、文部省から定められた設置条件の総てが充足出来たので、教員任用の自主性を認められることになりました。このことは今後大学の運営の上に大きなプラスとなることは疑いありません。

…（中略）…

戦後の学園の内容整備についてはアメリカの御援助が極めて大きかったのは言うまでもありません。しかも尚、今年に至り今後の五ヶ年プランを出せとの御好意の表明がありましたので私たちはこの為のプランとして三十三年以降の計画を内外協力会の手を経て提出いたしました。一方また最近米軍の引揚に伴い多賀城キャンプの土地払下の問題が起つたので、理事会の決議によりその払下の申入れを行つています。

何れ仙塩地帯の工業計画と相俟つて理工科系の学部の増設という方向にも進みたいと希望をかけている次第であります。…

なお、この時点で東北学院が多賀城に「総合運動場」（現在の笠神運動場）を備えていた（1953年開設）事実も見逃せない。現在の陸上自衛隊多賀城駐屯地に接するこの場所もまた、東二番丁・土樋両校地の狭隘化を背景に、海軍工廠跡地（駐留米軍用地）の払下げを受けて整備したものであった<sup>5)</sup>。東北学院はこの時期、自らの将来的発展を考える中で、多賀城の地に大きな可能性を見出していたことが示唆される。

さらに小田は、翌1958（昭和33）年5月5日付の『東北学院時報』<sup>6)</sup>の中で以下の説明を著す。ここからは、理工科系学部の設置を前提とした多賀城の用地取得に向けて、具体的な動きのあったことも読み

取れる。

南六軒丁の大学も校庭の一部に六百坪の体育館を建設中なのでグラウンドとしての価値がすっかりなくなりましたので、どうしても新しい敷地を必要とする段階になりました。多賀城の約二万坪を（前掲「総合運動場」：筆者註）これからもつともつと活用するつもりでいます。なおアメリカ軍の引あげ後の土地約五万坪が多賀城にあるので目下その買収の交渉中ではありますが、仲々の大金で之には余ほどの決心を必要とします。

目下の構想としては、理工科系統の大学を創設して、仙塩工業地帯としての多賀城に学園設置を実現してはどうかということです。然しこれには最少限度五億から十億の資金を必要とするので、早速おいそれとは行きませんが、学院も日本教育の転換期に如何に処すべきかの段階にさしかゝつて来たようにも思われます。これについては特に同窓生皆様からのすぐれた御意見を承りたいと思います<sup>7)</sup>。

### 3-2. 国有財産売払申請

一方、東北学院が多賀城を候補地とする理工科系学部増設への意思を公にした1957（昭和32）年12月には、学院内外にもう1つの動きが起こる。それは1959（昭和34）年の分校開設（現在の東北学院榴ヶ岡高等学校）に結実する動きなのだが、のちに工学部設置準備委員を務め、そのまま電気工学科の教授に着任した遠藤義夫は、当時の様子を次のように記録する<sup>8)</sup>。

…昭和三十二年十二月、仙台市中学校長会々長千葉武州殿より、貴高等学校の受入学生数は是非増やしてくれるようにとの歎願書…（中略）…が、出て来たので、学院としては、これを受けて立つことにした。それには、<sup>(ママ)</sup>どうしても分校増設用の土地が欲なくなつて来た<sup>9)</sup>。

そこでその土地の物色中…（中略）…多賀城の遊休地が、目にとまり…（中略）…是非欲しいものたとなった。<sup>(ママ)</sup>

小田が前掲「母校の現況と展望」（1957年12月8日付『東北学院時報』）で述べた「多賀城キャンプ」に対する「払下の申入れ」が具体的に如何なる内容だったかについては資料を欠く。しかしながら、上

記の高校増設問題を挟んだ1958（昭和33）年に、学校法人東北学院（理事長・鈴木義男）から東北財務局（局長宛）に提出された「国有財産売払申請書」（申請面積50,000坪）の控えが残る（6月2日付）。以下やや長くなるが、多賀城校地の取得経緯を伝える貴重な記録と考えられることから、以下に全文を抜粋しておきたい。

### 旧多賀城海軍工廠（多賀城住宅地区） 売払を受けようとする理由

東北学院は明治19年キリスト教主義の学校として発足以来74年の歴史を有しその間幾多変遷を経たるも現在中学校、高等学校、高等学校二部、大学と一聯の教育体系を整え中学校959名高等学校905名、高等学校二部508名、短期大学は英文、経済、法科の三科に1,207名大学は英文学科、経済学科の二学科に2,653名合計6,232名の学生、生徒を擁しこれに関与する専任の教職員は実に220名に達する学園を形成するに至つたのであります

中学校、高等学校、高等学校二部は東二番丁に4,731坪の校地と延2,063坪の校舎を有し、大学及び短期大学は南六軒丁に9,869坪の校地と延4,019坪の校舎、研究室、図書館、体育館等あり殆ど空地なき現状で大学の運動場は幸い先年多賀城笠神に国有地の売払をうけこれを全面的に利用いたして<sup>(ママ)</sup>ます

然し乍ら現状においても学校の基準に照らすとき（第6号表参照）極めて狭隘であり将来の発展に対応する施設を講ずること不可能で少くとも5万坪以上の校地を必要としこれを仙台附近に求めることは不可能であります

幸い今回多賀城海軍工廠返還せられたるにつきこの際下記計画に基づく用地として5万坪以上の売払を受けたいのであります

#### 記

#### 利用計画

- |                              |         |
|------------------------------|---------|
| 1. 第二高等学校新設                  | 13,500坪 |
| 2. 中学校、高等学校運動場               | 10,000〃 |
| 3. 商、工高等学校新設                 | 29,250坪 |
| （将来短期大学改正せられる<br>専門大学にせんとする） |         |
| 4. 大学教養部移転                   | 11,400〃 |
| 5. 中学校、小学校、幼稚園敷地             | 13,130〃 |

（多賀城住宅地区が発展して

これが必要を生じるとき設置）

合 計 77,280〃

学校基準から算定したる場合77,280坪を要するも約50,000坪以上あればこれを総合的に利用することが出来る

なお理工科大学の新設いたしたきも相当多数の資金を要し短期間には設置困難であります

理工系の人材養成については政府においても相当の援助を考究中であり又先般ミツシヨンボード議長ブランボー博士の日本視察報告によると日本の現状においては理工科大学の育成に対しては相当の資金、設備の援助を要することを力説している点を考察するときこれが時期到来も期待し得られこの場合東北、北海道のキリスト教主義学校においては本院がマークせられ多賀城地区周辺が東北開発、仙塩開発と併せ最も適当と思料せられるので一応前記施設を講じ置きたいのであります

#### 次に各施設毎の事由

##### 1. 第二高等学校新設

東北学院高等学校は現在東二番丁校舎に900余名の学生を収容しているが高等学校第一学年は東北学院中学校卒業者がそのまま進学するので他中学校からの入学の余地なく仙台市の中学校卒業生で高等学校に進学出来ぬ者約300名と推定せられこれらの生徒は再び中学校に席を置くか大河原、岩沼等周辺の高等学校に入学して汽車通学をしている現状でこのため別紙の通り市内中学<sup>(ママ)</sup>長会から学級増加の請願あるも現在の校地では校舎の増築の余地なく多賀城に第二高等学校を新設して世の要望に即応いたしたい

##### 2. 中学校、高等学校運動場

戦前東二番丁の中学校は校地6,382坪に延868坪の校舎で約1000名の生徒を収容して経営していたが戦後の学制改革によつて中学校及び高等学校に改組し現在中学校959名、高等学校905名を収容して授業をしています

然し乍ら終戦後の都市計画により校地6,382坪の中1,651坪が接収せられ現在4,731坪に縮小し更に868坪の校舎も東二番丁道路拡張のため275坪が除去せられることになりました 校舎は生徒を収容するに足るよう5棟1407坪増築して現在延2,603坪の校舎等を有し授業上支障なく運営しています 以上のような実情で運動場に使用出来



表1 1958年6月2日「国有財産売払申請書」に記載された年次計画

年次	区分	施設	構造	建坪	工費	備考
34年		第二高等学校新設 1学年定員150名 9学級.収容450名	木造二階建	500坪	20,000,000円	
35年 ~38年		商工高等学校新設 商業科1学年定員100名 6学級.収容300名 工業科1学年定員150名 9学級.収容450名 工業科諸施設	木造二階建 木造平家(特殊教室) 木造二階建 木造平家(特殊教室)	180坪 150坪 270坪 600坪	48,000,000円 10,000,000円	三ヶ年計画
39年 ~42年		大学教養部移転 諸施設	コンクリート三階建	1,300坪	78,000,000円 8,000,000円	三ヶ年計画
		第二中学校 1学年定員150名 9学級.収容450名 小学校 1学年定員80名 12学級.収容480名 幼稚園 2学級 80名	木造二階建 木造二階建 木造平家	500坪 500坪 120坪	20,000,000円 20,000,000円 5,000,000円	年度に拘らず住宅地として 発展し、これが必要を生じ た場合実施する.
		計		4,120坪	209,000,000円	

さて、以上のように、当初理工科系学部の増設構想(1957年12月8日付『東北学院時報』)から始まった旧多賀城海軍工廠用地取得の動きは、ほぼ同時期に寄せられた中学校長会からの嘆願等の影響もあってか、半年後の「国有財産売払申請書」において大きく計画内容を変えることとなった。

一方、小田が目指したのは、あくまでも当初の目論見通り理工科系学部の増設だったと見做される。あるいは前掲「国有財産売払申請書」に「米国から理工科大学の援助ある場合等はさらに計画を検討する場合も生ずることがある」と付記された点は、そうした意思の表れだったとも考えられる。事実、「国有財産売払申請書」から1か月後の1958(昭和33)年7月8日には、『河北新報』に「学院大 多賀城に理科系大を設置」との見出しで以下の記事が掲載されている。

東北学院大は多賀城町に理科系の選科大学を設置する計画をたて、このほど多賀城町留ヶ谷の旧アメリカ軍住宅跡五万坪の払下げを東北財務局に申請した。同大は東北にミッション系の理科大学がないのでかねてから理科大学の設置を計画していた。それがキリスト教学校教育同盟会と内外協力会から資金援助を得ることになり多賀城町に設置することを決めたもの。

予定地は仙石線多賀城駅から徒歩約五分の留ヶ谷にある旧アメリカ軍住宅地で敷地五万坪

の小高い丘。旧アメリカン・スクールや住宅がそのまま残され、電灯施設から給水施設まで完備している。同地は米軍から返還後、すでに国家公務員合同宿舎、陸上自衛隊単独宿舎、多賀城町役場その他に払下げられているが、同大が希望している地帯には請願者はなく払下げには有利な条件にある。このため町当局でも「ほぼ学院大に払下げられることは間違いない」とみており、すでに正門前の地帯ではその実現に備えて地代も値上りをみせているという。これが実現すれば多賀城町は大代旧海軍工廠の工場地帯のほか、新しく大学をもつことになり、工場と大学の町として大いに発展できると地元では大いに期待している。

▷小田学長の話=予算は完成までに五億円ぐらいかかるが、すでに地代として十萬ドルの援助を得たので払下げを申請した。理科系大学のほか、中、高校と将来は大学ジュニア課程の分校にも使いたい構想だ。

▷東北財務局林原管財部長の話=仙塩総合開発の面からも、工場誘致ばかりでなく、大学設置の目的は理想的だ。計画を検討したうえ、国有財産審議会東北部会にかける予定だ。

▷賀川町長の話=ほかに請願者がいないというので学院大に払下げられることは間違いないだろう。町としてもいまから受入れ準備を進めるつもりだ。

### 3-3. 校地の取得

前掲「国有財産売払申請書」の内容は、その後東北財務局で検討・調査され、1960（昭和35）年12月6日に開催された国有財産東北地方審議会で「随意契約により減額売払うことが適当」と判断された。一方、前後して小田は、この年5月7日付の『東北学院時報』で次の報告を行っている<sup>10</sup>。然るに米軍キャンプ跡地の取得へ大きく前進したのは、ほぼこの頃であったと見ることができる。

宣教二世紀に入る一九六〇年は東北学院にとつては創立七十四周年にあたっています。この年われらは多年望んでいた校地拡張予定地多賀城の米軍キャンプ跡の五万坪の払下がほぼ確定したことは何としても喜びにたえない。現在の旧市内にある敷地は大学にとつても高校にとつても充分ではない。といつて私立は経営上の立場から市外への移転は困難とされている。にも拘らず現状をもつて満足されないのとおりあえず仙塩地区の将来の発展を考えて白羽の矢をこの地に立てた所おおかたの好意によつて確定を見たことは感謝にたえない。

キリスト教精神にたつ総合学園をつくることは夢のように思われるかもしれないが、キリスト教学校教育同盟の会合において東北でも理科系学部をつくつてはどの要望があり、東北学院の使命としてそんなことも考える段階ではあるまいか。

…（中略）…大学は一般教養豊かな専門家を教育する為の場としてまだまだ改善の方向に進まねばならぬことはいうまでもないが、単純な技術家文を造る方向にむけられてはならない人間性のゆたかな人材こそ必要なのだ。その意味でキリスト教系大学に理科系、技術系の学部の増設は誠に願わしいことである。

さらに小田は、国有財産東北地方審議会の答申を経た12月10日付の『東北学院時報』で「創立七十五周年は来る五月頃に行われる筈であります…（中略）…多賀城町に残っている官有地（旧米軍用地）の払下も近く確定する段取に進んでいるので東北学院将来の発展のために、画期的な大きい構想がうち出されてもよい段階に来ているのではあるまいかと、考慮中であります」<sup>11</sup>と述べて構想の実現に

強い期待感を示し、翌1961（昭和36）年7月1日付の『東北学院時報』において、創立75周年記念事業の一端として「既設の榴ヶ岡高校の多賀城移転、及び工業高校の新設と、この外に理工科系の学部の設置」を理事会で決定したことを報告した上で、「それに要する教職員組織、並びに設備計画の見と<sup>(ママ)</sup>うしを急ぎ、理工学部の増設へ邁進いたしたい」と述べる<sup>12</sup>。当初（1957年12月）から「希望をかけ」ながらも「相当多数の資金を要し短期間には設置困難」と見ていた「理工系の学部の設置」構想は、小田の強い想いを受けて、ここに至り大きな結節点を迎えたと言える<sup>13</sup>。一方、東北財務局内で結論の出た用地の払下げ手続きについては、同1961（昭和36）年9月25日付で東北財務局より大蔵大臣に承認申請され<sup>14</sup>、翌1962（昭和37）年2月27日付で決裁された<sup>15</sup>。後述する『東北学院大学工学部増置認可申請書』が昭和36年9月10日付で提出され同37年2月17日に決裁されているから<sup>16</sup>、日付の上では、工学部の設置が認可されてから用地の払下げが確定したことになる<sup>17</sup>。すでに工学部の開設は1か月後に迫っていた。

### 3-4. 工学部設置準備委員会と新設趣意書

工学部の新設に際しては、まず「工学部設置準備委員会」が組織された。発足したのは1961（昭和36）年4月1日、委員は小柴文三郎、遠藤義夫、仁科存、野邑雄吉、成瀬政男、和田正信、福本喜繁、棚沢泰の8名で、このうちの成瀬と棚沢は、東北学院が戦中に設けた航空工業専門学校でも講師を務めた人物だった<sup>18</sup>。またその大きな特徴は、かねてより用いられてきた「理工系の学部」の呼称が「工学部」に置換されている点である。いよいよ「工学部」の名称が学内外に明示されることになった。

工学部設置準備委員会は、発足から3か月後の7月10日付けで「東北学院大学工学部新設趣意書」を作成し、公表した。その内容に照らせば、もとより準備委員会の発足時には学科構成や教師の陣容がかなり固まっていたと推察されるが、それ自体、工学部設置の背景と基本理念を端的にまとめた最初の公的書類として、特筆される。すでに『東北学院百年史』にも引用されている内容だが、工学部創立の歴史を考える上で外せない文書であると考えられることから、紙幅を割いて改めて引用しておく。

東北学院大学工学部新設趣意書

学部学科 (昭和三十七年四月新設)

東北学院大学工学部 機械工学科  
電気工学科  
応用物理学科

校 地

宮城県宮城郡多賀城町留ヶ谷(三三、七〇七坪)  
(仙台駅から国電二十分・多賀城駅から徒歩五分)

校 舎

鉄筋コンクリート三階建一部一階建  
延 一、三〇〇坪  
木造モルタル平家(教室、実験室)八四〇坪  
木造平家(実習室) 四〇〇坪  
第二期工事鉄筋コンクリート三階建予定  
一、〇〇〇坪

東北学院は明治十九年押川方義、ウイリアム・イー・ホーイ両氏によつて創立され昨年創立七十五周年を迎え、これが記念事業として本年四月工学部を新設発足することになりました。創立以来幾多時代の変遷によつて種々困難に遭遇しましたが先駆者によつて培われた基督教主義に基く人格教育の伝統を正しく継承して今日に至つてます。この間二万数千名の卒業生を輩出し社会の各層に顕著な活動をしています。戦後教育制度の改正によつて大学、高等学校、中学校と一連の教育体系を整え現在学生、生徒五千数百名を抱擁して東北地方における私学として重きをなしています。しかしながら戦争末期に一時工業専門学校を設置しましたが戦後文科系に転換したため現在大学は英文、経済の二学科の文科系のみであり今日、日本の現状から科学技術者の養成が急務とされ特に東北地方は着々開発計画が進められている時に私立の理工系大学がなく又国立理工系大学の卒業者は殆んど中央に就職して地元に残留する者が皆無の状況であります。

この際本学において工学部を新設して基督教の精神を基盤として思想的に穏健な技術者を養成することは東北地方の工業振興に寄与すること多く又現下の情勢に則応するものと信ずるものであります。なお、本学は米国伝道局の援助によつて多数の米国人教師が派遣されておるため実社会に出て役立つ語学教育にも一層の努力をいたしたいと存じます。

工学部新設の最も困難なことは優秀な教員組織であります幸い東北大学の全面的支援と協力を得て充実した教授陣容を得たことは誠に喜びとするところであります。

設備に関しては大学完成時、昭和四十年までに年次計画によつて整備する方針であります。

なお、校地は多賀城所在国有地の払下げをうけ目下校舎等建築中ではありますが、多賀城は仙台塩釜間の国道筋に沿い国電仙石線の多賀城駅があり仙台から約二十分極めて交通の便に恵まれた地であります。又この附近一体は工場誘致帯で既に日立、ソニー、東北電機製造、福岡製紙多賀城製鋼、東洋刃物、仙台鑄工等十数社建設されており今後益々発展途上にあり又隣接地塩釜には東北電力火力発電所、その他工業系の会社多く学生の実験、実習に至便、又相互技術研究提携を行う等所謂産学協同の線に沿い、実際に技術を体得する得色ある大学にいたしたく念願するものであります。

更に将来建設工学科、工業経営学科等社会の要請に応じこれを増設し地方発展に貢献いたしたく存じます。

なお本校地は戦後駐留軍が住宅地として使用し、後に施設等そのまま返還されたもので、これ等の住宅は現在公務員、自衛隊、多賀城附近の会社の住宅となり戸数二百余戸又附近には町役場農業共同組合等あり町の中心をなして民家五百余戸存しています。

地方からの幼稚園設置の強い要望に応え、本年四月から町役場向い園地七〇〇坪、園舎一五八坪、八十名の園児を収容して基督教の精神に基いて幼児を保育し適当な環境を与え、その心身の発達を助成しようとするものであります。

記

一、設立場所 多賀城(旧海軍工廠跡)

国有地払下(別紙見取図参照)

坪 数 三三、七〇七坪

(仙石線多賀城駅から徒歩五分)

附近は工場地帯で既に工場十数社建設されている。)

一、開設予定時期 昭和三十七年四月一日

一、学部学科構成及び学生一学年定員

工学部	機械工学科	五〇名
	電気工学科	五〇名
	応用物理学科 物理課程	三〇名
	応用物理学科 計測課程	三〇名

一、教員組織 目下交渉中で八〇%程度予定  
されている。

一、校舎・研究室・実習室等

第一期（開設当時）

鉄筋コンクリート三階建 一、二〇〇坪

敷地内既設建物利用 七〇〇坪

第二期（一九六四～一九六六）

鉄筋コンクリート三階建 一、二〇〇坪

鉄筋コンクリート二階建 四〇〇坪

一、その他 設備及び図書

昭和三十六年七月十日

学校法人東北学院理事長 鈴木 義男  
院長 小田 忠夫  
東北学院大学 後援会長 一力 次郎

以上が「東北学院大学工学部新設趣意書」の全文である。工学部が、「科学技術者の養成が急務とされ特に東北地方は着々開発計画が進められている時に私立の理工系大学がなく又国立理工系大学の卒業者は殆んど中央に就職して地元に残留する者が皆無」であるとの認識の上に、「基督教の精神を基盤として思想的に穏健な技術者を養成すること」および「東北地方の工業振興に寄与すること」を主たる目的として設置されたことが示されている。特に教育面では、周辺に「工業系の会社多く学生の実習、実験に至便、又相互技術研究提携を行う等所謂産学協同の線に沿い、実際に技術<sup>(ママ)</sup>を体得する得色ある大学」を構築できる点を強調し、他方、工学部の設置に際して「最も困難」な「優秀な教員組織」の構築に関しては、「目下交渉中」で「八十%程度」の決定状況とするも、「東北大学の全面的支援と協力を得て充実した教授陣容を得た」とする。また将来的には「建設工学科、工業経営学科等社会の要請に応じこれを増設し地方発展に貢献いたしたく」との計画も示されている。一方、用地に関して言えば、国有財産東北地方審議会による払下げの答申こそ出たものの（1960年12月6日）手続き的に確定には至っていない中で、すでに「校地は多賀城所在国有地の払下げをうけ目下校舎等建築中」であるとし、とりわけ「本年四月」、すなわち工学部設置準備委員会が組織された1961（昭和36）年4月から先行して幼稚園が開園されていたことも記述されている。工学部の開設（1962年4月）に合わせて新築が計画された鉄筋コンクリート造三階建ての校舎（3号館）の設計ができ、建築確認が下りて着工されたの

も、1961（昭和36）年11月下旬頃だった<sup>19)</sup>。様々なことが、同時並行で進んでいた。

なお、東北学院が工学部を開設した1962（昭和37）年の時点において、理工科系の学部を備える私立大学は全国に38校のみであった。勿論、東北地方には他に皆無で、またキリスト教主義の学校に限って見れば、全国でも関東学院、立教学院、同志社、関西学院の4校に過ぎなかった。東北学院大学における工学部の設置は、全国的に見ても先進的な試みであったことが知られる。

### 3-5. 工学部設置認可申請書

工学部設置準備委員会（1961年4月1日）の発足から数えて5か月、先の「工学部新設趣意書」の公表から数えるなら2か月、東北学院は、1961（昭和36）年9月10日付けで以下の内容（目次）から成る『東北学院大学工学部増置認可申請書』を文部省に提出する<sup>20)</sup>。

- 一、東北学院大学工学部増置要項
- 二、学則
- 三、校地（図面添付）
- 四、校舎等建物（図面添付）
- 五、図書標本機械器具等施設概要
- 六、学部及び学科別学科目又は講座
- 七、修業年限履修方法及び学士号
- 八、学部及び学科別学生定員
- 九、職員組織
- 一〇、設置者に関する調
- 一一、資産
- 一二、維持経営の方法
- 一三、開設年次
- 一四、現在設置している学校の現況
- 一五、将来の計画

いまこれらをここに全て掲載する余裕は無いが、例えばその基本理念を記した「一、東北学院大学工学部増置要項」は、前掲「工学部新設趣意書」とほとんど同一の内容であった。また1962（昭和37）4月とする「開設年次」についても、1学年あたり機械工学科50名・電気工学科50名・応用物理学科60名とする「学部及び学科別学生定員」についても、趣意書からの変更は見られない。一方、より具体的な計画に関して言えば、「三、校地」には敷地実測図（校舎等に転用された既存施設を含む）<sup>21)</sup>、「四、校舎等建物」には新築予定校舎（3号館）の平面図<sup>22)</sup>

が添付され、「六、学部及び学科別学科目又は講座」「七、修業年限履修方法及び学士号」には教育課程、「九、職員組織」には担当教員の構成や経歴が記されるなど、工学部の設置計画を詳しく伝える。「一五、将来の計画」では、従来の延長線上に①「発足に当たり機械工学科、電気工学科、応用物理学科を設置するも、一応四ヶ年経過後においては応用化学科、土木・建築学科、工業経営学科等を設置する計画のもとに準備を進めたい」と記した上で、さらに②「学生の実験、実習、見学に対しては所在各会社よりの申出もあり、夏季休暇を利用しこれを行うと共に、各会社から特殊講義として実際技術にたづさわっている者の指導を受ける予定である」こと、③「校地三三、七〇七坪で、他に多賀城に一六、〇〇〇坪の運動場あるにつき数学科増設しても充分」であること、および④「戦時中工業専門学校を経営したるも、機械器具は処分し多少の図書を有するのみで、発足に当たり二、〇〇〇万円をこれ等設備に充当し」、さらに完成年度までの3年間は各3,000万円の充当を計画していることが述べられている。

以下、鉄筋コンクリート造新築校舎（3号館）の平面図を図2に、その完成予想図（透視図）を図3に、「東北大学の全面的支援と協力を得て」（工学部新設趣意書）選任された教員のうち専門教育を担当した専任教員（教授・助教授・講師）の一覧を表2-1～2-3<sup>23)</sup>に示す。新築校舎（3号館：図2,3参照）を設計したのは、土樋キャンパスの現大学院棟（旧シュネーダー記念東北学院図書館, 1953年竣工：登録有形文化財）を設計し、のちに宮城県民会館（現東京エレクトロンホール宮城, 1964年竣工）や仙台市庁舎（前庁舎, 1965年竣工）を設計した山下寿郎設計事務所の仙台支社だった。また表2-1～2-3から専任教員の経歴を見れば、それぞれ機械工学科11名のうちの6名が、電気工学科9名のうちの7名が、そして応用物理学科10名のうちの7名が東北大学の卒業生・修了者であったことが分かる（計30名中20名）<sup>24)</sup>。東北大学で教員や研究員・助手・実験補助員等として在籍した経験を有する者は、認可申請書に経歴書を確認できる21名のうち、16名に上る。

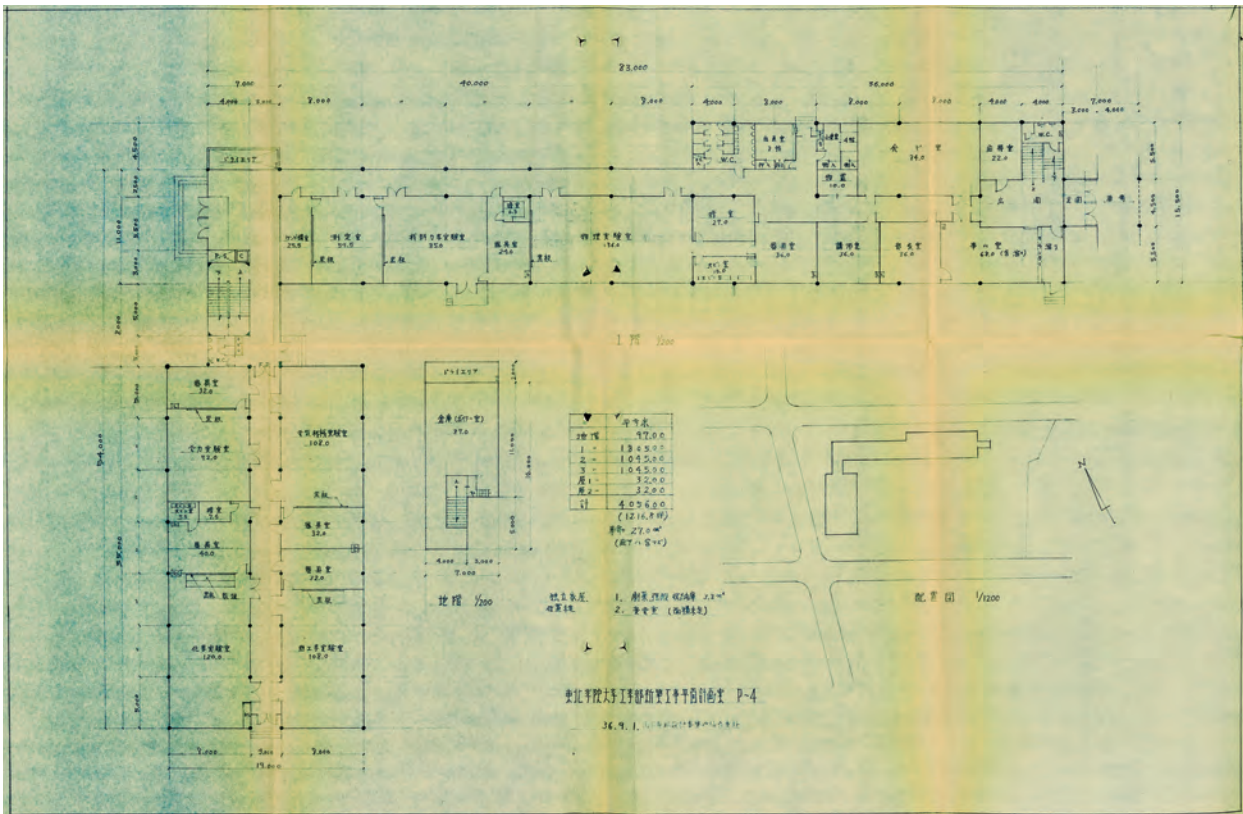


図2 設置認可申請書掲載の新築校舎（3号館）1階平面図（昭和36年9月1日案）

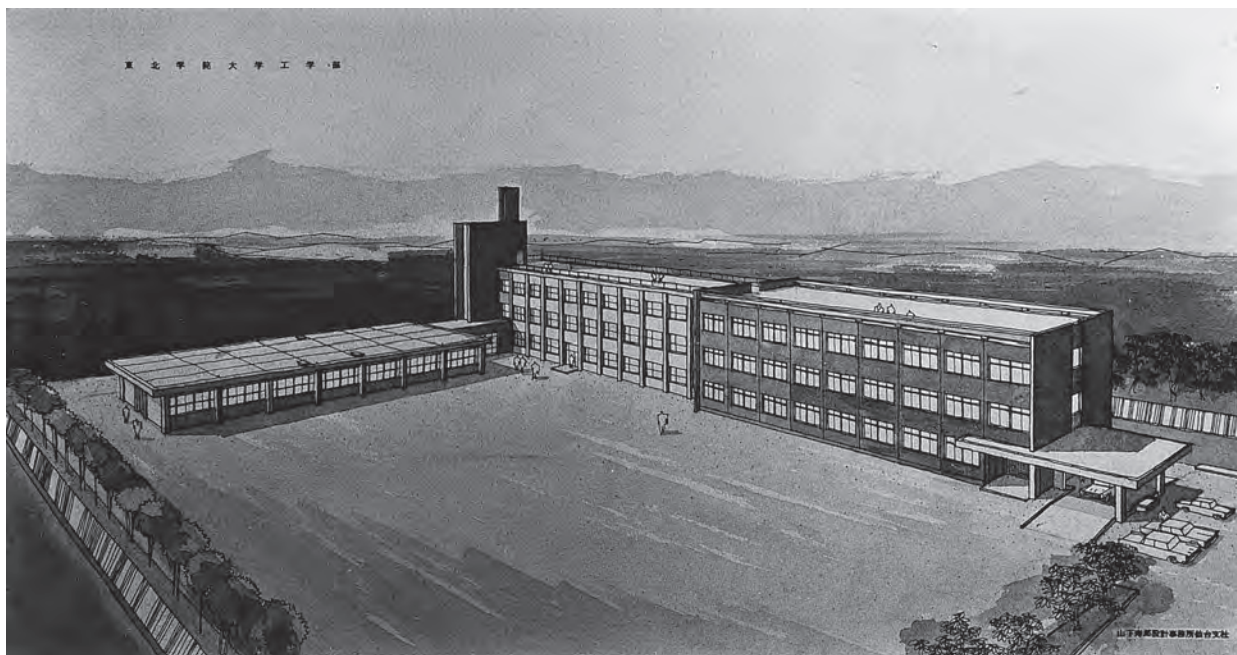


図3 新築校舎の完成予想鳥瞰図（国立公文書館蔵）

表2-1 開設時の機械工学科専任教員（1962-65）

着任年月日	昭和37年			昭和38年			昭和39年				
	教授	助教授	講師	教授	講師	教授	助教授				
氏名 (生年月日)	小柴文三郎 (明治29.3.30)	佐藤恭三 (昭和4.12.8)	移川貞次 (明治28.7.28)	福田鉄太郎 (明治35.4.18)	増本量 (明治28.1.9)	太田和一 (明治37.8.5)	飯沼一精 (明治30.6.18)	松山多賀一 (明治36.9.23)	松山徳蔵 (明治30.4.1)	高橋幸一 (大正8.7.1)	笠原俊郎 (大正15.9.15)
担当学科目 又は講座	機械力学 全 演習	蒸気原動機 冷凍及暖冷房	図学 工作実習 機械設計製図	機械工作実習 機械設計製図	機械材料学	塑性学 塑性加工 溶接工学	材料力学 全 演習 弾性学	機構学 機械力学	機械工作 工作機械	自動車工学 空気機械	測定工学 機械設計
最終卒業学校 学部/研究科 学科/専攻 (卒業年月)	東京大 工学部 機械工学科 大正一〇.六	東北大(院) 工学研究科 機械工学専攻 昭和30.3	九州大 工学部 機械科 昭和4.3	仙台高工 機械工学科 大正14.3	東北大 理学部 物理学科 大正11.3	宮城県工業 機械電気科	仙台高工 土木工学科 大正12.3	東北大 理学部 物理学科 大正15.3	東北大 工学部 機械工学科 大正15.3	東北大 工学部 航空学科 昭和18.9	東北大 工学部 工業力学科 昭和25.3
学位	工学士	工学修士	工学士		理学博士	理学博士		工学博士	工学士	工学博士	工学博士
国籍本籍	東京	宮城	福島	宮城	広島	宮城	宮城	和歌山	東京	神奈川	東京
前職	山形大学 工学部 教授(定年)	東北大学工学部 機械工学科助手	内務省東北土 木出張所技官	宮城県工業高 校長 東北学院嘱託	東北大学 名誉教授	東北金属工業 株式会社	東北大学 工学部 講師(定年)	東北大学 教授	山形大学 工学部 教授	米国で歯車加 工技術研究に 従事	日立製作所 機械部
東北大職務経歴	講師	助手	(仙台高工講師)	助手	教授・評議員	金研職工	講師	教授	教授	無	無

表 2-2 開設時の電気工学科専任教員 (1962-65)

着任年月日	昭和37年		昭和38年	昭和39年					
	教授	教授	講師	教授	教授	助教授	講師	講師	講師
氏名 (生年月日)	遠藤義夫 (明治37.9.9)	仁科 存 (明治36.9.17)	佐々木迪之 (昭和5.7.28)	宮本敏彦 (大正9.1.18)	永井健三 (明治34.3.21)	佐藤義信 (大正15.2.13)	荒井源三郎 (明治22.12.19)	萩野 実 (昭和5.7.11)	大友五郎 (明治36.7.30)
担当学科目 又は講座	無線工学 伝送回路網学 生産管理	電気材料学	電気磁気測定法	電子工学 電子回路学	電磁気学 交流理論	有線工学 電気応用計測 電気材料学	電気機械学 (直流機)	電子回路学	電力工学 電気材料学
最終卒業学校 学部/研究科 学科/専攻 (卒業年月)	東北大 工学部 電気工学科 昭和3.3	東北大 理学部 物理学教室 昭和3.3	仙台工専 (仙台高工) 電気科 昭和26.3	東北大 工学部 電気工学科 昭和17.9	東北大 工学部 電気工学科 大正14.3	東北大 工学部 電気工学科 昭和25.3	京都大 (工科大学) 電気工学科 大正4.12	東北大(院) 工学研究科 電気通信工学専攻 昭和32.3	東北大 工学部 電気工学科 昭和14.3
学 位	工学博士	理学博士		工学士	工学博士	工学士	工学士	工学修士	理学士/工学士
国籍本籍	宮 城	宮 城	宮 城	宮 城	宮 城	宮 城	長 野	青 森	宮 城
前 職	株式会社 日電製作所	株式会社 金属工業研究所	東北大学工学部 通信工学科助手	不 明	東北大学電気 通信研究所長	不 明	大阪高等 工業学校 教授(定年)	不 明	不 明
東北大職務経歴	無	助教授	助 手	不 明	教授/電通研所長	不 明	無	不 明	不 明

表 2-3 開設時の応用物理学科専任教員 (1962-65)

着任年月日	昭和37年				昭和38年			昭和39年		昭和40年
	教授	教授	助教授	助教授	助教授	講 師	講 師	教 授	講 師	教 授
氏名 (生年月日)	野呂雄吉 (明治31.9.28)	枝本勇雄 (明治29.4.23)	橋本寅三郎 (大正3.8.30)	岡本和人 (昭和2.4.15)	大木俊夫 (昭和6.3.3)	小島正規 (大正15.2.17)	内田寿一 (昭和6.12.22)	大原 亨 明治44.5.3	高橋 醇 (昭和3.9.18)	福本喜繁 (明治35.3.1)
担当学科目 又は講座	理論物理学 通論 I 応用統計学 応用数学	応用X線学 及電子線学 応用物理学 実験 I 真空技術	数 学	応用物理学 演習 I 応用数学	原子核概論 応用物理学 演習 III 力学	計測各論 I 計測実験 I 特殊計測		応用物性 通論 I 応用物性 通論 II ほか	量子力学 I 分子構造論 高分子物理学	応用工学 応用物理学 実験 II 物理学
最終卒業学校 学部/研究科 学科/専攻 (卒業年月)	東北大 理学部 物理学科 大正14.7	東北大 理学部 物理学教室 大正10.3	東北大 理学部 数学教室 昭和16.12	米国ルイジア ナ州立大(院) 博士課程 昭和33.9	東北大(院) 理学研究科 博士課程 昭和36.3	東北大(院) 理学研究科 修士課程 昭和33.3	東北大(院) 理学研究科 博士課程 昭和35.3	北海道大 理学部 物理学科 昭和15.3	東北大 理学部 物理学科 昭和28.3	東京大 理学部 物理学科 大正14.3
学 位	理学博士	理学博士	理学士	理学士/D.P	理学博士	理学修士	理学博士	理学博士	理学士	理学博士
国籍本籍	山 口	岡 山	栃 木	東 京	宮 城	秋 田	青 森	愛 媛	宮 城	香 川
前 職	東北大学 工学部 教授	東北大学 名誉教授	不 明	学振流動研究員 (東北大理学部)	東北大学 助手	不 明	不 明	不明 (金属材料の 研究等に従事)	東北大学 理学部 技術補助職員	不 明
東北大職務経歴	教 授	教 授	不 明	研究員	助 手	不 明	不 明	不 明	助手/技術補助員	不 明

さらに表 3-1 ~ 3-2<sup>25)</sup> には、その創設に向けた具体的な動きが起こった1961 (昭和36) 年度の臨時費と、開設から完成まで (1962-65年度) の経常費・臨時費を含む収支予算書を掲載した。内訳書を見れば、その中に多賀城の土地払下げ価格9,000万円 (1,800万円を一時払い、残金は10年の年賦払い)、工学部第一期工事 (3号館) の建設費1億円 (1961-63

年で支払い)<sup>26)</sup>、1964 (昭和39) 年度の着手が計画されていた第二期工事 (4号館) の建設費7,500万円などが含まれていることを読み取れる。なお、当時の入学金は10,000円 (受験料は3,000円)、工学部生の学納金 (年間) は授業料に実験実習費等を合わせて56,000円だった。

表 3-1 工学部設置期 (1961-65) の東北学院収支予算書：収入の部

区分	1961 (昭和36) 年度	1962 (昭和37) 年度	1963 (昭和38) 年度	1964 (昭和39) 年度	1965 (昭和40) 年度	
經常費	大学文理学部 (内訳)	86,100,000 入学料 68,000,000 受給料 3,600,000 証明手数料 200,000 各種負担金 6,000,000 — 実験実習費 200,000 雑収入 2,000,000 寄付金(後援会) 1,600,000 法人交付金	88,100,000 入学料 70,000,000 受給料 4,500,000 証明手数料 3,600,000 各種負担金 2,000,000 6,000,000 — 実験実習費 200,000 雑収入 2,000,000 寄付金(後援会) 1,600,000 法人交付金	21,990,000 入学料 16,000,000 受給料 1,800,000 証明手数料 900,000 各種負担金 150,000 1,500,000 — 実験実習費 80,000 雑収入 600,000 寄付金(後援会) 400,000 法人交付金	28,130,000 入学料 23,000,000 受給料 1,500,000 証明手数料 900,000 各種負担金 150,000 1,500,000 — 実験実習費 80,000 雑収入 600,000 寄付金(後援会) 400,000 法人交付金	39,240,000 入学料 32,000,000 受給料 1,600,000 証明手数料 1,800,000 各種負担金 1,440,000 480,000 — 実験実習費 960,000 雑収入 320,000 寄付金(後援会) 630,000 法人交付金
	大学文理学部二部 (内訳)	26,190,000 入学料 21,000,000 受給料 1,400,000 証明手数料 900,000 各種負担金 150,000 1,500,000 — 実験実習費 80,000 雑収入 600,000 寄付金(後援会) 400,000 法人交付金	22,660,000 入学料 17,000,000 受給料 1,400,000 証明手数料 900,000 各種負担金 150,000 1,500,000 — 実験実習費 80,000 雑収入 600,000 寄付金(後援会) 400,000 法人交付金	21,990,000 入学料 16,000,000 受給料 1,800,000 証明手数料 900,000 各種負担金 150,000 1,500,000 — 実験実習費 80,000 雑収入 600,000 寄付金(後援会) 400,000 法人交付金	28,130,000 入学料 23,000,000 受給料 1,500,000 証明手数料 900,000 各種負担金 150,000 1,500,000 — 実験実習費 80,000 雑収入 600,000 寄付金(後援会) 400,000 法人交付金	39,240,000 入学料 32,000,000 受給料 1,600,000 証明手数料 1,800,000 各種負担金 1,440,000 480,000 — 実験実習費 960,000 雑収入 320,000 寄付金(後援会) 630,000 法人交付金
	大学工学部 (内訳)	13,290,000 授業料 8,000,000 入学料 1,600,000 受給料 1,800,000 証明手数料 — 各種負担金 480,000 160,000 — 実験実習費 320,000 雑収入 930,000 寄付金(後援会) 法人交付金	41,638,000 授業料 34,428,000 入学料 750,000 受給料 950,000 証明手数料 65,000 各種負担金 4,395,000 — 実験実習費 100,000 雑収入 950,000 寄付金(後援会) 法人交付金	21,990,000 授業料 16,000,000 入学料 1,600,000 受給料 1,800,000 証明手数料 — 各種負担金 480,000 160,000 — 実験実習費 320,000 雑収入 930,000 寄付金(後援会) 法人交付金	33,190,000 授業料 24,000,000 入学料 1,600,000 受給料 1,800,000 証明手数料 — 各種負担金 1,440,000 480,000 — 実験実習費 960,000 雑収入 320,000 寄付金(後援会) 630,000 法人交付金	43,982,000 授業料 36,672,000 入学料 750,000 受給料 950,000 証明手数料 65,000 各種負担金 4,395,000 — 実験実習費 100,000 雑収入 950,000 寄付金(後援会) 法人交付金
	高等学校 (内訳)	40,226,000 授業料 33,016,000 入学料 750,000 受給料 950,000 証明手数料 65,000 各種負担金 4,395,000 — 実験実習費 100,000 雑収入 950,000 寄付金(後援会) 法人交付金	41,638,000 授業料 34,428,000 入学料 750,000 受給料 950,000 証明手数料 65,000 各種負担金 4,395,000 — 実験実習費 100,000 雑収入 950,000 寄付金(後援会) 法人交付金	21,990,000 授業料 16,000,000 入学料 1,600,000 受給料 1,800,000 証明手数料 — 各種負担金 480,000 160,000 — 実験実習費 320,000 雑収入 930,000 寄付金(後援会) 法人交付金	33,190,000 授業料 24,000,000 入学料 1,600,000 受給料 1,800,000 証明手数料 — 各種負担金 1,440,000 480,000 — 実験実習費 960,000 雑収入 320,000 寄付金(後援会) 630,000 法人交付金	43,982,000 授業料 36,672,000 入学料 750,000 受給料 950,000 証明手数料 65,000 各種負担金 4,395,000 — 実験実習費 100,000 雑収入 950,000 寄付金(後援会) 法人交付金
	中学校 (内訳)	21,250,000 授業料 18,360,000 入学料 300,000 受給料 600,000 証明手数料 50,000 各種負担金 1,220,000 — 実験実習費 70,000 雑収入 650,000 寄付金(後援会) 法人交付金	22,330,000 授業料 19,440,000 入学料 300,000 受給料 600,000 証明手数料 50,000 各種負担金 1,220,000 — 実験実習費 70,000 雑収入 650,000 寄付金(後援会) 法人交付金	21,250,000 授業料 18,360,000 入学料 300,000 受給料 600,000 証明手数料 50,000 各種負担金 1,220,000 — 実験実習費 70,000 雑収入 650,000 寄付金(後援会) 法人交付金	23,410,000 授業料 20,520,000 入学料 300,000 受給料 600,000 証明手数料 50,000 各種負担金 1,220,000 — 実験実習費 70,000 雑収入 650,000 寄付金(後援会) 法人交付金	24,130,000 授業料 21,240,000 入学料 300,000 受給料 600,000 証明手数料 50,000 各種負担金 1,220,000 — 実験実習費 70,000 雑収入 650,000 寄付金(後援会) 法人交付金
	法人本部 (内訳)	13,690,000 基本財産収入 120,000 雑収入 24,000 寄付金 1,000,000 米国援助金 4,296,000 米国援助金 4,296,000 学校納付金 8,250,000	13,690,000 基本財産収入 120,000 雑収入 24,000 寄付金 1,000,000 米国援助金 4,296,000 米国援助金 4,296,000 学校納付金 8,250,000	650,000 基本財産収入 120,000 雑収入 24,000 寄付金 1,000,000 米国援助金 4,296,000 米国援助金 4,296,000 学校納付金 8,250,000	14,690,000 基本財産収入 120,000 雑収入 24,000 寄付金 2,000,000 米国援助金 4,296,000 米国援助金 4,296,000 学校納付金 8,250,000	650,000 基本財産収入 120,000 雑収入 24,000 寄付金 2,000,000 米国援助金 4,296,000 米国援助金 4,296,000 学校納付金 8,250,000
	合計	89,835,000 (内訳) 1. 米国ミッション補助金 23,835,000 2. 施設寄付金 (学生) 38,310,000 (一般) 83,310,000 (同窓) 32,500,000 — 3. 繰入金 66,000,000 — 4. 借入金 6,000,000 (銀行) 60,000,000	109,342,000 (内訳) 1. 米国ミッション補助金 15,000,000 2. 施設寄付金 (学生) 94,342,000 (一般) 38,200,000 (同窓) 40,000,000 — 3. 繰入金 16,142,000 — 4. 借入金 1,500,000 (私学振興) 1,500,000 (銀行) 1,500,000	150,000,000 (内訳) 1. 米国ミッション補助金 15,000,000 2. 施設寄付金 (学生) 83,394,000 (一般) 38,200,000 (同窓) 35,000,000 — 3. 繰入金 10,194,000 — 4. 借入金 — (私学振興) 10,194,000 (銀行) 10,194,000	150,000,000 (内訳) 1. 米国ミッション補助金 15,000,000 2. 施設寄付金 (学生) 83,394,000 (一般) 38,200,000 (同窓) 35,000,000 — 3. 繰入金 — — 4. 借入金 — (私学振興) 10,194,000 (銀行) 10,194,000	150,000,000 (内訳) 1. 米国ミッション補助金 15,000,000 2. 施設寄付金 (学生) 83,394,000 (一般) 38,200,000 (同窓) 35,000,000 — 3. 繰入金 — — 4. 借入金 — (私学振興) 10,194,000 (銀行) 10,194,000
	臨時費	—	—	—	—	—



	消耗品費 2,040,000	消耗品費 1,970,000	消耗品費 1,860,000	消耗品費 1,770,000	消耗品費 1,770,000	消耗品費 1,860,000	消耗品費 1,970,000	消耗品費 2,040,000	
	通信費 294,000	通信費 280,000	通信費 260,000	通信費 250,000	通信費 250,000	通信費 260,000	通信費 280,000	通信費 294,000	
	研究費 1,640,000	研究費 1,542,000	研究費 1,343,000	研究費 1,226,000	研究費 1,226,000	研究費 1,343,000	研究費 1,542,000	研究費 1,640,000	
	実験実習費 930,000	実験実習費 870,000	実験実習費 775,000	実験実習費 702,000	実験実習費 702,000	実験実習費 775,000	実験実習費 870,000	実験実習費 930,000	
	学生諸費 1,870,000	学生諸費 1,790,000	学生諸費 1,670,000	学生諸費 1,600,000	学生諸費 1,600,000	学生諸費 1,670,000	学生諸費 1,790,000	学生諸費 1,870,000	
	営繕費 90,000	営繕費 90,000	営繕費 90,000	営繕費 90,000	営繕費 90,000	営繕費 90,000	営繕費 90,000	営繕費 90,000	
	火災保険料 980,000	火災保険料 950,000	火災保険料 830,000	火災保険料 720,000	火災保険料 720,000	火災保険料 830,000	火災保険料 950,000	火災保険料 980,000	
	雑費 100,000	雑費 100,000	雑費 100,000	雑費 100,000	雑費 100,000	雑費 100,000	雑費 100,000	雑費 100,000	
	予備費 1,350,000	予備費 1,350,000	予備費 1,350,000	予備費 1,350,000	予備費 1,350,000	予備費 1,350,000	予備費 1,350,000	予備費 1,350,000	
	法人納付金 24,130,000	法人納付金 23,410,000	法人納付金 22,330,000	法人納付金 21,250,000	法人納付金 21,250,000	法人納付金 22,330,000	法人納付金 23,410,000	法人納付金 24,130,000	
中学校	(内訳) 教職員給料 12,210,000	(内訳) 教職員給料 11,960,000	(内訳) 教職員給料 11,563,000	(内訳) 教職員給料 11,073,000	(内訳) 教職員給料 11,073,000	(内訳) 教職員給料 11,563,000	(内訳) 教職員給料 11,960,000	(内訳) 教職員給料 12,210,000	
	諸給 4,410,000	諸給 4,360,000	諸給 4,205,000	諸給 4,101,000	諸給 4,101,000	諸給 4,205,000	諸給 4,360,000	諸給 4,410,000	
	厚生福利費 1,010,000	厚生福利費 932,000	厚生福利費 850,000	厚生福利費 790,000	厚生福利費 790,000	厚生福利費 850,000	厚生福利費 932,000	厚生福利費 1,010,000	
	備品費 830,000	備品費 782,000	備品費 704,000	備品費 615,000	備品費 615,000	備品費 704,000	備品費 782,000	備品費 830,000	
	図書費 450,000	図書費 400,000	図書費 346,000	図書費 275,000	図書費 275,000	図書費 346,000	図書費 400,000	図書費 450,000	
	消耗品費 1,120,000	消耗品費 1,090,000	消耗品費 1,002,000	消耗品費 960,000	消耗品費 960,000	消耗品費 1,002,000	消耗品費 1,090,000	消耗品費 1,120,000	
	通信費 280,000	通信費 270,000	通信費 260,000	通信費 250,000	通信費 250,000	通信費 260,000	通信費 270,000	通信費 280,000	
	研究費 —	研究費 —	研究費 —	研究費 —	研究費 —	研究費 —	研究費 —	研究費 —	
	実験実習費 950,000	実験実習費 850,000	実験実習費 742,000	実験実習費 682,000	実験実習費 682,000	実験実習費 742,000	実験実習費 850,000	実験実習費 950,000	
	学生諸費 490,000	学生諸費 450,000	学生諸費 400,000	学生諸費 388,000	学生諸費 388,000	学生諸費 400,000	学生諸費 450,000	学生諸費 490,000	
	営繕費 920,000	営繕費 886,000	営繕費 838,000	営繕費 746,000	営繕費 746,000	営繕費 838,000	営繕費 886,000	営繕費 920,000	
	火災保険料 40,000	火災保険料 40,000	火災保険料 40,000	火災保険料 40,000	火災保険料 40,000	火災保険料 40,000	火災保険料 40,000	火災保険料 40,000	
	雑費 470,000	雑費 450,000	雑費 430,000	雑費 380,000	雑費 380,000	雑費 430,000	雑費 450,000	雑費 470,000	
	予備費 100,000	予備費 100,000	予備費 100,000	予備費 100,000	予備費 100,000	予備費 100,000	予備費 100,000	予備費 100,000	
	法人納付金 850,000	法人納付金 850,000	法人納付金 850,000	法人納付金 850,000	法人納付金 850,000	法人納付金 850,000	法人納付金 850,000	法人納付金 850,000	
法人本部	(内訳) 給料 10,297,000	(内訳) 給料 10,297,000	(内訳) 給料 10,297,000	(内訳) 給料 10,297,000	(内訳) 給料 10,297,000	(内訳) 給料 10,297,000	(内訳) 給料 10,297,000	(内訳) 給料 10,297,000	
	諸給 360,000	諸給 360,000	諸給 360,000	諸給 360,000	諸給 360,000	諸給 360,000	諸給 360,000	諸給 360,000	
	校医手当 90,000	校医手当 90,000	校医手当 90,000	校医手当 90,000	校医手当 90,000	校医手当 90,000	校医手当 90,000	校医手当 90,000	
	恩給費 —	恩給費 —	恩給費 —	恩給費 —	恩給費 —	恩給費 —	恩給費 —	恩給費 —	
	旅費 230,000	旅費 230,000	旅費 230,000	旅費 230,000	旅費 230,000	旅費 230,000	旅費 230,000	旅費 230,000	
	事務費 100,000	事務費 100,000	事務費 100,000	事務費 100,000	事務費 100,000	事務費 100,000	事務費 100,000	事務費 100,000	
	役員会費 150,000	役員会費 150,000	役員会費 150,000	役員会費 150,000	役員会費 150,000	役員会費 150,000	役員会費 150,000	役員会費 150,000	
	宗教教育費 200,000	宗教教育費 200,000	宗教教育費 200,000	宗教教育費 200,000	宗教教育費 200,000	宗教教育費 200,000	宗教教育費 200,000	宗教教育費 200,000	
	奨学金 300,000	奨学金 300,000	奨学金 300,000	奨学金 300,000	奨学金 300,000	奨学金 300,000	奨学金 300,000	奨学金 300,000	
	雑費 700,000	雑費 700,000	雑費 700,000	雑費 700,000	雑費 700,000	雑費 700,000	雑費 700,000	雑費 700,000	
	学校交付金(工学部) 6,000,000	学校交付金(工学部) 6,000,000	学校交付金(工学部) 5,000,000	学校交付金(工学部) 5,000,000	学校交付金(工学部) 5,000,000	学校交付金(工学部) 5,000,000	学校交付金(工学部) 6,000,000	学校交付金(工学部) 6,000,000	
	債務償還 267,000	債務償還 267,000	債務償還 267,000	債務償還 267,000	債務償還 267,000	債務償還 267,000	債務償還 267,000	債務償還 267,000	
	退職積立金 —	退職積立金 —	退職積立金 —	退職積立金 —	退職積立金 —	退職積立金 —	退職積立金 —	退職積立金 —	
	在外研究費 300,000	在外研究費 300,000	在外研究費 300,000	在外研究費 300,000	在外研究費 300,000	在外研究費 300,000	在外研究費 300,000	在外研究費 300,000	
合計	96,639,000	96,639,000	96,639,000	96,639,000	96,639,000	96,639,000	96,639,000	96,639,000	
(内訳) 1. 積立金 2. 負債償還	3,000,000 33,639,000	3,000,000 33,639,000	3,000,000 33,639,000	3,000,000 33,639,000	3,000,000 33,639,000	3,000,000 33,639,000	3,000,000 33,639,000	3,000,000 33,639,000	
(借入金) (土地代) (建築費)	23,163,000 10,476,000 —	(借入金) (土地代) (建築費) 30,000,000	(借入金) (土地代) (建築費) 30,000,000	(借入金) (土地代) (建築費) 30,000,000	(借入金) (土地代) (建築費) 30,000,000	(借入金) (土地代) (建築費) 30,000,000	(借入金) (土地代) (建築費) 30,000,000	(借入金) (土地代) (建築費) 30,000,000	(借入金) (土地代) (建築費) 30,000,000
3. 営繕費	20,000,000	20,000,000	20,000,000	20,000,000	20,000,000	20,000,000	20,000,000	20,000,000	
(工学部) (その他)	30,000,000 6,335,000	(工学部二期工事) (中学校) 10,000,000	(工学部二期工事) (中学校) 10,000,000	(工学部) (中学校) 10,000,000	(工学部) (中学校) 10,000,000	(工学部二期工事) (中学校) 10,000,000	(工学部二期工事) (中学校) 10,000,000	(工学部二期工事) (中学校) 10,000,000	
4. 財産購入	30,000,000	30,000,000	30,000,000	30,000,000	30,000,000	30,000,000	30,000,000	30,000,000	
(校地：工学部) (設備：工学部) (その他)	18,000,000 20,000,000 1,000,000	(校地：工学部) (設備：工学部) (その他) 30,000,000	(校地：工学部) (設備：工学部) (その他) 30,000,000	(校地：工学部) (設備：工学部) (その他) 30,000,000	(校地：工学部) (設備：工学部) (その他) 30,000,000	(校地：工学部) (設備：工学部) (その他) 30,000,000	(校地：工学部) (設備：工学部) (その他) 30,000,000	(校地：工学部) (設備：工学部) (その他) 30,000,000	
5. 繰越金	1,500,000	1,500,000	1,500,000	1,500,000	1,500,000	1,500,000	1,500,000	1,500,000	
臨時費	89,835,000	89,835,000	89,835,000	89,835,000	89,835,000	89,835,000	89,835,000	89,835,000	

以上が旧海軍工廠跡地の取得から工学部の設置に至る大局的な経緯となる。最終的に設置認可申請は1962（昭和37）年2月17日に文部省内で決裁され、これを受けて3月には入学試験が挙行され、未だ新棟建設の槌音が響く中、工学部は同年4月に1期生を迎え入れた。ひとまず校舎には、「旧米駐留軍当時使用した各種の木造建築物に適当な改善を施し、木造モルタル平屋建八四〇坪を教室に、同木造平屋建四〇〇坪を実習室に充てた」という<sup>27)</sup>。文部省大学学術局長から東北学院に発出された認可通知書には、2点の留意事項（①「建築中の建物は予定計画どおりに完成すること」、②「図書学術雑誌および機械器具類は計画どおり増強整備すること」）が付されていた。

### 3-6. 小結：多賀城キャンパスの取得と工学部設置の経緯

- 1957（昭和32）年12月8日：  
理工科系学部増設への意思を初めて公表（『東北学院時報』紙上）
- 1957（昭和32）年12月日欠：  
宮城県中学校長会より高校増設の嘆願書
- 1958（昭和33）年6月2日：  
国有財産売払申請書（50,000坪）を東北財務局に提出  
使用目的は①第二高等学校、②中学校・高等学校運動場、③商、工高等学校新設、④大学教養部移転、⑤中学校・小学校・幼稚園とするも理工科大学の可能性にも言及。
- 1958（昭和33）年7月8日：  
『河北新報』に「学院大 多賀城に理科系大を設置」の記事掲載
- 1960（昭和35）年3-4月頃か：  
多賀城校地の取得内定（5月7日付『東北学院時報』にて報告）
- 1960（昭和35）年12月6日：  
国有財産東北地方審議会「随意契約による売払いが適当」の答申
- 1961（昭和36）年3-4月頃か：  
理事会で①榴ヶ岡高校の多賀城移転、②工業高校の新設、③理工科系の学部の設置、を決定（7月1日付『東北学院時報』にて報告）
- 1961（昭和36）年4月1日：  
工学部設置準備委員会発足

- 1961（昭和36）年4月1日：  
多賀城校地（取得予定地）で幼稚園開設（旧米軍施設を転用）
- 1961（昭和36）年7月10日：  
「東北学院大学工学部新設趣意書」を公表
- 1961（昭和36）年9月10日：  
文部省に『東北学院大学工学部増置認可申請書』を提出
- 1961（昭和36）年11月20日：  
鉄筋コンクリート造新築校舎（3号館：地下1階・地上3階）起工
- 1962（昭和37）年2月12日：  
『河北新報』に「急ピッチに建築進む 東北学院大の新設工学部校舎」の記事掲載
- 1962（昭和37）年2月17日：  
文部省にて東北学院大学工学部の設置を認可
- 1962（昭和37）年2月27日：  
大蔵省にて旧海軍工廠跡地の東北学院への払下げを承認
- 1962（昭和37）年4月1日：  
工学部／多賀城キャンパス開設
- 1962（昭和37）年9月29日：  
鉄筋コンクリート造新築校舎（3号館）竣工

## 4. 多賀城キャンパス60年の変化・発展

さて、新棟の竣工を待たずに動き出した多賀城キャンパスは、その後、どのような変化・発展を遂げていったのだろうか。次に、東北学院史資料センターに残る施設課旧蔵資料群（建築図面・建築確認申請書類等）に基づき、揺籃期の様子を中心に、施設の整備・更新の過程に焦点を当てて、キャンパスの変遷概要を見ていきたい。

### 4-1. 時期区分

表4に、1962（昭和37）年から2022（令和4）年までの多賀城キャンパスの変遷と関連事象を整理した。結論を先回りするかたちになるが、大局的に見れば、多賀城キャンパスの変遷は概ね20年ごとの3期に分けて捉えることができる。

第一期：1962年（昭和36年）-1979年（昭和54年）工学部と多賀城キャンパスの基礎形成期

第二期：1980年（昭和55年）-1998年（平成10年）都市計画への対応を契機としたキャンパスの再構成・拡充期

第三期：1999年（平成11年）-2022年（令和4年）時  
勢に対応した教育研究環境の模索・整備期

以下、この区分にしたがって、キャンパスの変遷  
過程を概観する。

表4 旧多賀城キャンパスの変遷と時期区分

年	キャンパス・施設関連	工学部組織・社会背景など	時期区分
1962 (昭37)	旧米軍施設（1号館・2号館・機械実習室・寄宿舎・幼稚園ほか） 幼稚園増築、3号館新築、薬品庫新築	校地払下げ（1962.2）、工学部開設（1962.4）	第1期
1963 (昭38)	寄宿舎食堂新築、製図室増築、2号館増築（礼拝堂）		
1965 (昭40)	4号館新築	1964推薦入学制度の導入	
1967 (昭42)	4号館増築、5号館新築・6号館（平屋）新築	1966高崎一大代線都市計画決定	
1969 (昭44)	旭ヶ岡寄宿舎・舎監住宅新築	1967土木工学科増設（定員80名）	
1970 (昭45)	自動車実習室新築、プール新築		
1971 (昭46)	研究室新築、実験室新築		
1973 (昭48)	土衛衛生実験室新築、6号館増築（2-4階）		
1974 (昭49)	守衛室新築	1974都市計画道路（高崎一大代線）事業認可	
1978 (昭53)	学生部室（3階建）新築、計算センター新築		
1980 (昭55)	機械工場新築、プール解体	1980道路用地を多賀城市に売却（4月）、北西側の国有地を取得（9月）	第2期
1981 (昭56)	ポーガン射場・弓道場移転新築、自動車部部室移築、体育館新築		
1982 (昭57)	図書館分館新築		
1983 (昭58)	礼拝堂新築	1983都市計画道路（高崎一大代線）着工（2月）	
1985 (昭60)	幼稚園新築移転、旧園舎解体（1986）		
1988 (昭63)	研究室棟（8号館）新築		
1990 (平2)	高電圧発生室新築		
1991 (平3)	新1号館新築、溶接実験棟・内燃機関実験棟新築、旧1号館解体	1993大学設置基準等の改正（大綱化）	
1992 (平4)	新2号館新築	1996-2006私立大学学術研究高度化推進事業	
1994 (平6)	学生部室棟（9号館）新築	1997-98校地拡大	
2006 (平18)	工学基礎教育センター新築	2002学科名称変更（機械創生工学科・電気情報工学科・物理情報工学科・環境土木工学科）	第3期
2007 (平19)	ハイテクリサーチセンター新築	2006学部改組（機械知能工学科・電気情報工学科・電子工学科・環境建設工学科）	
2008 (平20)	警備室移転		
2009 (平21)	バイオテクノロジーリサーチコモン棟新築	2017学部改組（機械知能工学科・電気電子工学科・環境建設工学科・情報基盤工学科）	
2015 (平27)	武道場新築		

#### 4-1. 第一期：工学部と多賀城キャンパスの 基礎形成期（1962-1979）

第一期は、工学部の開設に始まり、教育研究の基礎的な環境が整えられていく時期である。

1962（昭和37）年2月に設置認可が下りて旧海軍工廠跡地の払下げが確定すると、翌月には前述の通り入学試験が実施され、4月19日に一期生174名の入学式が挙行された。前年（1961年）の11月には先行して校舎（3号館）の新築工事に着手されていたが、敷地は未だ閑散とした状態で、僅かに残っていた米軍施設の一部が教室・実験室・幼稚園等に転用されて揺籃期の急場をしのぎつつ、9月29日の校舎竣工<sup>28)</sup>を待つことになった。

図4に、米軍供用下の1952（昭和27）年10月31日の撮影とされる空中写真（一部筆者加筆<sup>29)</sup>を、図5に3号館新築時点の建物配置図<sup>30)</sup>を示す。図4に

おける黄色の枠内が開設時の校地範囲を、また北側の青色の点線内は、のちに拡張される範囲を示している。黄色枠の周囲に見える建物は米軍家族が居住した住宅群で（図4）、すなわち東北学院に払下げられた部分は、アメリカン・スクール、PX（日用品販売店舗）、電話局、寄宿舎、運動場などが並ぶ公的な空間だったことが分かる。一方、図5の中央に示すL字形の建物が唯一初年に新築された3号館で、これ以外は米軍時代の建物を改造して再利用したものとなっていた。図6,7には米軍のアメリカン・スクールを転用した「1号館」の外観と内観を、図8,9には同じく米軍のPX（売店）を転用した「2号館」の外観と平面図を、さらに図10には電話局を転用した「実習室（機械工場）」の外観を示す<sup>31)</sup>。1号館には50人規模の教室が4室と、60人規模・110人規模の教室が各1室、研究室が2室用意され

た。また2号館には、一学年（定員160名）が入れる唯一の講義室（200人規模：図9に「合同講義室」とある）と物理実験室（2室）、そしてごく小規模な図書室が有った。ただ学生の居場所や教員の研究室は明らかに不足した。工学部の第一期生にして後に機械工学科で教鞭を取った鶴本勝夫（本学名誉教

授・故人）は当時の様子を「…学生らは学科の別なく、「工学部生」として一括入学許可され、2年目にして学生の希望と1学年次の成績を考慮して、機械工学科、電気工学科、応用物理学科の3学科に編成がえした。当時は、2年次までが教養課程と位置づけられており…」と述懐している<sup>32)</sup>。

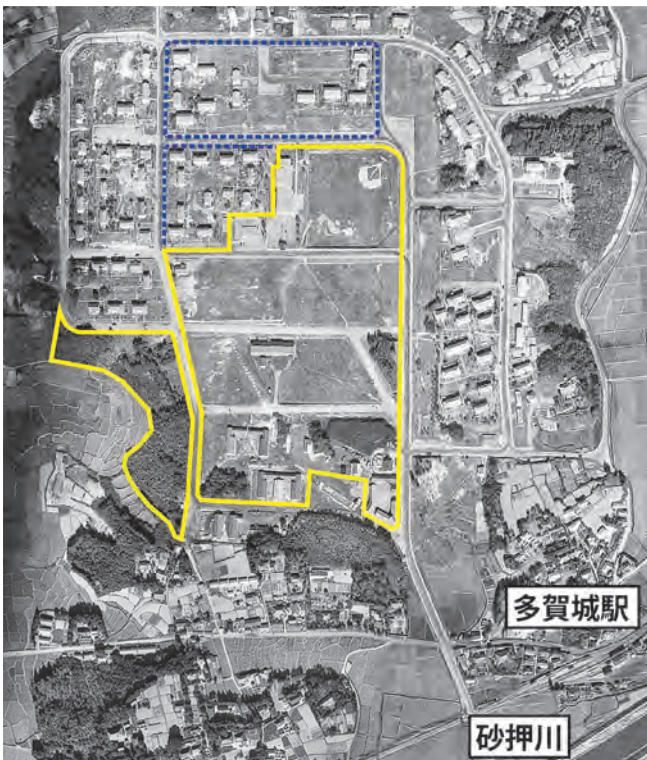


図4 1952年10月31日米軍撮影の多賀城キャンパス用地上空（国土地理院）



図5 多賀城キャンパス配置図：1962年



図6 工学部1号館外観（旧米軍アメリカン・スクール）



図7 工学部1号館内観（旧米軍アメリカン・スクール）



図8 工学部2号館外観（旧米軍PX, 増築前）



図10 工学部実習室外観（旧米軍電話局）

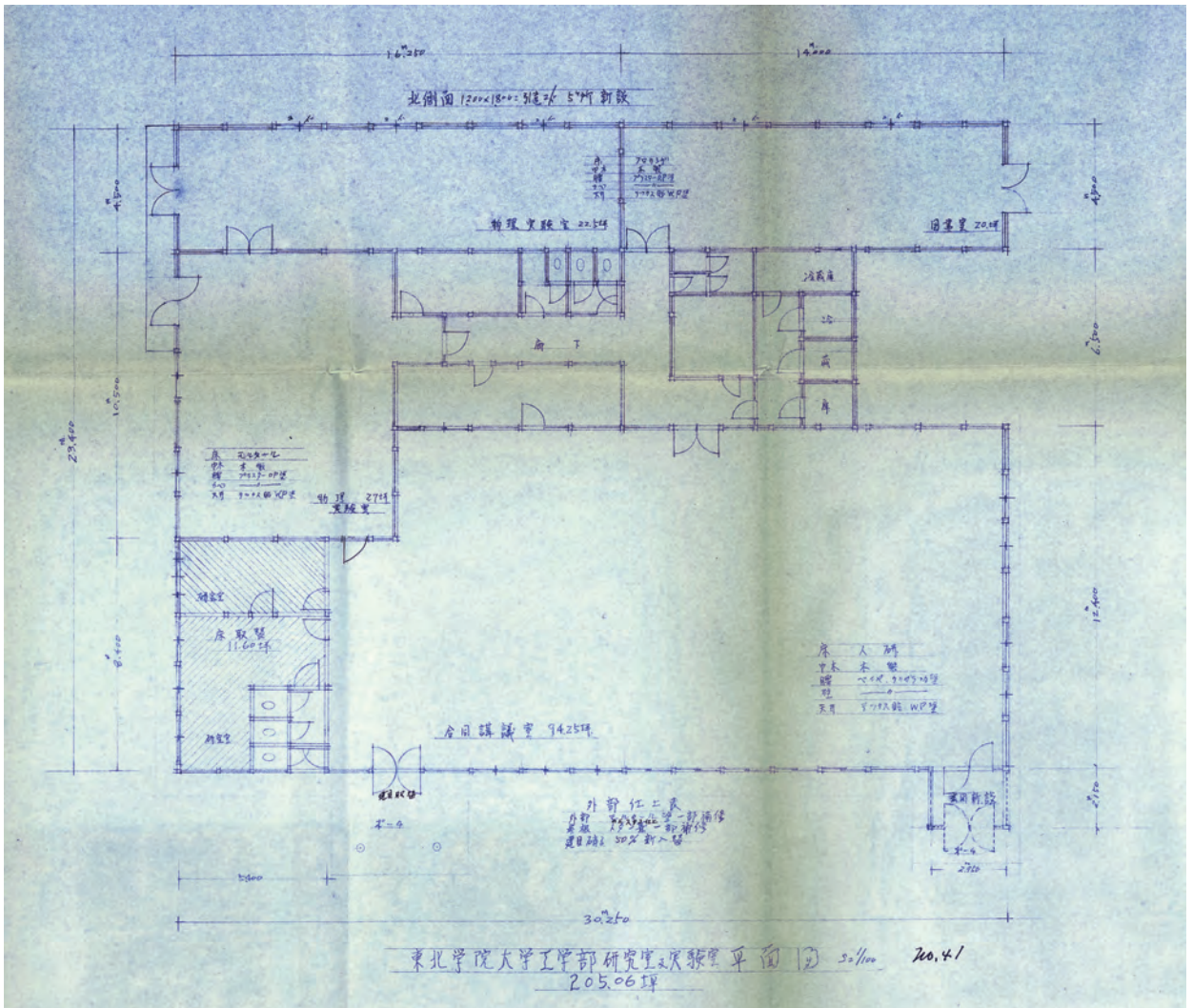


図9 工学部2号館平面図（旧米軍PX, 増築前）

さて、当初のこうした揺籃期的環境は、完成年度（1965年度）へ向けて年々増加していく学生数と教員数に対応すべく、段階的に整備されていく（図11, 図12）<sup>33)</sup>。

まず初年（1962年）の秋に竣工した新築の3号館には、2年目以降に対応できるよう1学科・1学年の定員相当（60名規模）の教室が4室、目的別の実験室が6室<sup>34)</sup>、図書室、会議室、14名分の教員室、そして学生ラウンジが設けられた。次いで3年目の1964（昭和39）年には、1号館と2号館を繋ぐように既存建家の増築がなされ、ここに礼拝堂と実験室が追加された（図11）。前後して小規模な実験設備や実習施設も付加されつつ、さらに完成年度にあたる1965（昭和40）年には、鉄筋コンクリート造地下1階・地上4階建ての新棟（4号館）が竣工する（図12）。3号館と同じ山下寿郎設計事務所仙台支社の手になる新たな校舎には、300名規模の大講義室と150名規模の中講義室が各1室、製図室が2室、そして19室の教授室・助教授室と大小19室の実験室<sup>35)</sup>が設えられた。図13は、4号館が竣工して間もない頃のキャンパスの様子である<sup>36)</sup>。

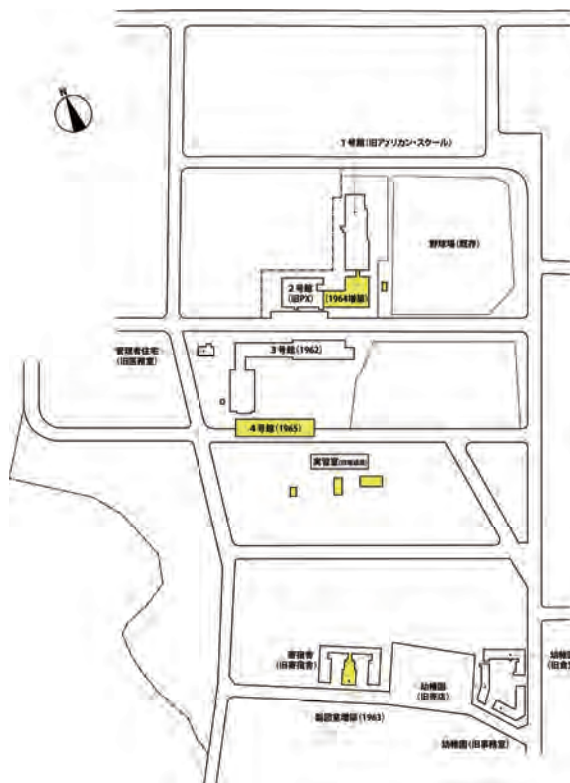


図11 多賀城キャンパス配置図：1965年

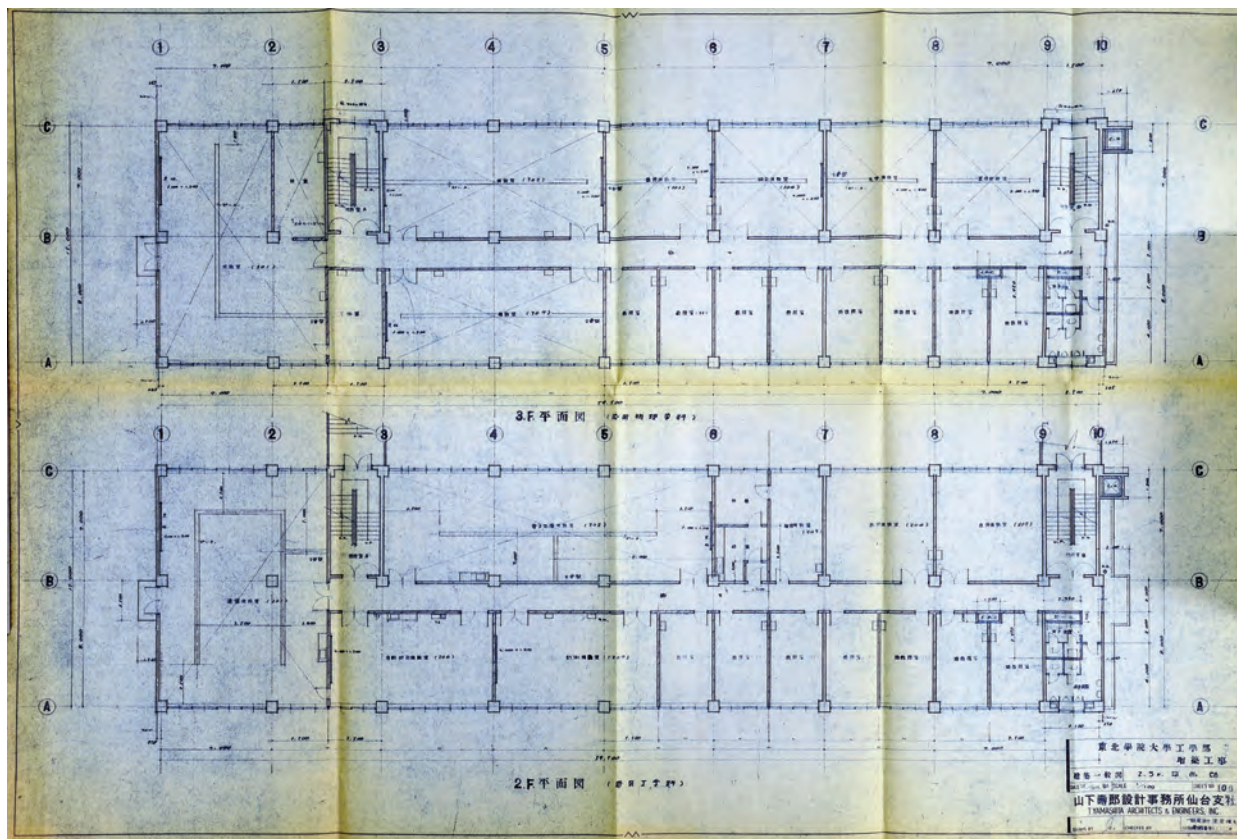


図12 工学部4号館新築平面図（1964.9.25付）

当初空地の多かったキャンパスを埋めてゆく第一期の発展過程は、生き物が成長してゆくかの如くである。図14には1966（昭和41）年～68（昭和43）年の変化を、図15には1969（昭和44）～73年の変化をそれぞれ示す。

1967（昭和42）年には、単独の施設としては初めての学生部室が設けられた。またこの年には、4番目の学科としての土木工学科の増設と、既設3学科の定員増加（各学科80名）を見た。土木工学科の増設と各学科定員の増加の背景や理由は『東北学院百

年史』にも詳しいが<sup>37)</sup>、その出発点は、『国有財産売払申請書』において東北財務局に示した「商工高等学校新設」、ないし『工学部設置認可申請書』で文部省に示した「将来の計画」としての「四ヶ年経過後においては応用化学科、土木・建築学科、工業経営学科等を設置する計画のもとに準備を進めたい」との文言に見出せる。昭和30年代後半に始まる高度経済成長や、東京オリンピック（1964年）とも連動した国土開発への大きなうねりも追い風になった。キリスト教信仰を持ったエンジニアを養成して



図13 1965年頃のキャンパスの様子（右：3号館、左：4号館）

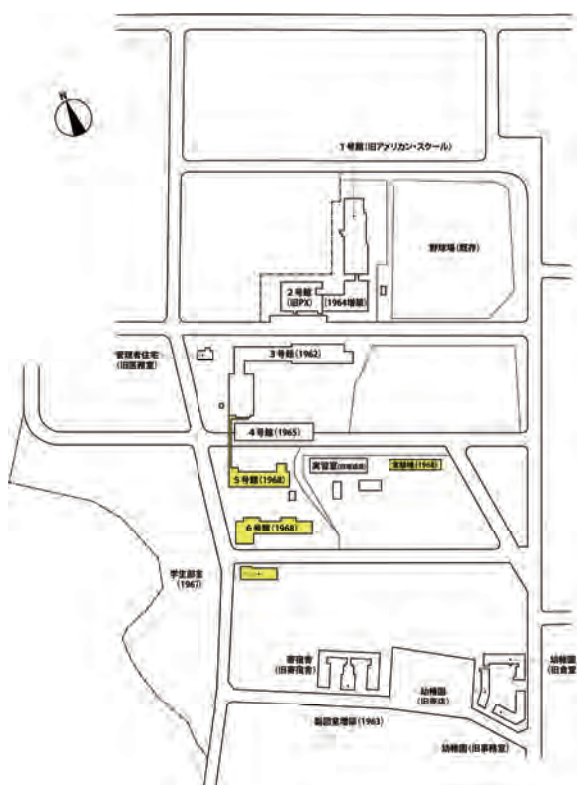


図14 多賀城キャンパス配置図：1966-68年

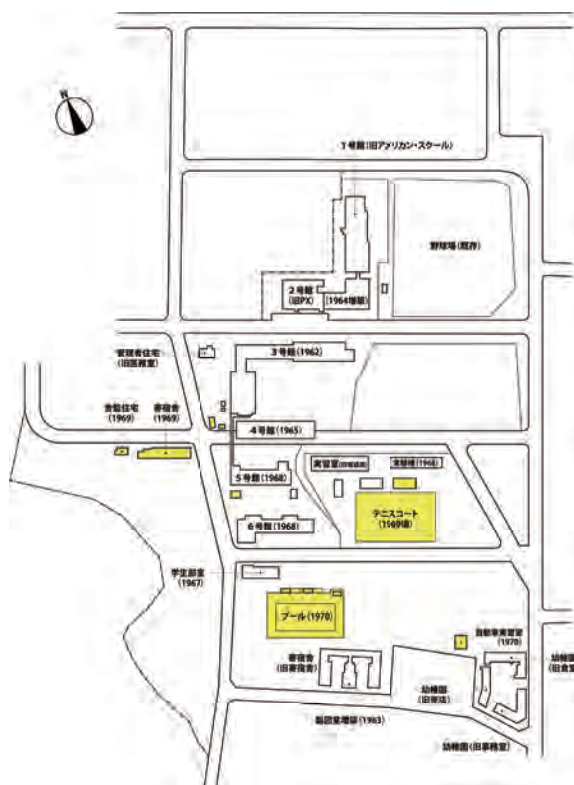


図15 多賀城キャンパス配置図：1969-73年

社会に貢献せしめんとする大学の意図と、時代の要請とが結びついて誕生した新学科であった。翌1968（昭和43）年、3号館・4号館と同じ山下寿郎設計事務所仙台支社の設計により、鉄筋コンクリート造4階建ての5号館と、鉄筋コンクリート造平屋建ての土木実験室（6号館：のちに増築されて4階建てになる）が竣工した。以後改組を経て現在まで続く工学部4学科体制を受け入れるための、基本的な校舎がここに出揃った。なお、土木工学科では、卒業前の奉仕活動として、しばしばキャンパス内の道路整備を自施工した（図16<sup>38</sup>）。いつからいつまでのことは詳らかでないが、旧多賀城キャンパスの6号館には、斯かる活動に対する小田忠夫学長からの感謝状が額装されていた。

教室や実験室が一定に整うと、次いで学生生活（課外活動を含む）の空間が充実を見せた（前掲図15）。1967（昭和42）年の部室棟に続き、1969（昭和44）年には校地の中央にテニスコートが整備される。同年には西側隣地に旭ヶ丘寄宿舎と舎監住宅が竣工し、翌1970（昭和45）年には部室棟の付近にプールと自動車実習室が竣工した。いま紙幅の都合



図16 土木工学科によるキャンパス自施工の様子（年不詳）

と筆者の力量から課外活動の空間の検討は別稿に譲るが、試みにその断片を示せば、当初（1962年）「自動車部」のみだった課外活動には、一期生を世に送り出して土木工学科が新設された1967（昭和42）年までに「バドミントン部」「応援団」「旅行愛好会」「サイクリング愛好会」「化学愛好会」「雄弁研究会」の6団体が加わり、以後漸増して1978（昭和53）年には46団体を数えるに至る（表5）。またその内容を見ると、鉄板の運動部から時代性を感じる団体まで豊かな多様性を備えており、多岐にわたる活動

表5 多賀城キャンパスにおける部活動の種類と在籍者数（1978年・1985年）

1978（昭和53）年度								
番号	名称	在籍数	番号	名称	在籍数	番号	部活名	在籍数
1	キリスト教青年会	18	17	サッカー	22	33	マンドリン	16
2	準硬式野球	29	18	ラグビー	25	34	映画研究	6
3	空手道	29	19	スキー	20	35	ハワイアン	14
4	少林寺拳法	25	20	サイクリング	16	36	ハイキング	9
5	剣道	22	21	ハンドボール	22	37	海洋開発	16
6	自動車	35	22	洋弓	15	38	将棋	24
7	合気道	22	23	バドミントン	42	39	ロックバンド	41
8	柔道	29	24	山岳	12	40	旅行研究	32
9	卓球	26	25	写真	28	41	化学研究	20
10	弓道	18	26	ホークソング	37	42	応物研究	65
11	剣道	27	27	通信	24	43	アルバイト	7
12	軟式庭球	19	28	デザイン	25	44	アジア・アフリカ研	14
13	ボーガン射撃	23	29	クラシックギター	16	45	ESS	11
14	重量拳	24	30	オーディオ	19	46	囲碁	14
15	硬式庭球	19	31	書道	20		計	1032
16	バレーボール	13	32	茶道	22		在籍学生数	1672

1985（昭和60）年度								
番号	部活名	在籍数	番号	部活名	在籍数	番号	部活名	在籍数
1	学生会執行委員	9	20	サッカー	23	39	マンドリン	10
2	キリスト教青年会	10	21	ラグビー	38	40	映画研究	28
3	応援団	8	22	スキー	41	41	精神昂揚会	19
4	新聞	14	23	サイクリング	12	42	ハワイアン	12
5	準硬式野球	29	24	バスケット	27	43	レーザー研究	15
6	空手道	27	25	ハンドボール	17	44	ハイキング	29
7	少林寺拳法	26	26	洋弓	16	45	海洋開発	11
8	剣道	19	27	バドミントン	47	46	将棋	6
9	自動車	21	28	山岳	11	47	ロックバンド	29
10	合気道	23	29	航空研究	11	48	コンピューターサイエンス	14
11	柔道	37	30	写真	16	49	旅行研究	32
12	卓球	19	31	ホークソング	23	50	SF研究	17
13	弓道	16	32	通信	15	51	ボランティア	12
14	剣道	17	33	デザイン	33	52	視覚文化	11
15	軟式庭球	19	34	クラシックギター	7	53	化学研究	9
16	ボーガン射撃	15	35	オーディオ	12	54	機械研究	10
17	重量拳	8	36	美術	9	55	応物研究	28
18	硬式庭球	16	37	書道	21	56	土木研究会	35
19	バレーボール	23	38	茶道	25		計	1087
							在籍学生数	2060

が展開されていたことを知れる。加えて、この年の在学数1672名に対して各団体への参加者数が延べ1032名に達する点も目が留まろう。まさにその1978（昭和53）年には、学生部室が一棟新築されている（後述図17参照）。学生活動には、質的にも量的にも時代の雰囲気が見られる。

#### 4-2. 第二期：都市計画への対応を契機とした キャンパスの再構成・拡充期（1980-1998）

さて多賀城キャンパスは、第一期と第二期とを画する1980年前後に大きな転機を迎える。キャンパスを横断するように計画されていた都市計画道路（市道・大代-高崎線）の事業化である。

図17と図18に、その前後の様子を示す。図17において、1970（昭和45）年に竣工したプールの上を通る赤の点線が、1985（昭和60）年に開通する都市計画道路である。

もともとこの道路が都市計画決定されたのは、工学部の開設から4年を経た1966（昭和41）年3月のことである。したがってこの時から、キャンパス南部（のちにプールが建設されることになるその場所）に将来道路が通る可能性が公にされていたことになる。しかし一般に都市計画は、計画決定から事業化に至るまでに長期間を要する場合も多く、かつ、計画内容も都度々々の社会事情を反映してしばしば

変更される。加えて建築基準法上も、2年以内の事業実施が決定するまで、その土地（計画道路上）への建築行為は制限されない。こうした事情が反映してか、のちの回想記録を見ると、当該道路の事業化は大学当局にとって想定外だったようである<sup>39)</sup>。とは言え事業化されていない計画道路の上を工学部として放置することも難しかったであろうし、或いはそうした可能性を考慮した上で暫定的にプールを建設したと考えれば、一定の合理性を見出すこともできるだろう。いずれにしても、当該道路は昭和49年度から一部区間で工事が始まり、キャンパスを横断する区間は1983（昭和58）年からの2か年で工事が実施された。先立って大学は1980（昭和55）年4月に道路用地を多賀城市に売却し、同年9月には、10年間の利用の末に、プールを解体した。

都市計画道路の開通は、別な見方をすれば、多賀城キャンパスにとって最大の懸念材料が解消されたことを意味する。時あたかも、70年代初頭をピークとする第二次ベビーブームの波が、間もなく大学へも到達しようという時期であった。工学部は第二期の19年間を通じて、都市計画道路の用地から外れた部分を活用しつつ、さらに南側の一部（道路用地）を売却した代替措置として、北部に残されていた旧米軍住宅地（国有地）を段階的に購入し、北側へと



図17 多賀城キャンパス配置図：1975-80年

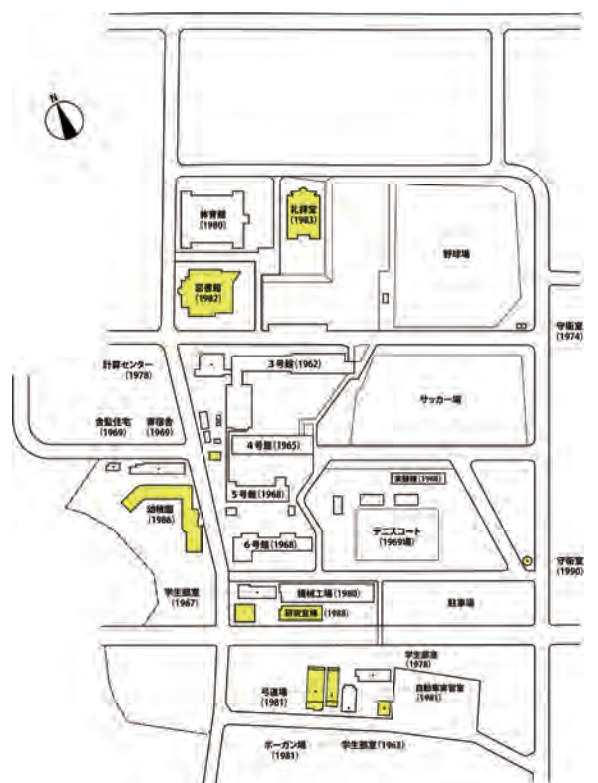


図18 多賀城キャンパス配置図：1981-90年

キャンパスを拡張・整備していくこととなる。

1978（昭和53）年、既存の3号館を増築する形で計算センターの新築に着手した。ちなみに工学部に初めて導入されたコンピュータは1971（昭和46）年の「HITAC-10」（日立製作所が開発した我が国最初のミニコンピュータとされる）であったが、計算センター竣工後には、従来のアルファベットや数字・カナ文字と同様に日本語入力が容易なシステムを搭載した「FACOM M-140F」（富士通）が導入されたとする<sup>40</sup>。また1980（昭和55）年には、解体したプールの北側に機械工場を新築して機能を移転する。機械工場の設置は機械工学科の認可条件の一つであり、当初から米軍施設を転用して使用してきたものであったが、これが18年を経て新築されたわけである。

さらに道路用地の代替地を北側に取得（国有地払下げ）すると（1980年）、当該申請書記載の計画にしたがって、体育館（1980年）、図書館（1982年）、礼拝堂（1983年）を増設する。道路で分断された南側の土地は道路下に通されたアンダーパスで北側校地と接続され、引き続き課外活動等の空間として活用された（2棟の部室棟と、弓道場、ボーガン場、自動車実習室が設けられた）。南端の、米軍施設を転用していた幼稚園もまた、寄宿舎の南に新築移

転された。図19に、1980年代末頃の撮影と見られるキャンパスの空撮写真を、図20に移転時まで残っていたアンダーパスの様子を示す。

図21には、1991（平成3）年から2000（平成12）年までの多賀城キャンパスの変化を示す。工学部の開設から30年を経た1990年代以降になると、米軍時代の建物や初期の建物の更新が加速されつつ、時代に適応した新施設が設置されていく。米軍施設を転用した旧1号館が1991年に解体され、正門付近にあったテニスコートがその跡地へ移転する。1998年には北側市道の反対側に校地を取得し、南側に残されていた弓道場やボーガン場を移転、さらにサッカー場（運動場）やアーチェリー場を備えた総合的



図20 都市計画道路で分断されたキャンパス南北を繋ぐアンダーパス（2024年6月筆者撮影）



図19 1980年代末頃の多賀城キャンパスの様子（1991年卒業アルバムより）

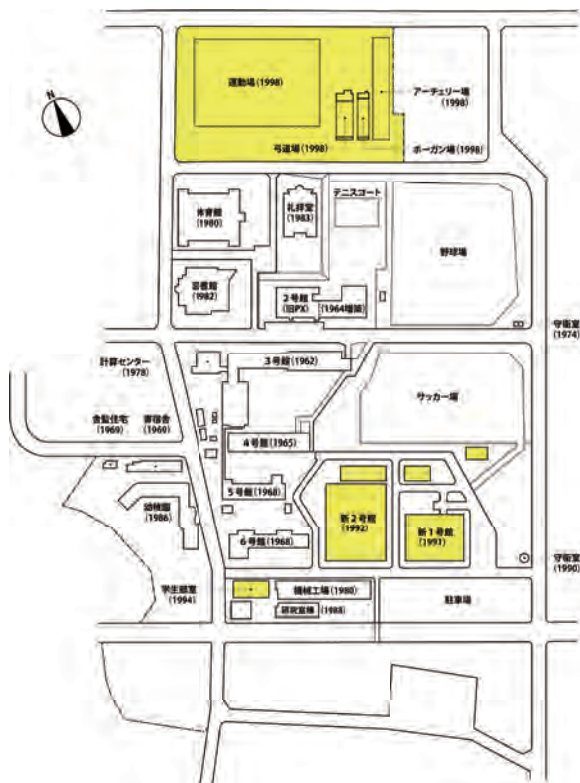


図21 多賀城キャンパス配置図：1991-2000年

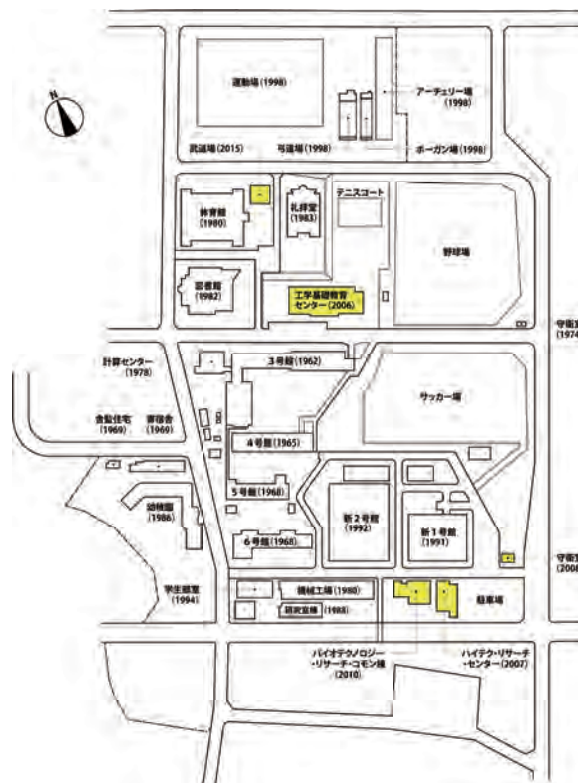


図22 多賀城キャンパス配置図：2001-2022年

な運動場を整備する。体育館や野球場などをあわせて、これにより、従来虫喰い状に展開していた運動施設が北側に集約されることになった。校地中央の跡地は再開発されて新1号館、新2号館、ならびに新たな実験室棟が整えられ、キャンパスの正面構えが完成する。1980-90年代は、まさに多賀城キャンパス史における建設ラッシュだった。

#### 4-3. 第三期：時勢に対応した教育研究環境の模索・整備期（1999-2022）

第三期は、21世紀を迎え、移り変わる大学環境や時勢に対応しながら教育研究環境が模索され、整備されてきた時期である。工学部史的に見れば、五橋キャンパスへの移転を経て現在進行形の時代とも言えるが、多賀城キャンパスの歴史はここで途絶し、その中身は五橋新キャンパスへと引き継がれる。

図22に、2001（平成13）年から2022（令和4）年までの多賀城キャンパスの変化を示す。最後の20年間はこれまでのような大規模な再開発は行われず、教育研究環境を支える小規模な施設の整備が中心となる。その遠因には、1990年代に行われた大学設置基準等の改正（いわゆる大綱化）、これとも連動する様々な運営補助金のメニュー、理数系を志望する児童生徒の減少などを想起できる。

2006（平成18）年には米軍時代からの最後の遺構

であった旧2号館が解体され、跡地に工学基礎教育センターが新設された。いわゆるブリッジ教育を担う学生教育の拠点として、工学部共通の基礎科目（理数系科目）の教育を充実させることを意図したものである。2007（平成19）年には正門からほど近い正面付近にハイテク・リサーチ・センターを、2009（平成21）年にはその隣にバイオテクノロジー・リサーチ・コモン棟を整備する。1996から10年に渡って実施された「私立大学学術研究高度化推進事業」（文部科学省）の補助金等を受けたものである。2015年には、武道場が完成し、以後小規模な建家の改廃を除けば、旧キャンパス最後の姿がほぼ完成した。

#### 4-4. 小結

工学部60年の教育研究、ならびに学生生活を受け容れた器として多賀城キャンパスの歴史は、米軍施設を転用した揺籃期的・暫定的な状況から始まり、概ね20年ごと三期に分けて理解できる。その過程からは、大学内部の改組・発展と、外部環境の変化に応じてキャンパスが生き物の如く成長発展してきた様子が垣間見える。とりわけキャンパス形成史の観点からは、社会的背景と都市計画道路敷設の時期的な一致が、キャンパス空間開発の重要な分岐点になったことが分かる。

## 5. おわりに

東北学院大学旧多賀城キャンパスは、東北最古の私学工学部として60年の歴史を歩み、2023年、五橋キャンパスの開設とともに、その役割を終えた。その間、ここには多くの施設が整備され、学生たちが入学し、そして巣立ったが、その歴史の舞台となったキャンパスは既に存在しない。本稿では、放置すれば失われかねない歴史の記憶を保存するための試みとして、工学部の創立経緯とキャンパス取得の歴史、ならびに空間環境としての多賀城キャンパスの変遷過程を概観した。とりわけ後者に関しては、キャンパス60年の歴史を、概ね20年ごとの三期（揺籃期としての第一期、発展期としての第二期、現在に続く模索期としての第三期）に分けて記述することを試みた。一方、今回のシンポジウムでも本稿でも、キャンパス史と不可分の学部史に関しては十分に踏み込めておらず、後究が待たれるところである。シンポジウムを機に、改めて次の課題を見る思いがする。

## 謝辞

本稿の執筆に際しては、資料の収集と閲覧の面で東北学院法人事務局施設部ならび東北学院史資料センターに多大なるご支援をいただいた。また、本稿は東北学院大学工学部2023年度卒業論文『工学部旧蔵多賀城キャンパス関連史料の調査研究：目録の作成と内容の把握を中心に』（五十嵐響、山道康成、吉岡駿祐）、同2024年度卒業論文『東北学院大学工学部および旧多賀城キャンパス形成史の研究：施設課旧蔵史料と認可申請書類等の収集・整理・分析から』（長谷川隼斗、深澤心優）、および同2025年度卒業論文『東北学院大学旧多賀城キャンパスの成立と展開に関する研究：施設課旧蔵資料に基づく検討』（浅田一哲、春日大）の成果に多くを拠っている。資料の整理も上記の7名を中心に、工学部崎山ゼミの学生が実施した。記して深甚なる謝意を表します。

## 【註】

- 1) 多賀城海軍工廠は、第二次世界大戦下1943（昭和18）年に設置された軍需工場である。その面積は4,961,600㎡に及び、当時の多賀城村の約4分の1を占める広大なものだった。『旧多賀城海軍工廠の調査』（参考文献4）に詳しい。
- 2) 周知の通り、東北学院航空工業専門学校は戦時下1944（昭和19）年の非常措置方策に基づいて設置された専門学校である。同じキリスト教主義の私学について見れば、例えば関東学院と青山学院では航空工業専門学校、同志社では工業専門学校、立教学院では理科専門学校、関西学院では理工科が同年に設置されていたことが知られる。そのうち関東学院と同志社は戦後1949（昭和24）年の新制大学設置時に工学部を、立教学院は同じく理学部を設けたが、関西学院と青山学院は東北学院と同様に1960年代になって理学部（関西学院, 1961年）や理工学部（青山学院, 1965年）を増設している（各学校史に拠る）。
- 3) 『東北学院時報』第182号、1957.12.8、p.1
- 4) 工学部が設置され多賀城キャンパスが開設されたのが1962（昭和37）年であるから、少なくとも数字上は「五ヶ年プラン」（昭和33-37年度）の期間に含まれてくる。ただし管見の及ぶ限りにおいて、この「五ヶ年プラン」の具体的な内容は確認できていない。
- 5) 1953（昭和28）年3月払下げ許可、同年初夏着工、10月16日開場式。翌1954（昭和29）年12月には隣地に第二寄宿舍（定員44名）も竣工した。運動場は現在も使用されるが寄宿舍は1996（平成8）年に閉鎖となり、跡地には多賀城市菅鶴ヶ谷住宅が建つ。
- 6) 『東北学院時報』第183号、1958.5.5、p.1、「新しい年度にあたって」
- 7) この点に関し『東北学院百年史』（参考文献2）は、「同窓や関係者の一部からは、これまで文科系学校として一貫して来た東北学院が、その伝統を離れて「唯物的思考」を養うような理工科系学部の設置のごときは、建学の精神に反するのではないかといった反対論もあったと伝えられる。しかし、理事会の決意は固く…」とする（同書p.1124）。
- 8) 東北学院史資料センター蔵：工学部敷地史2/3（遠藤義夫ファイルNo.4）。なお「遠藤義夫ファイル」とは、工学部の設置に関わり

- (工学部設置準備委員)、そのまま初代の電気工学科長を務めた遠藤義夫が『東北学院百年史』(参考文献2)の編纂に際して整理した資料群である。一次資料と遠藤のメモ(二次資料)から成り、特に二次資料の扱いには注意を要するが、当時の様子を記録する貴重な記録と捉えられる。
- 9) 宮城県中学校長会編『宮城の中学校四十年』(1987.3)に拠れば、昭和30年代前半の校長会総会では、「昭和三十五年以降における生徒激増に伴う施設設備並に教員定数確保」や「中学校卒業生激増に伴う高校増設増募」がしばしば取り上げられていたことを確認できる。なお、遠藤が記す「千葉武州」は、前掲註8に含まれる「請願書」および上記書に拠れば「千葉武清」の誤記である。
- 10) 『東北学院時報』第187号、1960.5.7、p.1、「学院教育の現実と希望」
- 11) 『東北学院時報』第188号、1960.12.10、p.1、「年のせに立つて祈る」
- 12) 『東北学院時報』第190号、1961.7.1、p.1、「創立記念日を迎えて」
- 13) ただし後述するように、この年の4月1日には「工学部設置準備委員会」が発足し、7月10日には「東北学院大学工学部新設趣意書」が公表される。しかしその内容に照らして趣意書が3か月でまとまったとは考え難く、用地の取得が現実味を帯びる1960年の春頃から水面下で具体的な検討が始まっていたのではないかと推測される。ただしその正確な時期を示す記録は管見の及ぶ限り見当たらない。
- 14) 同註8) 所収：1961(昭和36)年9月25日付36仙財管第758号(東北財務局決裁文書)
- 15) 同註8) 所収：1962(昭和37)年2月27日付蔵管第440号(大蔵省管財局長発 東北財務局長宛)。
- 16) 国立公文書館蔵：東北学院 宮城 第1の3冊 昭和37年(請求番号：昭60文部00121100)。日付は文部省内での決裁日による。
- 17) なお、当初50,000坪(「学校基準から算定したる場合77,280坪を要するも約50,000坪以上あれば総合的に利用することが出来る」)で申請された払下げ面積は、最終的に33,707坪に留まった。遠藤義夫はその理由について旧地主層(海軍工廠設置時に所有地を接収された地域住民)との競合を回顧的に示唆するが、前掲する
- ように「同大が希望している地帯には請願者はなく…」との当時の新聞報道もあり(昭和33年7月8日『河北新報』)、その理由は断定し難い。
- 18) 参考文献2) p.1122
- 19) 『東北学院大学工学部 三号館新築(事務室 教授室 実験室 会議室 教室)』(東北学院史資料センター蔵)。建築基準法上、建築工事の着工には同法への適合性が検査機関(建築主事)によって確認されたことを示す「確認通知書」(確認済証)を受けることが必要だが、当該建物の確認通知書を見ると、当初の「工事着手予定日」が「昭和36年11月20日」、「工事完了予定日」が「昭和37年6月30日」とあるものの、実際に書類を提出したのが昭和36年11月22日、確認年月日が「昭和36年11月24日」であったことを確認できる。一方、この3号館の落成を伝える『東北学院時報』(第193号、1962.12.8、p.1)は、起工日を昭和36年11月20日、竣工日を昭和37年9月29日とする。
- 20) 同註16)
- 21) 図面の記載より、1960(昭和35)年10月6日の測量にかかる図面であることが知られる。
- 22) 図面中には1961(昭和36)年9月1日の日付がある。
- 23) 『東北学院大学工学部増置認可申請書』(同註16)中「職員組織」の項に、完成(昭和40)年度までの各学科の教員増員計画が記載されている。それぞれ完成時において、機械工学科は専任教員11名・専任助手/補助員6名・兼任教員8名・兼任教員10名、電気工学科は専任教員9名・専任助手/補助員6名・兼任教員8名・兼任教員12名、そして応用物理学科は専任教員10名・専任助手/補助員5名・兼任教員7名・兼任教員9名の体制が構築された(「兼担」は他学科の専任教員が科目を担当する場合を示す)。このうち表2には、専任教員のみを抜粋して示した。
- 24) さらに機械工学科には仙台高等工業学校卒業者が2名・宮城県工業高等学校の卒業者が1名、電気工学科には仙台高等工業学校卒業者が1名いる。
- 25) 国立公文書館蔵：学校法人東北学院 第1冊 昭和26～37年(請求番号：昭63文部00320100)
- 26) 竣工後の報告(『東北学院時報』第193号、1962.12.8、p.1、「工学部新校舍落成」)には、建築費1億700万円、附帯工事費600万円、合わせ

て総工費 1 億 1,300 万円とある。

- 27) 『東北学院時報』第192号、1962.5.15、p.1、「多賀城キャンパスの概要」。
- 28) 『東北学院時報』第193号、1962.12.8、p.1、「工学部新校舎落成」
- 29) 国土地理院の空中写真 (USA-M174-289) を回転・トリミングし、線と文字を加筆した。
- 30) 配置図は、国立公文書館に所蔵される各種の申請図書や、東北学院史資料センターに保管される建築図面 (施設課旧蔵) などに基づいて筆者が作成した (以下同様)。
- 31) 国立公文書館蔵：学校法人東北学院 第 1 冊 昭和26～37年 (請求番号：昭63文部00320100)
- 32) 参考文献 3)、p.26
- 33) 図中の黄色部分は、前段階 (この場合は図 5) 以後の変化を示す (以下同様)。
- 34) 設計図には「物理実験室」「化学実験室」「電気・機械実験室」「熱工学実験室」「通信工学実験室」「電気基礎実験室」とある。
- 35) 設計図には、大小様々な大きさを持つ「実験室」が 9 室、「教授実験室」が 3 室、他に「電子工学実験室」「電信実験室」「自動制御実験室」「計測実験室」「磁気実験室」「光学実験室」「X線実験室」が記されている。
- 36) 東北学院史資料センター蔵：『電気工学科卒業記念誌』(遠藤義夫資料) による。
- 37) 参考文献 2) p.1130-32
- 38) 東北学院史資料センター蔵
- 39) 遠藤義夫ファイル (東北学院史資料センター蔵) に書き残された回想的な記録によれば、計画道路は旧石器～近世にかけての遺跡の上を通ることから、大学当局では、キャンパス内の道路も迂回するとの見込みを持っていたことが記されている。
- 40) 東北学院大学情報処理センター ホームページ掲載の「情報処理センター沿革」による。

#### 【参考文献】

- 1) 花輪庄三郎編：東北学院七十年史、1968.7
- 2) 東北学院百年史編集委員会編：東北学院百年史、1989.5
- 3) 鶴本勝夫：東北学院理工系教育機関の系譜とその人脈－押川方義の創立理念－、東北学院資料室第11号、2012.4
- 4) 多賀城市教育委員会編：旧多賀城海軍工廠の調査、多賀城市文化財調査報告書第124集、2015.3

#### 崎山 俊雄プロフィール SAKIYAMA, Toshio

1975年北海道生まれ。博士 (工学)。東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻博士課程修了。株式会社フジタ建築設計センター計画設計部、秋田県立大学システム科学技術学部助教・准教授を経て2016年4月より現職。専門は近現代建築史・文化財の保存活用。主な著書に『社宅街 企業が育んだ住宅地』(学芸出版社、共著)、『ラーハウザー記念東北学院礼拝堂建造物調査報告書』(学校法人東北学院、編著) など。宮城県内外で歴史的建造物の調査や保存活用にも関わる。

# 史資料センター所蔵史料「東北学院年次報告 (Annual Report of Tohoku Gakuin)」の調査と分析<sup>②</sup>

東北学院史資料センター調査研究員  
東北学院大学文学部総合人文学科准教授

藤野 雄大

## 1. 序論

本論は、昨年度の『東北学院史資料センター年報』Vol.10に寄稿した拙論「史資料センター所蔵史料「東北学院年次報告 (Annual Report of Tohoku Gakuin)」の調査と分析」に連続したものである<sup>1</sup>。前号に引き続き、本論でも東北学院年次報告（以下「年次報告」と略す。）の活字化、私訳、および内容分析を行う。また本論では、米国ペンシルヴァニア州のランカスター神学校キャンパス内にあるERLA<sup>2</sup>で2025年8月に行った史料調査報告を含んでいる。次節で詳細を記しているように、この調査を通して、これまで本院では欠けていた年の「年次報告」を補うことができた。

なお「年次報告」についての解説は前号に詳しく触れている通りであるが、これは1892年から1940年代初頭までのおよそ50年間にわたって、東北学院から合衆国改革派教会海外宣教局に対して毎年一回送られた報告書である。執筆者は、最初期には本院三校祖のウィリアム・E・ホーイ初代副院長であり、その後はデイヴィッド・B・シュネーダー第2代院長が大部分の報告を行っている。そして末期になるとシュネーダーの院長引退と合わせて、第3代院長となった出村悌三郎が報告している。しかし第二次世界大戦期の情勢の悪化に伴って、その後は途絶し

たものと考えられる。当時の本院の経営責任者が記したものであること、さらに、毎年定期的に送られてきたことから戦前の本院の様子が、1年ごとに分かるものになっている。その意味で、史料的価値は極めて高いものである。前号ではすでに1892年から1894年までの「年次報告」の活字化と私訳<sup>3</sup>そして分析を行った。本論では、字数の関係もあり、1895年、1896年の2ヵ年分について論じていく。

## 2. ERLA調査研究および史料「年次報告」調査の進展

2025年8月18日から29日にかけて、本院百五十年史編纂作業の一環として、史料調査のためにランカスター神学校を訪問した。その他の公務もあり、全日程を史料調査のために用いることができたわけではなかったが、それでも数日間ほど、ランカスター神学校に所在するERLAのアーカイブにて集中的に史料調査を実施することができた。

その成果として、同アーカイブに所蔵されている膨大な史料の文献目録をはじめ、いくつかの新しい史料を発見、収集することに成功した。その史料の全てをここで紹介することはできないが、特筆すべきものとしては、第二次世界大戦後、本院のアルフレッド・アンケニー第5代院長および小田忠夫第6代院長が、海外伝道委員会に送った書簡が大量に発見されたことである。その全てを収集することはできなかったが、本院史資料センターには存在しない史料であり、特に戦後の復興期の状況を知る上で貴重な手掛かりになることが期待される。

一方、「年次報告」についても大きな進展があった。詳細は巻末付録を参照されたいが、これまで本院史資料センターでは原本が欠落していた年度の報告書の一部を発見し、補うことができた（具体的には1907年、1909年）。また、1941年についてはタイ

<sup>1</sup> 拙論「史資料センター所蔵史料「東北学院年次報告 (Annual Report of Tohoku Gakuin)」の調査と分析」、『東北学院史資料センター年報』Vol.10、28-43頁、2025年。

<sup>2</sup> ERLAとはE&R Library and Archivesの略称である。E&Rはそれぞれ「エヴァンジェリカル(Evangelical)」と「リフォーメド(Reformed)」の頭文字であり、合衆国改革派教会の後継教派の名称に基づく。しかし、「エヴァンジェリカル」という言葉が、今日のアメリカでは「福音派」という特定の政治的・神学的傾向を示すものとして広く通用しているため、混同を避けるために略称のみを正式名称とした経緯がある。なおERLAは長らくランカスター神学校内に所在していたが、2025年12月にウェストヴァージニア州ルイスバーク(Lewisburg, WV)に新しい建物を取得し、移転することになった。

<sup>3</sup> なお『年次報告』の翻訳はこれまでのところ存在しない。

トルが異なるが、エルマー・H・ゾーグ宣教師が報告を行っていた事実を確認できた。これも本院には未収蔵の史料であった。これ以降の報告はERLAにも存在せず、おそらく最後の報告であったと推測される。これらの「年次報告」についても、PDF化した史料を史資料センターに提出しているのですでに利用可能になっている。しかし、残念ながら欠落している全ての「年次報告」を発見することができたわけではなかった。そのため、原本の欠けた「年次報告」については、『メッセンジャー』に掲載されたものを通して補っていく作業が今後必要になるであろう<sup>4</sup>。

### 3. 原文の紹介と私訊

#### 3.1.1. 「年次報告」1895年版 原文（英文・手書き）<sup>5</sup>

Report of the Tohoku Gakuin  
for the year ending May 31. 1895.

To the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the United States,

Dear Brethren,

The number of students now on the roll of the Tohoku Gakuin is 141. The number in the Theological Department is 25 of whom six are senior, six are middles, and thirteen are junior. Besides the theological students there are a number of candidates for the ministry in the collegiate and preparatory classes. The exact number of these, however, can not be given, as the decision of some is as yet but partially formed.

In the collegiate and preparatory classes there are altogether 116 students, of whom 61 are Christians, while most of the rest are either pronounced seekers, or are favorably inclined to the truth. There have been two baptisms during

the year.

Bible instruction in Collegiate and Preparatory classes, though optional, is attended as well as the other recitations. The attendance at morning services has greatly improved during the year, and the attendance at Rev. Oshikawa's Bible class and at the church services is good. The general spirit prevailing among the students is encouraging. They are eager to learn. In teaching them our feels as if he were sowing upon virgin soil. There is much interest among them in the higher things of life, and few can breathe the atmosphere of the school long without becoming involved with higher aims and noble purposes.

There is also a considerable amount of school patriotism. Graduates and undergraduates leaving the school remember their Tohoku Gakuin with affection; and in Tokyo and Sapporo those who have gone out from the school have organized themselves into interesting associations for the purpose of perpetuating the ties formed and the influence imbibed here. This is a sign that the influences of the school is not lost upon the many even who leave before graduation.

The theological students are nearly all engaged in active work. Some of them preach regularly, others as occasion presents itself. Many of them teach in Sunday-schools. Two of them have become specially interested in the poor; and in order to have greater influence upon them, they live among them, share many of their hardships, and have become guiding and guardian spirit to many of these wretches. Another one has been sent as supply to Yamagata, and is doing very good work. Still another has been off to the war as interpreter, and two others entered the army as regular soldiers. One also entered the army of Satan, and had to be dismissed from the school.

Active Christian work is not confined to the theological students. Some of the most earnest and efficient Sunday-school workers are found in the Collegiate and Preparatory classes.

The Industrial Home has grown in numbers as well as in the confidence of those interested in it. It has become clear that the place is a success in every way. The health of the inmates is rather

<sup>4</sup> 前号でも記したが「年次報告」の一部は、合衆国改革派教会の教派新聞であった『メッセンジャー』に掲載されることが多かった。しかし全ての年度が当てはまるわけではなく、今後の調査が必要であるが、掲載されていれば欠落した年度の「年次報告」を部分的に補うことは可能である。

<sup>5</sup> 東北学院史資料センター所蔵。

improved than otherwise: their practical instincts as well as their true independence of spirit are cultivated; they get truer conceptions of real life, and become better adapted for it; and as to their studies, the grand total of their averages is nearly one percent better than that of the other students. They become acquainted with genuine hardship. Some are obliged to rise at three or four o'clock in the morning; others are seen running through the streets day after day carrying papers; and all of them subsist on the homeliest possible kind of fare. And yet withal they are a cheerful, enthusiastic set. All of the Tokyo newspapers are now carried by the Home Students.

The number now in the Home is 68. Of these 51 are Christians, and 17 are candidates for the ministry.

The whole expenditure of the Home has been for the year yen 2871, or an average of yen 3.50(\$1.85) for each student per month. Of this amount yen 1200 were contributed from the school fund; yen 1018 were earned by the students; and the rest has been made up by the contributions of friends, both Japanese and foreign.

At the beginning of the spring term of this year the curriculum for the Collegiate and Preparatory class was changed. The three preparatory and the first two collegiate years were put together into a course that corresponds somewhat with the ordinary middle school of the government, and the last two collegiate years were divided into two courses, a literary and a scientific. This change is probably a benefit to those who wish to enter the Theological Department, and it also brings the school into better harmony with the general educational system of the country, these removing are of the obstacles to its usefulness. The change has not involved any increase in teaching force, nor any material increase in expenditure.

The faculty is now composed of four missionary teachers and fifteen Japanese teachers. The missionary teachers give from 15 to 20 hours per week to teaching, while some Japanese give 20 hours while others give less, according to circumstances. All are doing earnest work, and with experience our teaching force promises to

become very efficient. During the year we had fondly looked forward to adding to our member as teachers of Old Testament branches Mr. Kaneko, graduate of Lancaster Seminary; but in the providence of God we have been disappointed; his sad and early death is a deep loss to me.

As will be noticed by comparing last year's report of the school with this year's, there has been a falling off in the number of students. Even the number now enrolled, as in usually the case, not fully represented by actual attendance in the school. The decrease is due no doubt to both external and internal causes. Among the external cause are the war, an adverse public sentiment, and the fact that from a purely worldly standpoint, outside of candidates for the ministry, the graduates of this school are at a decided disadvantage with graduates of government school. It is the fear of "no future" that leads many away. Also, the fact that the public deals the school as a "Jesus School" is enough to make some young men uncomfortable in it. There are also internal causes. Thus for there have been many changes in the Japanese teaching force, and it always takes new men sometime to learn to know the school and to become thoroughly identified with it. Moreover when customs and ideas are so different as they are between Americans and Japanese, their efficient cooperative management of a school is not an easy matter. And there are no doubt other causes of greater or less importance.

Another feature that is not encouraging is the large amount of change in the personal of the students. As in all Japanese schools the percentage of students who finish their course is small. Many of those trained with much care in our lower classes pass out and go elsewhere or stop altogether, and the pains taken on them seems largely lost. Yet it is not entirely loss. No student can be in the school any length of time without carrying with him something that will some time in some way directly or indirectly redound to the progress of Christ's kingdom. Currents of thought and life are started that will never be lost.

The mission of the school has never been clearer than now. Its usefulness in the future will only be

limited by its strength and efficiency. The filled of its usefulness is unbounded. All friends of the school therefore should not slacken their efforts in its behalf. The school still has needs. The recitation rooms are by six or seven too few, and some of the classes are heard in the dormitory and other in the chapel. More dormitory room also is an important necessity.

May the Lord grant to all who hope for the salvation of Japan a deeper interest in this Christian school; and may He grant to all who are appointed to labor in this school renewed grace and consecration to meet the great opportunities as well as the extraordinary difficulties and trials of this important work.

Respectfully submitted,

D. B. Schneder, Active President of the Board of Directors.

### 3.1.2. 同私訳

東北学院報告（1895年5月31日）

合衆国改革派教会海外伝道局御中

親愛なる兄弟たちへ

現在、東北学院に在籍している学生・生徒数は141名です。神学部（Theological Department）の学生数は25名で、そのうち6名が3年生、6名が2年生（middles）、13名が1年生です。神学生のほかに、普通科および予科のクラスにも、伝道者志願者が数名います。しかし、一部の者の決意はまだ不完全な形成段階にあるため、正確な人数を挙げることはできません。

普通科および予科のクラスには合計116名の学生・生徒がいて、そのうち61名がキリスト教徒であり、残りの者のほとんどは、公言した求道者（pronounced seekers）であるか、あるいは真理に対して好意的な傾向を持っています。この1年間に2件の洗礼が行われました。

普通科および予科における聖書教育（Bible instruction）は、選択制ではありますが、他の授業と同様に良好に出席されています。朝の礼拝（morning services）への出席はこの1年で大幅に改善され、押川牧師（押川方義）の聖書クラスおよび教会礼拝への出席も良好です。学生・生徒たちの

間に普及している全体的な精神は勇気づけられるものです。彼らは学ぶことに熱心です。彼らを教える際、人はまるで処女地に種をまいているかのような感覚を覚えます。彼らの間には人生のより高尚な事柄への強い関心があり、この学校の雰囲気の中に長く身を置いて、より高い目的や崇高な志に関わらずにいられる者はほとんどいません。

また、かなりの程度の愛校精神（school patriotism）も存在します。卒業生や、卒業を待たずに退学した者も、愛情を持って東北学院を記憶しています。東京や札幌では、本校を去った者たちが、ここで形成された絆と吸収した影響を永続させる目的で、興味深い親睦団体（補註：同窓会を指す）を組織しています。これは、卒業前に去る多くの人々にとっても、学校の影響が失われていないことの印です。

神学生は、ほぼ全員が実際的な伝道活動に従事しています。ある者は定期的に説教し、他の者は機会がある際に行っています。彼らの多くは日曜学校で教えています。そのうちの2名は、特に貧しい人々に関心を持つようになりました。彼らに対してより大きな影響力を与えるために、彼らは貧民の中に住み、彼らの苦難の多くを分かち合い、これら不幸な人々の多くにとって指導的・保護的な精神となっています。もう一人の学生は代理として山形に送られ、非常に優れた働きをしています。さらに別の一人は通訳として戦争（補註：日清戦争であろう）へ赴き、他の二人は正規の兵士として軍隊に入りました。また一人はサタンの軍勢（army of Satan）に入り、学校から放逐されなければなりません（補註：正確な意味は不明だが、素行不良か反宗教的行為による退学者を示唆していると思われる）。

活発なキリスト教活動は、神学生だけに限定されません。最も熱心で有能な日曜学校奉仕者の一部は、普通科や予科のクラスの中にも見出されます。

労働会は、その人数においても、またそこに関心を寄せる人々の信頼においても成長しました。この場所があらゆる面で成功していることは明らかになりました。入所者の健康状態はむしろ改善されており、彼らの実際的な本性と精神の真の独立心が養われています。彼らは現実の生活についてのより真実な概念を得て、それにより適応できるようになります。学業に関しては、彼らの平均点の総計は、他の学生の平均よりも1%近く良好です。彼らは本物の苦難を経験します。ある者は朝の3時や4時に起きなければならず、他の者は来る日も来る日も新聞を運んで街中を走る姿が見られます。そして彼ら全員

が、可能な限り最も質素な種類の食事で生活しています。それにもかかわらず、彼らは陽気で熱心な集団です。現在、東京の新聞はすべて労働会の学生・生徒によって配達されています（補註：東京で発行されている新聞各紙が仙台市内ではすべて労働会の学生・生徒によって配達されているということであろう）。

現在、労働会には68名が在籍しています。このうち51名がキリスト教徒であり、17名が伝道者志願者です。

労働会の全支出は、年間2871円、または学生1人あたり月平均3.50円（1.85ドル）でした。この金額のうち、1200円は学校資金から寄付され、1018円は学生・生徒によって稼ぎ出されました。残りは、日本人および外国人の友人たちの寄付によって補われました。

今年の春学期の初めに、普通科および予科のカリキュラムが変更されました。予科の3年間と普通科の最初の2年間が統合され、政府の尋常中学校にほぼ相当する課程となりました。そして普通科の最後の2年間は、文科（補註：文科専修部）と理科（補註：理科専修部）の2つの課程に分けられました。この変更は、おそらく神学部への入学を希望する者にとって有益であり、また、学校を国の一般的な教育制度により適合させ、その有用性に対する障害を取り除くこととなります。この変更は、教授陣の増員も、支出の実質的な増加も伴いませんでした。

教員は現在、4名の宣教師教師と15名の日本人教師で構成されています。宣教師教師は週に15時間から20時間の授業を担当し、日本人教師のある者は20時間、ある者は状況に応じてそれ以下の時間を担当しています。全員が熱心な仕事をしており、経験を積むことで、我々の教授陣は非常に有能になることが期待されます。この1年の間、我々は旧約聖書部門の教師として、ランカスター神学校の卒業生である金子氏（補註：金子謹三のこと。金子は将来を嘱望されていたが、ランカスターで客死した。）をメンバーに加えることを切望していましたが、神の摂理により、我々の期待は裏切られました。彼の悲しくも早い死は、私にとって深い損失です。

昨年の学校報告と今年の報告を比較すれば分かるように、学生・生徒数に減少が見られます。現在名簿に登録されている数でさえ、通常よくあることですが、実際の出席を完全には反映していません。減少の原因は、疑いなく外的および内的な原因の両方にあります。外的な原因の中には、戦争、世論の逆

風、そして純粋に世俗的な視点からは、伝道者志願者を除いて、本校の卒業生が官立学校の卒業生に対して決定的に不利な状況にあるという事実があります。「将来がない（no future）」という懸念が、多くの者を去らせる原因となっています。また、世間がこの学校を「耶蘇（ヤソ）の学校（Jesus School）」として扱っているという事実も、一部の若者を居心地悪くさせるのに十分です。内的な原因もあります。これまでに日本人教授陣に多くの交代があり、新しい人間が学校を理解し、完全に学校に馴染むまでには常に時間がかかります。さらに、アメリカ人と日本人の間のように習慣や考え方が大きく異なる場合、それらの効率的な協力体制による学校運営は容易なことではありません。そして、多かれ少なかれ重要な他の原因も疑いなく存在します。

勇気を失わせるもう一つの特徴は、学生・生徒の顔ぶれの入替わりが激しいことです。すべての日本の学校と同様に、課程を修了する学生・生徒の割合はわずかです。下級クラスで細心の注意を払って訓練された者の多くが、去って他所へ行くか、あるいは完全に学業を辞めてしまい、彼らに費やされた苦労は大部分が失われたように見えます。しかし、それは完全に失われたわけではありません。どのような学生も、ある程度の期間本院に在籍すれば、いつか何らかの形で、直接的または間接的にキリストの王国の前進に貢献することになる何かを携えて去るのです。決して失われることのない思想と生命の流れが始まっているのです。

本院の使命は今ほど明確なときはありません。将来におけるその有用性は、ただその強さと効果によってのみ制限されるでしょう。その有用性の分野は無制限です。したがって、学校のすべての協力者たちは、学校のための努力を緩めるべきではありません。学校には依然として必要性があります。教室は6つか7つ不足しており、一部のクラスは寄宿舎で、他のクラスは礼拝堂で行われています。より多くの寄宿舎の部屋も重要な必要事項です。

主が、日本の救いを望むすべての人々に、このキリスト教学校へのより深い関心を与えてくださいますように。そして主が、この学校で働くよう任命されたすべての人々に、この重要な仕事の並外れた困難や試練と同様に、大きな機会に応えるための新たな恵みと献身を与えてくださいますように。

謹んで提出いたします。

理事局長代行デイヴィッド・B・シュネーダー

### 3.1.3. 分析

本報告は日清戦争直後の東北学院の状況を伝えている。本報告書でシュネーダーが示す数字と嘆きは、当時のキリスト教学校が直面していた現状を明らかにしている。一つは学生・生徒数の減少と明確な「官尊民卑」という課題である。徴兵猶予や上級学校への進学資格は官立・公立校に特権的に与えられており、私立の「耶穌の学校 (Jesus School)」、すなわちキリスト教学校に在籍することは、世俗的な立身出世を望む学生にとっては「未来のない」進路とみなされていたことが分かる。

それは当時の私立学校共通の課題でもあった学生・生徒の定着率や卒業率の低さにも表れている。情熱を注いで教育した学生が転校や退学してしまう現状の中で、教師陣が疲弊しつつある状況を窺うことができる。本院の建学の精神を理解し、伝道者として働く者の数も決して少なくはなかったが、日清戦争の影響もあり、当時の学生は激しく移り変わり、教育効果という点で懸念を抱えていたことが示唆される。そのような状況の中で、政府の学校制度改革に合わせていくことは不可欠の課題であったと言えるだろう。

しかし一方で、シュネーダーは学生・生徒一般の学習意欲の高さや、愛校心の強さを記しており、今日の同窓会のルーツといえる卒業生・学校関係者の親睦会が、東京や札幌で組織されていることを伝えている。その他の特筆事項としては、労働会の役割の大きさ、また金子謹三の急逝が与えた衝撃が指摘できる。

#### 3.2.1. 「年次報告」1896年版 原文 (英文・タイプ)<sup>6</sup>

Report of the Tohoku Gakuin.

The Tohoku Gakuin has had a good year. Though the school has made no marked forward strides, it has more than held its own in numbers, in achievement and in earnestness of spirit; and this, considering the disadvantages under which in general private Christian schools in Japan labor, is saying much. The school is also growing in

reputation both within, and outside of, Christian circles.

In going into particulars this report will touch upon such topics as the president, the teaching force, the students, the theological department, religious work for the school, the Industrial Home, the buildings, and relations with surroundings.

The president, Rev. M.Oshikawa, is a man of deep and sincere Christian character, of thorough consecration to the work of Christ in Japan and of great personal force. His influence over the whole school is most marked and decided. Teachers and students look up to him, and the moulding effect of his character is correspondingly great. His main strength and time have been given to the school during the year. He comes into very frequent personal contact with the students, many hours of his time being given up to visits from them at his own house. His formal teaching is mainly confined to Bible instruction to the various classes and a weekly lecture before the whole school. His general influence is enhanced by the fact that he is able to command the respect of men in the highest positions of honor and influence, among many of whom he is well and favorably known. His devotion to the school is genuine and without reserve.

The courses of study in the school are as follows: first, there is a Collegiate Course of five years, corresponding in a general way to the course of the ordinary Middle Schools of the Government. This is followed by two special courses of two years each, a Literary and Scientific. After the Literary Course comes the English Theological Course of three years, along side of which also a vernacular course of three year is carried on. To meet the requirements of these courses there have been during the year five missionary teachers and, including the president, sixteen Japanese teachers, not all of whom give their full time to the school however. The missionary teachers have two kinds of work to do: first, to teach theology and the higher branches of secular learning, such as psychology, ethics and philosophy; and secondly, to teach English from the first classes up, so that the members of the higher classes may be able to use English books and receive part of their instruction

<sup>6</sup> 東北学院史資料センター所蔵。

in English. To the latter work Revs. Snyder, Miller and Schneder give part of their time. As regards the other work, Rev. J.P. Moore D.D. teaches Practical Theology, History of Doctrines and New Testament Greek; Rev. H.K. Miller teaches Ethics, Apologetics, Natural Theology and Comparative Religion; Rev. S. S. Snyder teaches the Biblical Sciences; Rev. C. Noss, Greek, Psychology, and Exposition of the Bible, and Rev. D.B. Schneder, Dogmatics, Theological Introduction and History of Philosophy. No Hebrew is taught. It was hoped that the mourned Kaneko would make a beginning in this line. Among the Japanese teachers we have one who teaches Church History to both the English and Japanese classes. He is a graduate of Wabash College and Union Seminary, a most earnest and excellent young man, who, however, at this hour is laid low with a serious illness. Two other Japanese teachers devote themselves mainly to teaching theology to the Japanese classes. Another, who recently resigned, gave most of his time to teaching Psychology, Ethics and Philosophy to the vernacular theological classes.

For the Collegiate and Special classes there is one teacher of German, one of Physics and Astronomy, one of Chemistry, Botany and Physiology, one of Mathematics two of translation, one of the Chinese Language and Literature, one of the Japanese Language and Literature, one of History, one of Drawing and one of Gymnastics. Some of these Japanese teachers are very hard workers, earnest students and excellent teachers. That they are not inferior in quality to teachers in other schools of similar grade is shown by the fact that during the year four of them received appointments to Government schools at salaries ranging from 20 to 100 per cent higher than we paid them. This resignation of good teachers has been one of our serious misfortunes during the year. Yet we are glad to say that others remain who could do equally as well from a financial standpoint by leaving. Many of our teachers are with us because they love the school and its principles of righteousness and a higher life. This whole force of Japanese teachers, exclusive of President Oshikawa, cost during the year \$2370.68,

an average of \$158. per man,

The whole number of students on the roll during the year was 205. Of these 154 are now in the school. This shows a loss of 51. Of this number 7 went out by graduation, and the remaining 44 for various reasons withdrew before graduation. The number of withdrawals is large, though not larger in proportion than during previous years. But these numerous losses are one of the most discouraging features of the school. It is one of the drawbacks to educational work in Japan generally. The ordinary Middle Schools of the Government succeed in graduating but 1 out of 19. The reason for leaving are sickness, lack of funds, family circumstances, change of purpose, and other things, the gauntlet of which but few young men succeed in running successfully. Divided according to courses, there are 23 in the Theological Department, 15 in the Literary Course, 2 in the Scientific Course, and 114 in the Collegiate Course. Divided according to their attitude towards Christianity, there are 80 Christians, and 74 non-Christians. But of these latter probably none are positive unbelievers. With few exceptions they are all more or less inclined to Christianity. Two were baptized during the year, and ten are under special preparation for baptism. Many others receive Bible instruction and attend morning prayers. The higher classes are prevaillingly Christian. The number of candidates for the ministry in the Collegiate and Literary Classes is between 20 and 30, the number being indefinite on account of the fact that some have not yet fully decided the question. The students of the school are as a rule hard-working and faithful. The number of recitation hours averages over five per day. The work of teaching is rarely obstructed by misbehavior in the class-room. Cases that require severe discipline are few, though these few are usually troublesome. Those above the three lowest classes especially are nearly all young men of earnest spirit and high purpose, and are daily drinking in new inspiration for righteous and useful life, and whether they will become ministers or remain laymen, they give good promise of becoming shining lights and a preserving salt in the midst of a spiritually darkened and corrupt society.

The Theological Department has done full and satisfactory work. Probably so far as regularity and faithfulness are concerned, this has been the best year this department has had yet. The students, though naturally inclined to inquiry and independent thought, are teachable, and are laying a good foundation of Christian knowledge. In force and stability of character some seem to be well equipped to live the life of an effective Christian preacher of Christ in Japan, while others have much yet to learn. There will be four graduates this year, two from the English Course and two from the Japanese.

The religious work of the school is carried on through a variety of agencies. First are the daily morning services, usually conducted by the President. Attendance upon these is only morally obligatory. The number attending varies in size. Sometimes nearly the whole school is present, sometimes a much smaller number. The average for this year however, has been considerably higher than it was last year. No student can attend these exercise without being influenced by them. Here he hears and takes part in the singing of Christian hymns, hears the word of God read, and hears, perhaps for the first time in his life, intelligible and earnest prayer addressed to a personal God and Father. Another agency is what is called the weekly moral lecture, required in all higher schools in Japan. This lecture in our school often takes the form of a talk on apologetics, or on Christian morality, or on one's true relation to his country, and it is through these lectures largely that the students become inspired with higher ideas of life and with higher purposes for their own life's career. One of the effects of the school upon the mind of a young man entering the school from heathenism is, that his mode of looking at things human and divine undergoes a revolution. His conceptions of the meaning and object of life change, and his ideas of right and duty become ennobled; and one of the chief agencies in this direction is these weekly lectures. Included in the curriculum of the school is one hour per week of Bible instruction. It is considered an optional study, but in fact in point of attendance and interest there is little difference

between it and the required studies. Another agency is Rev. Oshikawa's students' Bible Class in the Sunday School. At this exercise the number present ranges from 60 to 90. Still another agency is the religious work done in the Industrial Home. One of our Last year's graduates gives his entire time to the Home, mainly in the capacity of monitor and religious teacher. Every Saturday morning from 8 to 9 a prayer meeting is held in the Home and every Sunday morning there is a gathering from half past seven to half past eight for Bible study. Besides this there is private teaching. Many of the non-Christian students attend the church services, and the attendance of Christian students at the church prayer-meetings is good. The theological students meet occasionally for prayer by themselves.

Religious work by the school consists of what teachers and students are doing for spread of the Gospel outside of the school. Besides the missionary teachers those among the Japanese teachers who are ordained or licensed, of whom there are five, are very active in Christian work, both in Sendai and around. For the last eight months the Sendai church has been without a pastor, and during this time the teachers of the school have been carrying on the work of the church almost entirely. When they go out to the country preaching-places, they are welcomed and gladly heard. Some of the other teachers also engage in active work. Most of the theological students are doing work of some kind, either conducting or, or teaching in Sunday-schools, or preaching, and doing private work. Several of them are valued officers in the Sendai church. Some teach small gatherings of people at the houses of believers, Two work among the poor, living among them, sharing their mode of life to some extent, and winning their confidence. One of these brought two candidates for baptism some month ago. One of the students is stated supply for one of the vacant congregations. Five teach regularly in the Sunday school of the Sendai church. Among the other students there are also a number who are actively engaged in Sunday School work. Besides this the fact may be mentioned that the school affords a strong support and stimulus to the whole

evangelistic work of the North, and without it the work would undoubtedly be much weaker.

The Industrial Home is keeping up its excellent record. The number now in the Home is 94. The lines of industry are about the same as before, namely, carrying newspapers, selling milk, doing janitor's work, washing, peddling oil, beef, Japanese sauces, etc. Newspaper carrying is about the most profitable work. Most of the newspapers taken in Sendai are carried by the students. Next is the milk business. Last fall Rev. Oshikawa made a purchase of a small herd of cows for the purpose of establishing a Home dairy. This purchase together with some misfortunes attending it, has involved him in a debt of over a thousand yen. After the enterprise is well on foot, however, it will bring in a good revenue no doubt. The Home is housed in a large old building rented at yen 209.00 per year. The students work about three hours per day. Their food is of their plainest kind, and scarcely sufficient for their proper sustenance. Yet they are not discontented, but on the contrary enthusiastic in their privations, and during the winter they declined to receive an increase of allowance for support. The spirit of the Home is very good. The whole income for the year was yen 3161.25. Of this amount the school treasury contributed yen 1200; the Board of Commissioners for Foreign Missions by special appropriation, yen 187.09 (\$100. gold); the Martha Memorial Church of New York, yen 18.31 (\$10. gold). Yen 585.76. were contributed from purely Japanese sources. The remaining yen 1170.09 were earned by the students. The whole expenditure was yen 4568.91, of which the dairy enterprise cost yen 1291.71. The debt is yen 1407.66.

The building are inadequate for the needs of the institution. This difficulty, however, will no doubt be overcome after the return to Japan of Rev. W. E. Hoy, whose very ardent and successful labors in the Home far towards lifting the school upon a higher plane of success and usefulness still.

The standing of the school in the community is very good. At our last commencement the Governor of Miyagi Ken made an appreciative address. Of course the school stands in high

favor among the Christians of Northern Japan. Even most of those who leave the school before graduation remember the school and its teachers with affection, and carry its influences with them, so that gradually but surely the school is becoming a part of the life of this part of the country.

There will be no Collegiate graduating class this year, the change of curriculum last year having eliminated one class. Valuable additions to the library costing over \$300. were made during the year, and new scientific apparatus costing \$136. was secured. The wood work of the brick building was repainted, and all the property kept in good repair. There is also a contract being made to have the brick building strengthened against earthquakes, which during the last year or two have become more frequent.

In conclusion, we desire to give expression to our gratitude for the manifestations of God's presence and goodness during the year. What has really been accomplished He alone knows, and He alone deserves the praise. Without Him we have done nothing. The school, we firmly believe, is one of God's divinely appointed means of advancing the kingdom of Christ in this increasingly interesting and important nation of the Orient, and as such it invites the continued confidence and support of all friends of Christ's work in Japan.

Respectfully Submitted.  
D. B. Schneder,  
Acting President of the Directors.

Sendai, June 6 th. 1896.

## 3.2.2. 私訊

## 東北学院報告

東北学院は良い1年を過ごしました。学校に顕著な躍進があったわけではありませんが、学生数、業績、そして精神の熱心さにおいて、現状を十分に維持しました。日本の私立のキリスト教学校が一般に置かれている不利な状況を考えれば、これは特筆すべきことです。本院の評判は、キリスト教界の内外で高まっています。

詳細については、本報告書では院長、教授陣、学生・生徒、神学部、学校のための宗教的働き、労働会、建物、および周囲との関係といった話題に触れます。

院長である押川方義牧師は、深く誠実なキリスト教的人格の持ち主であり、日本におけるキリストの御業への徹底した献身と、偉大な人間的影響力を備えた人物です。学校全体に対する彼の洗練された影響は極めて顕著かつ決定的です。教師も学生・生徒も彼を仰ぎ見ており、彼の人格がもたらす形式的な影響は相応に大きなものです。この1年、彼の主な活力と時間は学校に捧げられました。彼は非常に頻繁に学生・生徒たちと個人的に接触しており、彼らが彼の自宅を訪ねるために多くの時間が割かれています。彼の公式な授業は主に各クラスへの聖書教育と、全校生に対する週一度の講演に限られています。彼の全体的な影響力は、彼が最高位の名誉や影響力を持つ人々から尊敬を集めており、彼らの多くに好意的に知られているという事実によって高められています。彼の学校への献身は本物であり、惜しみないものです。

本院の学習課程は以下の通りです。第一に、政府の尋常中学校の課程に概ね対応する5年間の普通科課程があります。これに続いて、文科と理科の2年間の専門課程がそれぞれあります。文科課程の後に3年間の英語神学課程があり、それと並行して3年間の邦語課程も行われています。これらの課程の要件を満たすために、この1年間、5名の宣教師教師と、院長を含めて16名の日本人教師がいましたが、全員が学校に全時間を割いているわけではありません。宣教師教師には2種類の仕事があります。第一に、神学および心理学、倫理学、哲学といった世俗的な学問の高等部門を教えること。第二に、上級クラスの生徒が英語の書籍を使用し、授業の一部を英語で受けられるよう、初級クラスから英語を教えることです。後者の仕事には、スナイダー (Snyder)、

ミラー (Miller)、シュネーダー (Schneider) の各牧師が時間の一部を割いています。その他の仕事に関しては、ジャイラス・P・モール博士 (J.P. Moore) が実践神学 (Practical Theology)、教理史 (History of Doctrines)、新約聖書ギリシア語を教えています。ヘンリー・K・ミラー牧師は倫理学、弁証学 (Apologetics)、自然神学 (Natural Theology)、比較宗教学 (Comparative Religion) を教えています。シルヴァナス・S・スナイダー牧師は聖書諸科学 (Biblical Sciences) を、クリストファー・ノッス牧師 (C. Noss) はギリシア語、心理学、聖書釈義を、そしてデイヴィッド・B・シュネーダー牧師が組織神学 (Dogmatics)、神学概論 (Theological Introduction)、哲学史 (History of Philosophy) を教えています。ヘブライ語は教えられていません。惜しまれる亡き金子氏 (the mourned Kaneko) がこの分野の端緒を開くことが期待されていました。日本人教師の中には、英語と日本語の両クラスに教会史 (Church History) を教える者が一人います。彼はウォバッシュ大学 (Wabash College) とユニオン神学校 (Union Seminary) の卒業生で、非常に熱心で優れた青年ですが、残念ながら現在は重病で伏せています。他の2名の日本人教師は、主に日本語クラスへの神学教育に専念しています。最近辞職したもう一人は、邦語神学クラスへの心理学、倫理学、哲学の教授に大半の時間を割いていました。

普通科および専門課程には、ドイツ語教師が1名、物理学と天文学が1名、化学・植物学・生理学が1名、数学が1名、翻訳が2名、漢文学が1名、国文学が1名、歴史が1名、図画が1名、体操が1名います。これらの日本人教師の何人かは非常に勤勉な働き手であり、熱心な研究者であり、優れた教師です。彼らが同等の格付けを持つ他校の教師と比較して質的に劣っていないことは、この1年間に彼らのうち4名が、我々が支払っていたよりも20%から100%高い給与で官立学校への任命を受けたという事実によって示されています。これらの優れた教師の辞職は、この1年間の重大な不幸の一つでした。しかし、経済的な観点から離職しても同様にやっつけられるにもかかわらず、留まってくれている人々がいることを嬉しく思います。我々の教師の多くは、学校とその正義の原則、そしてより高尚な生活を愛しているがゆえに、我々と共にいます。押川院長を除くこれら日本人教授陣全体の費用は、年間2370.68ドルで、1人あたり平均158ドルでした。

年間学籍簿に登録された学生・生徒の総数は205

名でした。このうち154名が現在在学しています。これは51名の減少を示しています。このうち7名は卒業によって去り、残りの44名は様々な理由で卒業前に退学しました。退学者の数は多いですが、例年と比較して割合が高いわけではありません。しかし、これら多数の損失は本校の最も落胆させる特徴の一つです。これは日本の教育活動全般における欠点の一つでもあります。政府の尋常中学校でさえ、19人のうち1人しか卒業させることができていません。退学の理由は、病気、資金不足、家庭の事情、志望の変化などであり、これら数々の難関を無事にくぐり抜けることができる若者はわずかです。課程別に分けると、神学部には23名、文科課程には15名、理科課程には2名、普通科には114名です。キリスト教に対する態度で分けると、キリスト教徒が80名、非キリスト教徒が74名です。しかし、後者のうちでおそらく明確な不信仰者は一人もいません。わずかな例外を除いて、彼ら全員が多かれ少なかれキリスト教に傾倒しています。この1年間に2名が洗礼を受け、10名が洗礼のための特別な準備に入っています。他の多くも聖書教育を受け、朝の祈りに出席しています。上級クラスは圧倒的にキリスト教徒です。普通科と文科課程における伝道者志願者の数は20名から30名の間ですが、一部の者がまだ完全に決心していないため、数は不確定です。本院の学生は概して勤勉で忠実です。授業時間は1日平均5時間を超えます。教室での不作法によって授業が妨げられることはめったにありません。厳しい懲戒を必要とするケースは少ないですが、それら数少ないケースは通常、厄介なものです。特に3つの最下級の3クラスより上の学生たちは、ほぼ全員が熱心な精神と高い目的を持った青年であり、正しく有用な生活のための新たな感化を日々吸収しています。彼らが牧師になるか信徒のままにいるかにかかわらず、精神的に暗く腐敗した社会の中で、輝く光となり、保存する塩となる優れた見込みがあります。

神学部は充実した満足のいく働きをしました。おそらく、規則正しさと忠実さに関する限り、今年は神学部にとってこれまでで最良の年でした。学生たちは、本質的に探究心があり独立した思考を持つ傾向がありますが、教えを素直に受け、キリスト教知識の良好な基礎を築いています。人格の力と安定性において、ある者は日本におけるキリストの有能なキリスト教伝道者として生きるための十分な備えができていますように見えますが、他の者はまだ多くを学ぶ必要があります。今年は4名の卒業生が出る予

定で、英語課程から2名、邦語課程から2名です。

学校の宗教的働きは、多様な働きを通じて行われています。第一に、通常は院長によって行われる毎朝の礼拝があります。これらへの出席は道徳的な義務のみです。出席者数は変動します。時には学校のほぼ全員が出席し、時にはずっと少ない人数になります。しかし、今年の平均は昨年よりもかなり高くなっています。どのような学生・生徒も、これらの行事に出席すれば影響を受けずにはられません。ここでキリスト教の讃美歌を聞いて共に歌い、神の言葉が読まれるのを聞き、そしておそらく人生で初めて、人格的神であり父に捧げられる、明快で熱心な祈りを聞くのです。別の働きは、日本のすべての高等教育機関で義務付けられている「毎週の徳育講演（補註：修身を指すか）」と呼ばれるものです。本校におけるこの講演は、しばしば弁証学、キリスト教道徳、あるいは国家に対する個人の真の熱意についての話の形をとります。学生たちが人生のより高尚な理念と自分自身の生涯のキャリアに対するより高い目的を抱くようになるのは、主にこれらの講演を通じてです。異教的環境から本院に入学した青年の心に対する学校の影響の一つは、人間的な事柄や神聖な事柄に対する彼の見方に革命が起きることです。人生の意味や目的についての概念が変わり、正義や義務についての考えが高貴なものになります。そして、この方向における主要な機関の一つが、これら毎週の講演なのです。学校のカリキュラムには、週に1時間の聖書教育が含まれています。これは選択科目とみなされていますが、実際には出席と関心の点において、必修科目とほとんど差がありません。もう一つの機関は、日曜学校における押川院長の学生聖書クラスです。この行事の出席者は60名から90名に及びます。さらにもう一つの機関は、労働会で行われている宗教活動です。昨年の卒業生の一人が、主に舎監およびキリスト教教師の資格で、労働会に全時間を割いています。毎週土曜日の午前8時から9時まで労働会で祈祷会が開催され、毎週日曜日の午前7時半から8時半まで聖書研究のための集いがあります。このほか、個人的な指導も行われています。非キリスト教徒の学生の多くが教会の礼拝に出席しており、キリスト教徒の学生・生徒の教会の祈祷会への出席も良好です。神学生は時折、自分たちだけで祈るために集まります。

学校による宗教的働きは、教師と学生が学校の外で福音を広めるために行っている活動で構成されます。宣教師教師のほかに、日本人教師の中で按手を

受けた者、あるいは説教者の資格を持つ者が5名おり、仙台市内およびその周辺でのキリスト教活動に非常に積極的です。ここ8か月間、仙台教会は牧師が不在であり、この間、本院の教師たちが教会の働きをほぼ全面的に担ってきました。彼らが地方の伝道所に出向くと、歓迎され喜んで話を聞かれます。他の教師たちの一部も活発な働きに従事しています。神学生のほとんどが、日曜学校の運営や指導、あるいは説教や個人的な伝道など、何らかの働きをしています。彼らのうち数名は、仙台教会の重要な役員を務めています。信者の自宅での小さな集まりで教える者もいます。2名は貧民の間で働き、彼らの中に住み、ある程度彼らの生活様式を分かち合い、彼らの信頼を勝ち取っています。彼らの一人は数か月前、2名の洗礼志願者を連れてきました。神学生の一人は、牧師不在の教会の一つの代務者を務めています。5名は仙台教会の日曜学校で定期的に教えています。他の学生の中にも、日曜学校の働きに積極的に従事している者が多数います。これに加えて、本院が東北の伝道活動全体に対して強力な支持と刺激を与えており、本院がなければその働きは疑いなくはるかに弱くなっていたであろうという事実を挙げることができます。

労働会は、その優れた記録を維持しています。現在の在籍数は94名です。労働の種類は以前とほぼ同じで、新聞配達、牛乳販売、用務員、洗濯、油・牛肉・日本の調味料（補註：醤油など）の行商などです。新聞配達是最も利益の上がる仕事です。仙台で購読されている新聞のほとんどは、学生によって配達されています。次は牛乳事業です。昨秋、押川院長は労働会直営の乳牛場を設立する目的で、小さな牛の群れを購入しました。この購入は、それに付随するいくつかの不幸な出来事と重なり、彼に1000円以上の負債をもたらしました。しかし、事業が軌道に乗れば、間違いなく良好な収益をもたらすでしょう。労働会は、年間209円で借り上げた大きな古い建物に収容されています。学生・生徒たちは1日約3時間働きます。彼らの食事は極めて簡素な種類のもので、適切な栄養補給にはかろうじて足りる程度です。それにもかかわらず、彼らは不満を抱くどころか、むしろ窮乏の中でも情熱的であり、冬の間、彼らは生活支援金の増額を受け取ることを拒みました。労働会の精神は非常に良好です。年間の総収入は3161.25円でした。この金額のうち、学校会計から1200円、海外伝道局からの特別割当金として187.09円（金貨100ドル）、ニューヨークのマーサ記念教会

(Martha Memorial Church) から18.31円（金貨10ドル）が拠出されました。585.76円が純粋に日本国内の源泉から寄付されました。残りの1170.09円は学生たちによって稼ぎ出されました。総支出は4568.91円で、そのうち乳牛場事業に1291.71円を要しました。負債は1407.66円です。

建物は、この機関の需要に対して不十分です。しかし、W・E・ホーイ(William E. Hoy) 牧師が日本に帰国すれば、この困難は疑いなく克服されるでしょう。労働会における彼の非常に情熱的で成功を収めた働きは、学校をさらなる成功と有用性の高い段階へと引き上げることに大きく貢献するはずで

す。地域社会における本院の地位は非常に良好です。前回の卒業式では、宮城県知事が高く評価する祝辞を述べました。当然ながら、本院は東北のキリスト教徒の間で高い支持を得ています。卒業前に学校を去る者たちのほとんどでさえ、学校と教師たちを愛情を持って記憶し、その影響を携えていくため、徐々に、しかし確実に、本院はこの地方の生活の一部となりつつあります。

昨年カリキュラムを変更し、1つのクラスが解消されたため、今年は普通科の卒業クラスはありません。300ドル以上を投じて図書室への貴重な追加購入が行われ、136ドルの新しい科学器具が確保されました。煉瓦造りの建物の木部が塗り直され、すべての財産が良好な状態で維持されました。また、ここ1、2年で頻発している地震に備え、煉瓦造りの建物を補強する契約が結ばれようとしています。

結論として、この1年間の神の臨在と慈しみに対し、感謝の意を表したいと思います。真に何が成し遂げられたのかは、神おひとりが知っておられ、神おひとりが称賛を受けるにふさわしい方です。神なしには、我々は何一つ成し得ませんでした。本院は、東洋のこのますます興味深く重要な国家において、キリストの王国を前進させるために神によって任命された手段の一つであると固く信じており、それゆえ、日本におけるキリストの業のすべての友人たちに、継続的な信頼と支援を仰ぐものです。

謹んで提出いたします。

理事局長代行 デイヴィッド・B・シュネーダー  
仙台、1896年6月6日

### 3.2.3. 分析

1896年の「年次報告」では、東北学院が昨年度から大きく発展していく要素が記されている。学内では、押川のカリスマ性と学生・生徒への感化力が強調されている。教員の質も向上しており、社会的にも評価されつつあったことが分かる。しかし、その結果として、優秀な教員の官立学校への引き抜きという課題が生じている。その一方で、建学の精神を理解し、東北学院を献身的に支えようとする教員の奮闘も描かれている。

学外的には、地域社会、つまり東北地方での社会的認知度が向上していることが窺われる。卒業式に宮城県知事が祝辞を述べるなど、私立学校として東北学院が確固たる地位を確立しつつある状況が記されている。それは、特に卒業生、あるいは卒業することはなかったが、本院に対して一貫して好意的な感情を持ち続けた元学生たちの働きによることも大きかったと推測される。興味深いのは、聖書教育が、当初は選択制であり、必修とはみなされていなかったということである。しかし、実質的にはほとんどの学生が受講したことも付記されており、その影響力は大きかったといえるだろう。

またこれまでと同様に、労働会についての記述が目立つ。活発な働きと拡大の一方で、負債額の増大など、将来における不安要因が示唆されているのは興味深い点である。しかし労働会に所属する学生・生徒たちは、貧しくとも情熱的に教育と奉仕に励む様子が記されており、労働会が本院の初期の学生教育に大きな役割を果たしていたことは確かである。

### 4. 結論

本論では1895年、1896年の「年次報告」の紹介と分析を中心に行った。紙数の関係で、一度に大量の史料を紹介することができないのがもどかしいが、同史料を通して、本院草創期の様子を一年単位で継続して俯瞰することができるのは、重要な点であると考えられる。将来への展望を見据えつつも、試行錯誤を繰り返しながら、本院の基礎が確立されていく様子を知ることができるのは、大変興味深いことである。今後も、「年次報告」の研究は継続していく必要があると考えられる。

藤野 雄大プロフィール

FUJINO, Yudai

1983年東京都生まれ。2018年アメリカ合衆国 Calvin Theological Seminary (Th.M) 修了。2019年東京神学大学大学院博士課程後期課程単位取得済み退学。2020年東北学院文学部総合人文学科着任。

## 【文末付録】

## 「年次報告」一覧表（著者作成・改訂版）

番号	資料名	年月日	執筆者	書式	状態	Messengerへの掲載	その他
1	Report of Training School	1889年4月4日	ホーイ・シュネーダー	手書き	印刷不鮮明	見当たらず*他の日付の報告はあり	
2	Report of Training School, Sendai, Japan	1892年日付なし	ホーイ	手書き		1892年8月4日*1部割愛	
3	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1893年日付なし	ホーイ	原本写し欠け	Messenger記事から補う	1893年7月27日	
4	Report of the Tohoku Gakuin	1894年6月6日	ホーイ	手書き	印刷不鮮明	1894年11月15日	
5	Report of the Tohoku Gakuin for the year ending May 31.1895	1895年5月31日	シュネーダー	手書き		見当たらず	
6	Report of the Tohoku Gakuin	1896年6月6日	シュネーダー	タイプ		見当たらず	
7	Report of Tohoku Gakuin	1897年6月	ホーイ	手書き		未調査	
8	タイトルなし*史料6に付随か?	1897年日付なし	シュネーダー	手書き		未調査	
9	Tohoku Gakuin Report for 1897-98	1898年日付なし	ホーイ	手書き		未調査	
10	タイトルなし	1899年6月21日	ホーイ	手書き		未調査	
11	Report of the Tohoku Gakuin	1900年7月3日	シュネーダー	手書き		1900年11月8日	
12	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1901年日付なし	シュネーダー	手書き		1901年9月26日	
13	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1902年日付なし	シュネーダー	手書き		1902年10月2日	
14	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1903年6月	シュネーダー	手書き		1903年8月13日	
15	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1904年日付なし	シュネーダー	手書き		見当たらず	
16	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1905年日付なし	記名なし	手書き・記事添付		1905年11月30日	
17	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1906年日付なし	シュネーダー	手書き・記事添付		1906年12月13日	
18	Annual Report of North Japan College	1907年11月1日	シュネーダー	原本写し欠け		未調査	2025年調査で発見
19	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1908年6月20日	シュネーダー	手書き・記事添付		1908年9月30日	
20	Annual Report of North Japan College	1909年6月19日	シュネーダー	原本写し欠け		未調査	2025年調査で発見
21	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1910年6月	シュネーダー	タイプ		未調査	
22	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1911年6月	シュネーダー	タイプ		未調査	
23	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1912年6月	シュネーダー	タイプ		未調査	
24	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1913年日付なし	シュネーダー	タイプ		未調査	
25	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1914年5月	シュネーダー	手書き・タイプ		未調査	
26	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1915年6月10日	出村悌三郎	手書き		未調査	
27	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1916年5月14日	出村悌三郎	手書き		未調査	
28	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1917年日付なし	シュネーダー	タイプ		未調査	
29	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1918年日付なし	シュネーダー	タイプ		未調査	
30	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1919年5月	シュネーダー	タイプ		未調査	
31	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1920年5月26日	出村悌三郎	タイプ		未調査	
32	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1921年日付なし	シュネーダー	タイプ		未調査	
33	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1922年4月26日?	シュネーダー	タイプ		未調査	
34	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1923年日付なし	シュネーダー	タイプ	印刷不鮮明	未調査	
35	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1924年5月5日	出村悌三郎	タイプ	印刷不鮮明	未調査	
36	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1925年日付なし	シュネーダー	タイプ		未調査	
37	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1926年日付なし	シュネーダー	タイプ		未調査	
38	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1927年日付なし	シュネーダー	タイプ		未調査	
39	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1928年日付なし	シュネーダー	タイプ	印刷不鮮明	未調査	
40	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1929年4月	シュネーダー	タイプ		未調査	
41	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1930年日付なし	シュネーダー	タイプ		未調査	
42	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1931年日付なし	シュネーダー	タイプ	印刷不鮮明	未調査	
43	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1932年9月	シュネーダー	タイプ		未調査	
44	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1933年5月	シュネーダー	タイプ		未調査	
45	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1934年5月23日	シュネーダー	タイプ		見当たらず	
46	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1935年日付なし	シュネーダー	タイプ		未調査	
47	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1936年日付なし	出村悌三郎のものを翻訳	タイプ		未調査	
48		1937年?		原本写し欠け		未調査	
49	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1938年4月13日	出村悌三郎	タイプ		未調査	
50	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1939年日付なし	出村悌三郎	タイプ		見当たらず	
51	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1940年日付なし	出村悌三郎	タイプ		見当たらず	
52	Report of North Japan College	1941年9月30日	ゾーグ	タイプ		未調査	2025年調査で発見

# 東北学院大学研究ブランディング事業及び 東北学院宗教センター刊行『水曜通信』への寄稿文

東北学院史資料センター客員研究員

日野 哲

以下は日野哲東北学院史資料センター客員研究員による執筆で、東北学院大学研究ブランディング事業及び東北学院宗教センター刊行の『水曜通信』に2018年10月～2022年8月にわたり連載された寄稿文である。

東北学院に関わる重要な内容を多く含み、広く読まれるべきものとして本誌に再掲載することとした。

(東北学院史資料センター)

## ランカスターでの資料調査

アメリカ東部ペンシルヴェニア州にあるランカスター神学校には、創立以来本院を支え続けたドイツ系移民を中心に形成された旧ドイツ改革派教会の貴重な史料が整理・保存されています<sup>1</sup>。筆者はこれまで4回(2018年、2019年、2023年、2025年)、それぞれ短期間ではありましたが、同神学校の図書館2階にある史料保存室(Archives)で調査を行いました。2023年までの調査報告と史料紹介については、本年報に以下のとおり掲載されています。

Vol. 5 (2020年)「ランカスター神学校での調査報告」

Vol. 6 (2021年)「Our Trip to Japan and China (1)  
ーランカスターの所蔵フィルムから見たもの」

Vol. 7 (2022年)「ランカスターに保存されていた  
日本関係フィルム」

Vol. 8 (2023年)「Our Trip to Japan and China (2)  
ー外国伝道局からの来訪者」

Vol. 9 (2024年)「押川方義の『高橋伝五郎伝』(英文)  
ーイーデン神学校での資料調査から」

Vol.10 (2025年)「Our Trip to Japan and China (3)  
ー外国伝道局からの来訪者 (2)」

4回目となった昨年(2025年)8月の調査は、本学文学部の藤野雄大氏と共に行いましたが、国際交流部から依頼があった同じペンシルヴェニア州の二つの協定校(アーサイナス大学とモラヴィア大学)との交流について、本学の太西晴樹学長の親書を携えて訪問するという役目もありましたので、資料調査にのみ時間を費やすことはできませんでした。

私たちは自分の関心分野を中心に精力的に調査を行い、成果を得ることができましたが、一番の成果は従来から話題になっていたランカスター神学校内の資料を他に移すという計画についての最新の情報を得ることができたことです。私たちは資料保存室を管理運営するERLAのPresident & CEOであるスコット・マイヤー・クーカン氏(Scott Meyer-Kukan)とお会いして、ERLAの理事会がイーデン神学校とランカスター神学校に保存されている二つの資料も統合して、ウェストバージニア州のルイスバーグ(Lewisburg)に移転することを決定したというニュースを聞きました。その後の報告では、2025年12月に移転先の二階建ての建物を購入し、今後数か月かけて移転の準備を進めるということです。

クーカン氏は今後も東北学院が資料調査で訪れる際には従来と同様の便宜を図ることを約束してくれ

<sup>1</sup>「ドイツ改革派教会」の正式名称は「合衆国改革派教会」(Reformed Church in the United States)であるが、1934年に同じドイツ系移民を母体とする北米福音教会(Evangelical Synod of North America)と合同して「福音・改革派教会」(Evangelical & Reformed Church)を形成した。さらに戦後の1957年に会衆派キリスト教会(Congregational Christian Churches)とも教派合同し、現在は「合同キリスト教会」(United Church of Christ)となっている。

ランカスター神学校とセントルイス市のイーデン神学校にある二つの史料保存室の管理運営は、ERHS(Evangelical & Reformed Historical Society)の理事会が運営しており、2025年1月に名称をERLA(E&R Library & Archives)に変更している。改革派(Reformed)の資料はランカスター神学校に、福音派(Evangelical)の資料はイーデン神学校に主に保存されている。

ていますが、訪れる先はランカスターではなくなります。かつて筆者はArchivesからの求めに応じてERLA（当時はERHS）のニュースレター（January, 2020）に「The Archives where I can be a “Treasure Hunter”」という一文を寄稿したことがあります。移転せざるを得ない事情は理解しながらも、“大切な宝物（Treasure）”が持ち去られるような複雑な気持ちが今も続いています。ホーイとシュネーダーの創立者や後で紹介する金子謹三などが学び、日本への思いを募らせたランカスター神学校は筆者にとって特別な場所でした。私の“ランカスター”での資料調査はこれで終わりです。

### 「ランカスター神学校での発見」について

2018年と2019年の調査で“発見”した新たな史料を紹介しました。字数の制限や速報性が求められ、その史料の検証も行わないまま自分の思い込みで説明を加えてしまったことから、その後間違いであったことが判明したものもあります。

(13)の「記録フィルム—創立50周年当時の運動会」は、その後の調査で別の時期に撮影されたものであることがわかりました（上記「年報」のVol.6とVol.7に解説を記載）。またその文中に触れた創立50周年の「記念式典などを撮影した貴重なフィルムが他にも保存されている可能性」についてはその後発見され、他のフィルムと同様にデジタル化されて史資料センターに保存されています（「年報」Vol.7に内容を紹介）。

なお、(7)「ランカスター神学校の食堂のスタンダグラス」は、故鐸木道剛氏が書かれたものです。

### “FAITHFUL UNTO DEATH”について

個人的にも調査を行い、いずれは訪れてみたいと思っていた金子謹三の墓石の前に立つことができたのは2018年の最初の調査の時でした。花巻出身の金子青年はランカスターでホーイやシュネーダーと出会い、東北学院からの招きを受けて教壇に立つ備えをしていた矢先に29歳の若さで病死しました。しかし彼の「英雄的」な死はドイツ改革派教会内に大きな感動を巻き起こし、捧げられた多額の「金子記念基金」はシュネーダーが中学部の東二番丁の校地、さらに専門部の南六軒丁の校地を取得する際に用いられました。またホーイの提案により労働会に設立された「金子記念印刷所」は、東北伝道に大きな貢献をすることになりました。金子の小さな墓石は、ランカスター神学校と東北学院とを結ぶ目に見える“架け橋”として今もあの場所に置かれています。

### 「東北学院の草創期」について

東北学院の「創立の事情」については『東北学院百年史』に詳細に記録されていますが、その要旨を“5W1H”の原則に則り、「だれが」「いつ」「どこで」「なぜ」「なにを」「どのように」に分けて簡潔に記述しました。続いて「最初の学生」7名を一人ずつ紹介しましたが、最後の(17)の写真にはこれらの7名の学生全員が写っています。この写真は創立百周年当時から何度も目にしていたものですが、7名の顔が特定されたことからあらためて見直した結果、“発見”したものです。一つの資料を解析すると他の資料の解析にも繋がることの好例と言えます。これらの簡潔な記述に興味を持たれた方が『百年史』本体をお読みくださるなら、当時この編纂に関わった一人として望外の喜びです。

## ーランカスター神学校での発見（1）ー

### 「ホーイの住宅」



最初にご紹介する資料は、「Home of W.E.Hoy」と説明書きがある写真です。ホーイは、健康上の問題から、1886年1月の仙台着任早々から何度か転居しています。初めに住んだのは、大橋のたもとの上仲ノ町63番地の二階建ての日本家屋でしたが、11月には南町通16番地に転居し、さらに1年後には片平丁に移っています。この写真がどの時点のものかはわかりませんが、写っている人物はホーイ自身と思われます。



ホーイは、自分の健康が快復しないのは日本家屋に住んでいるせいであると考え、婦人宣教師たちと彼自身のために西欧式住居の必要性を外国伝道局に訴えています。伝道局は財政上の困難を抱えながらも、1889年1月に、宮城女学校の校舎、寄宿舎と同時に、同じ東三番丁の敷地に2軒の宣教師館を建築します。下の写真はその中のホーイの宣教師館の立面図です。  
(日野哲)

(2018年10月12日掲載)

## ーランカスター神学校での発見（2）ー

### 「最初の7人の生徒」

東北学院の最初の生徒は「6人」であったということが長く伝えられていますが、実はどの時点で数えるかで人数は異なってきます。ホーイは、1886年7月30日付の手紙で、「5月以来、4人の青年が勉強を始めており…間もなくもう2人が加わる」との報告を外国伝道局に送っています。

初めて氏名が明らかになるのは、翌年7月1日付のホーイの手紙です。そこには「7人の氏名と年齢は次のとおり」として7人の名前が挙げられています。今回収集した「6人と生徒と2人の教師」として知られる写真には、赤字で氏名が書かれて



おり、これまでの調査と一致しますが、その中に含まれない7人目の生徒「橋本宗之進」の写真も入手することができました。7人の生徒については『百年史』に詳細な記述があります。  
(東北学院史資料センター日野哲)

(2018年11月2日掲載)

## —ランカスター神学校での発見（3）—

### 「宣教師との協力伝道」



東北学院神学部の卒業生総数185名のうち実に約70%が、まず東北地方で伝道者としての歩みを始めています。そして彼らの働きに協力するためにアメリカのドイツ改革派教会から派遣された宣教師は1920年代までに100名を超えています。これらの宣教師の活動を記録した多数の文書や写真も整理・保存されています。



上は「ノッスの会津伝道」として知られる写真ですが、徒歩での200マイル巡回伝道中に撮影されたもので、わらじ履きの日本人3名の名前も裏書きされていました。下は今回初めて入手した写真で、100マイル福島巡回伝道中に高田で1925年に撮影されたものです。地下足袋を履く神学部卒業生の田口泰輔(左)や齋藤一(その右隣)、壊れた靴底をひもで結んでいるヌーゼント宣教師、そして下駄の材料をきれいに積み上げたタワーが印象的です。(東北学院史資料センター 日野哲)

(2018年12月7日掲載)

## —ランカスター神学校での発見（4）—

### 「大阪市立聾啞学校と高橋 潔」



シュネーダーを“終生の師”と仰ぐ卒業生の一人に高橋潔という人物がいます。高橋は、東北学院在学中に礼拝を通して讃美歌の美しさに触れ、声楽の勉強のためにフランス留学を志しますが、経済的理由のために断念します。高橋は、「日本で幸せの少ない人のために尽くしなさい」とのシュネーダーの言葉を胸に、一生を音の世界から遮断された人のために捧げようと決意して、大阪

の盲啞学校（後に盲者と聾啞者の学校に分離）の教師になりました。

ランカスターには、高橋が校長在任中の1936(昭和11)年の大阪市立聾啞学校の卒業アルバムが残されており、同年に院長を退任するシュネーダーの「校長高橋と4人の主導的教師は東北学院マン(men)」というサインが誇らしげに書き込まれています。高橋は、東北学院から次々と後輩を教員として採用し、シュネーダーも同校を訪問して励ましています。その一人、大曾根源助はアメリカ視察中にヘレン・ケラーの自宅を訪ねますが、これが縁となり、ヘレン・ケラーは1937年の初来日の際に本学を訪れています。(東北学院史資料センター 日野哲)

(2019年1月9日掲載)

## — ランカスター神学校での発見（5）—

### 「シュネーダーの院長辞任」



今回初めて収集した資料の中に、シュネーダーと出村悌三郎とが室内で談笑している写真があります。裏面には、「この写真は、シュネーダーが1936年3月12日の東北学院理事会で公式に院長を辞任する約一時間前に撮られたものである」との手書きの説明が付されています。



シュネーダーが70歳の年齢を理由に、初めて院長辞任を申し出るのは1927年3月ですが、内外に多くの問題を抱えていた理事会は強く留任を求めました。この直前の3月3日にはホーイが中国から帰米の途次、太平洋上の船中で死去し、翌年の1月10日には押川方義も東京で死去するなど、三校祖はそれぞれ人生の締めくくりの時期を迎えていました。

1934年9月に開かれた理事会は、シュネーダーの辞任をやむを得ないものとして、2年後の創立50周年を機に受け入れることとし、その間、出村悌三郎を院長代理に選任することにしました。1936年5月の創立50周年記念式典ではシュネーダーの退任式と出村悌三郎の院長就任式が執り行われ、シュネーダーは35年に及ぶ重責から解放されることになりました。（東北学院史資料センター 日野哲）

(2019年2月6日掲載)

## — ランカスター神学校での発見（6）—

### 「シュネーダー夫妻と本多光太郎夫妻との交流」



シュネーダー夫妻は、約50年に及ぶ日本滞在の間に多くの仙台市民の信頼を得て、1905（明治38）年に帰米した際には、大統領ルーズベルトに仙台市長および市民から託された日本刀を手渡すなど、緊張関係にあった日米の親善にも大いに貢献しています。

キャンパスを隣接する東北大学とも当時から親しい交流があり、今回収集した資料の中に、シュネーダー夫妻が本多光太郎の私邸にディナーに招かれた時の写真があります。本多は当時東北帝国大学総長でしたが、写真の裏書によれば、「ミセス本多はクリスチャンで、ミセス・シュネーダーの婦人会の中心的なメンバー」であったため、家族ぐるみの交流があったようです。また、「次期院長」として出村悌三郎夫妻も招かれていることから、院長交代を控えたシュネーダーの心遣いも感じられる写真です。

なお、ミセス・シュネーダーのヘルパー布施豊世とミス本多の顔も見えます。

（東北学院史資料センター 日野哲）



(2019年4月1日掲載)

## — ランカスター神学校での発見（7） —

### 「ランカスター神学校の食堂のステンドグラスについて」



2018年8月2日撮影

ランカスター神学校には1932年に建てられた食堂（Refectory）があります。そこには窓が15枚。それぞれの窓のガラス絵には改革派のキリスト教の歴史を示す様々な紋章があります。最後の一枚が宣教の歴史を示す富士山であり、それは昨年12月の訪問記録の際に紹介しました（『水曜通信』第9号）。今回調査のためにランカスター駅に到着したのは昨年8月2日の昼過ぎ。神学校で宿舎に入り、まずは昼食ということで、この食堂に行きました。そこで富士山と並んで、最初の一枚が

眼に止まりました。縦に「光（ΦΩΣ、つまりLight）」、横に「命（ΖΩΗ、つまりLife）」が組み合わせられたものです（左図）。それに「愛（ΑΓΑΠΗ、つまりLove）」があれば、わが学院の「3L」です。食堂のご主人からいただいた説明文には、このデザインは古代エトルスキの貨幣に由来するとあります。わが「3L」は、アメリカのドイツ改革派の月刊誌『ザ・ミッショナリー・ガーディアン』の表紙から取ったと佐々木前院長先生からうかがいましたが、さらに異教古代までさかのぼる可能性がでてきました。ランカスターに到着してまだ2時間。最初の発見でした。（鐸木道剛）

（2019年5月10日掲載）

## — ランカスター神学校での発見（8） —

### 「最初の捧げもの」

仙台神学校の設立当初、押川とホーイが経費問題で悩んでいたころ、香味ちかという未亡人が古銀12枚を携えて押川を訪ねて来ました。彼女は、その数年前に押川が始めた仙台教会で洗礼を受けたばかりでしたが、長年ひそかに貯えた一分銀貨をすべて捧げました。

押川は目に涙を浮かべながら「私たちの祈りは聴かれ始めた」とホーイに報告し、ホーイも自らそのうちの9枚を買い求めました。

一分銀は当時すでに通用しなくなってはいたものの、12枚では50日分の労賃に相当し、決して少なくない金額でした。

ホーイは、この9枚をアメリカの伝道局本部に送り、8枚は関心のある教会員に転売され、1枚はランカスター神学校に長く展示されてきました。その説明文には「香味（カミ）は“Fragrant Taste”（香り高い味わい）、チカは“Nearness”（近い）を意味する」と書かれ、神の祭壇にかぐわしい捧げものを携えて近づく婦人として覚えられています。この一分銀（本物）は、本院の創立100周年の際に返還され、ランカスターには同等の銀貨が本院から寄贈されています。



香味ちかと一分銀



一分銀と財布（現況）

（東北学院史資料センター 日野哲）

（2019年6月4日掲載）

## —ランカスター神学校での発見（9）—

### 「奨学金受給者と支援者の名簿」

今回収集した資料の中に、奨学金の受給者とその支援者を記した小冊子があります。創立当初、ホーイが6名の生徒の一年分の全費用を個人で負担したことは知られていますが、その後もアメリカの諸教会が多くの上学生を支えたことを示す貴重な資料です。



奨学金受給者と支援者の名簿

1892（明治25）年7月12日から始まる約10年に及ぶ詳細な記録には、奨学金の受給者として、東北学院（“Training School”）約40名、宮城学院（“Girl's School”）約50名の上学生の名前が記されています。支援者は主としてペンシルヴェニア州にあるドイツ改革派教会の会員（個人）または教会学校、青年会、婦人会などで、支援する奨学生の写真がいつ送付されたかも記されていることから、教会では送られた写真を礼拝堂の壁に掲げて、その学生の顔を見ながら祈りをもって支援を続けたことが想像できます。

中には、シュネーダーの推薦文が記されている学生や、病気のために途中で学業を断念せざるを得なかった学生などもおり、創立当初の学生一人ひとりを偲ぶことができる資料です。

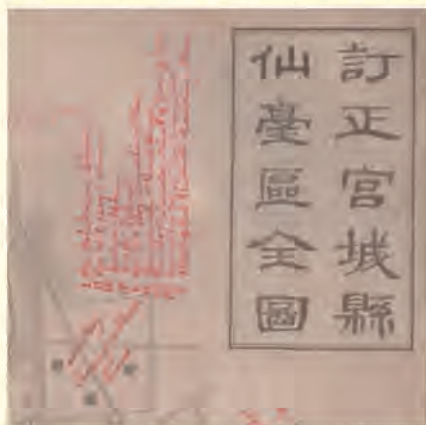
（東北学院史資料センター 日野 哲）

（2019年7月9日掲載）

## —ランカスター神学校での発見（10）—

### 「明治17年の仙台地図」

資料の大きさからカメラで撮影せざるを得なかったものの中に、「訂正宮城縣仙臺區全圖」という一畳ほどの古地図があります。明治十七年四月十四日御届 同年六月廿日出版の地図には、当時の教会や宣教師住宅などの情報が複数の人物（宣教師）によって鮮やかに朱書きされています。



明治17年仙台地図

最初の書き込みは筆跡からホーイの手によるもので、当時のホーイの住居（南町通り）や仙台教会（国分町）などの位置を考慮すると、年代は1886（明治19）年11月から翌年の5月の間と思われます。他にも少なくとも二人（一人はシュネーダーか？）の筆跡が見られ、いずれも1890（明治23）年頃までの記録です。

中には明らかに間違った位置を示しているものもありますが、ホーイや神学生が伝道活動を行った地区や、新島襄を校長として開校した東華学校（1892年廃止）の場所などが特定され、東北学院草創期の貴重な記録が書き込まれています。

（東北学院史資料センター 日野 哲）

（2019年9月2日掲載）

## — ランカスター神学校での発見 (11) —

### 「バーソロミューのアルバム」

ランカスターでの資料調査はこの夏で2回目となりますが、今回はアルバムやスライド、動画フィルムとして保存されている映像資料を中心に調査を行いました。

まずご紹介したいのは、1910（明治43）年に改革派教会伝道局幹事として初めて来日したバーソロミューが撮影した写真を取めたアルバムです。バーソロミューは、創立者押川方義が1889（明治22）年に欧米視察をした際に英文による押川伝 Won by Prayer を執筆したほか、ホーイとシュネーダーにとっては、常に良き理解者として彼らの働きを支え続けた心の友のような存在でした。



ホーイ(右)とシュネーダー(左)と共に



バーソロミューのアルバム

来日当時、ホーイはすでに中国伝道に献身しており、バーソロミューは始めに中国を視察した後、3月下旬に仙台を訪れます。約2ヶ月にわたる視察の内容は、100枚の写真と共に詳細に記録されており、貴重な資料です。なお、中国伝道についても同数の100枚の写真が全く同じ体裁のアルバムに貼付されています。バーソロミューが幹事としてホーイとシュネーダーの働きを同等に評価していたことがうかがえます。

（東北学院史資料センター

日野哲）

（2019年10月9日掲載）

## — ランカスター神学校での発見 (12) —

### 「100年前のカラー・スライド」



仙台教会牧師 吉田亀太郎夫妻



愛宕山からの仙台市内(左手前がデフォレスト館)

今回初めて目にした資料の中に、カラーのスライドがあります。

これまでは書庫の中にある文書類を中心に調査していましたが、“新たな資料”は隣の別の部屋に保存されていました。ここには、未整理のものや新たに寄贈されたものに混じって、スライドやフィルム（16ミリ）が文字通り山と積まれていました。

一千枚以上あると思われる中から、“Japan”や“North Japan College”などの表示がある箱を幾つか選び出して観ると、100年以上前のカラーの「ガラス・スライド」が多数見つかりました。分厚いガラス板に印画されたもので、明らかに手で彩色が施された箇所もあるものの、白黒とは全く異なる実感があります。興奮も冷めやらぬまま、早速30枚を厳選して市内の写真屋に連れて行ってもらい、デジタル化を依頼しました。

これらのスライドは、外国伝道局本部が幻灯機で上映し、教会関係者に支援を呼びかけたり、雑誌に掲載するなどして用いられたものと推測されます。これからのさらなる調査が楽しみです。

（東北学院史資料センター 日野哲）

（2019年11月7日掲載）

## — ランカスター神学校での発見 (13) —

### 「記録フィルム—創立50周年当時の運動会—」



運動会を撮影したフィルム



保存されているフィルム類

“新たな資料”の中に、中学部の校庭で開催された運動会を記録した16ミリフィルムがあります。当時中学部は、仙台市内の東二番丁（現在のウェスティンホテルの位置）にありました。フィルム缶の中には撮影した内容を記録した用紙が2枚封入されており、それから推測すると、1936（昭和11）年の創立50周年当時の運動会ではないかと思われます。「入場行進の先頭は、シュネーダー院長（当時）と外国伝道局財務のラップ、続いてシュネーダー夫人とラップ夫人、そして神学部長のゾーグと出村（1936年の50周年を機にシュネーダーの後任として院長に選任）・・・」と記録されているからです。

当史資料センターには、卒業生で映画製作者の鈴木三郎氏が撮影した創立40周年（1926年）の記念フィルムが残されており、現在4K化と編集が進められています。この創立50周年当時の記録フィルムは、外国伝道局の関係者が撮影したものと思われることから、運動会だけではなく記念式典などを撮影した貴重なフィルムが他にも保存されている可能性があり、約百数十巻は残されているフィルム類をさらに精査する必要があります。

（東北学院史資料センター 日野 哲）

（2019年12月9日掲載）

## — ランカスター神学校での発見 (14) —

### 「元宣教師から寄贈された写真」



タッシュ先生とメンセンディク先生と共に



アルバムを受贈

ランカスターでの資料調査を終えて、ロスアンゼルスに移動した翌日、ポモナ市のボブ・タッシュ先生とクレアモント市のバーバラ・メンセンディク先生をお訪ねしました。お二人とも戦後宣教師として本学に奉職され、現在は高齢者と引退宣教師のためのホームに住んでおられます。

タッシュ先生は、目が不自由になられ、趣味で撮影された数千枚のスライドからご自分で学院関係のものを選び出すことは難しい様子でした。無作為に見せていた中から戦後間もない頃の仙台を写したものを数枚寄贈していただきました。

メンセンディク先生からは、ご主人のウィリアム・メンセンディク先生が最初の任期の1948（昭和23）年から3年間に撮影したと思われる写真を収めたアルバムを寄贈していただきました。戦後仙台に帰任した他の宣教師や当時の教職員との交流の様子が伺えます。

ちなみに、当史資料センターにはグロー先生やメルカート先生など、同じく戦後に東北学院に来任された元宣教師から寄贈されたアルバムも保存されています。

（東北学院史資料センター 日野 哲）

（2020年1月10日掲載）

## — ランカスター神学校での発見 (15) —

### 「卒業生3人が牧師として仕えた日系人教会」

ロスアンゼルスを発つ前日、“新たな発見”がありました。昨年調査の帰途も郊外のパサディナ市の友人宅に滞在したことから、「戦前に父が牧師をしていたパサディナの日系人教会を探してほしい」という依頼が出村彰名誉教授からあり、友人に関係資料を送っていました。

出村氏のご尊父は、戦後第4代院長をされた出村剛氏（1907年専門部文科卒）ですが、一時期（1915-1917年）パサディナで牧師をされていました。調べてみるとこの同じ教会に田島堅固氏（1905年普通科卒）と菊地賢治氏（1923年神学部卒）も牧師として着任していることがわかりました。

当初は市内中心部にあったこの教会は、戦時中の日系人の強制収容などもあって、何度も移転を繰り返しており、友人も苦労したようでしたが、ついに郊外のアルタデナに見つけることができました。会堂の入り口には、60周年を記念して作製された創立時の会員名を刻んだ銘板が掲げられており、これが文献と一致したことが決め手となりました。

戦前の『東北学院時報』には、海外で活躍する同窓生の記事がよく掲載されていますが、これらの同窓生の動向を調査することも今後の課題と思われます。（東北学院史資料センター日野哲）



アルタデナ第一長老教会



会堂入口のプレート



友人ビル・ショー氏と共に

(2020年2月6日掲載)

## “FAITHFUL UNTO DEATH” (1)

### 「金子謹三の墓」



ランカスターでの資料調査に合わせて、以前から訪れてみたい墓地がありました。19歳で渡米し、約10年もの間、今日で言えば高校、大学、大学院と、アメリカの正規の課程を修了しながら客死した金子謹三の墓です。私たちが捜し歩いて、ついに対面することができた日曜日の夕方、ランカスター公共墓地に佇む小さな墓石は夕日に輝いていました。



現地ではほとんど忘れ去られた存在であるランカスター神学校の日本人卒業生、金子と東北学院との不思議なつながりをリッチ学長にお話ししたところ、私たちがランカスターを発つ前日の夕方に、この墓前で記念の礼拝を捧げていただきました。

金子謹三は、東北学院の卒業生でもなければ教員でも職員でもありません。墓石にはただ一行“FAITHFUL UNTO DEATH”（死に至るまで忠信）と刻まれています。この金子は「彼は死んだが、信仰によって今もなお語っている」（ヘブル11：4）存在として、その後、東北学院に多大な貢献をすることになるのです。（続く）

（東北学院史資料センター 日野哲）

（2018年12月7日掲載）

## “FAITHFUL UNTO DEATH” (2)

### 「金子謹三とホーイとの出会い」

金子謹三は、幕末の1865年に岩手県花巻市（当時は里川口村）に金子家の五男として生まれました。18歳で兄たちと同じ慶応義塾に入社しますが、その後、大蔵省勤務の長兄弥平がニューヨークに赴任するにあたって一緒に渡米し、フランクリン・



金子兄弟(右から二人目が謹三)



若き日のホーイ

アンド・マーシャル大学（以下、「F & M大学」と表記）付属のアカデミーに入学します。そこで謹三が出会ったのは、F & M大学を卒業し、隣接するランカスター神学校の最上級に在学中のホーイでした。ホーイはすでに日本伝道を志しており、新来の日本人青年に特別な関心をもったとしても不思議ではありません。ホーイは謹三のために英語聖書の講義を行い、語学と信仰の両方の手引きを

行いました。謹三はホーイの期待どおりに翌年（1885年）の4月には信仰を告白してクリスチャンとなります。金子謹三は、ホーイが最初に信仰に導いた日本人となったのです。（続く）

（東北学院史資料センター 日野哲）

（2019年1月9日掲載）

## “FAITHFUL UNTO DEATH” (3)

### 「金子謹三とシュネーダーとの出会い」

金子謹三がクリスチャンとなった1885年の秋も深まったころ、ホーイはランカスター神学校出身者では最初の外国宣教師として日本に向けて出発するのに先立って、2年先に同神学校を卒業したシュネーダーを訪ねました。シュネーダーも日本伝道を志していましたが、その時はランカスター近郊のマリエッタで牧師をしていました。



牧師時代のシュネーダー



学生時代の金子謹三

ホーイとシュネーダーは、日本での再会を約束して別れますが、ホーイはこの時に二人の日本人留学生を伴っていました。その一人がジョージ・キンゾー・カネコと呼ばれていた金子謹三でした。金子は、シュネーダーが初めて出会った日本人となったのです。

1887年にアカデミーを修了した金子はF & M大学の本科に進学し、さらに1891年にはランカスター神学校に進んで伝道者への道を歩み始めました。一方、仙台では同じ1891年に仙台神学校は「東北学院」と改称され、ホーイやシュネーダーは金子を神学部の旧約学教授として選任することに決定していました。(続く) (東北学院史資料センター 日野哲)

(2019年2月6日掲載)

## “FAITHFUL UNTO DEATH” (4)

### 「金子謹三 — 仙台への招き —」

..... The Reformed Church Messenger .....  
907 Arch Street Philadelphia, Pa.

THURSDAY, MAY 9, 1885.

We desire to be informed of the serious illness of Mr. George Kinzo Kaneko, a young man who is well known throughout the Church. He is a native of Japan who has for more than seven years pursued his studies in our institutions at Lancaster. One year ago he completed his course in the Theological Seminary, but was induced to remain a year longer for the purpose of devoting himself to special studies. It is understood that important work awaits him in the institutions at Sendai, and he has accordingly proposed to return in a few weeks to his native land where his services are so urgently needed. He is a thorough scholar, a devout Christian, and possesses qualities which have endeared him to his teachers and associates. He has the prayers of the Church for his speedy recovery.

金子の重病を知らせる記事

東北学院の神学部では、カリキュラムは完備したものの、聖書、ことに旧約聖書関連の科目を担当する専任教員が欠けていただけに、金子謹三の着任は願ってもないものでした。金子にしても、仙台は故郷花巻にも近く、いわば錦を飾っての帰郷となるはずでした。

1894年にランカスター神学校を卒業した金子は、東北学院で担当することになる旧約学をいっそう深めるために、とくにガスト教授のもとでヘブル語を中心とする特別研究をさらに一年間続けることにしました。翌1895年5月、11年に及ぶアメリカ留学を終え、金子は蔵書をはじめ身の回りの物を仙台に宛てて発送も済ませて、出発を待つばかりでした。

しかし、一年ほど前から金子の健康を蝕んでいた肺の疾患が急速に悪化し始めていました。5月9日のドイツ改革派教会機関紙『メッセンジャー』は、金子が重病であることを報道し、「教会全体が彼の速やかな快復を祈っている」と記しています。(続く) (東北学院史資料センター 日野哲)

(2019年4月1日掲載)

## “FAITHFUL UNTO DEATH” (5)

### 「金子謹三の急逝」



神学生の金子謹三

入院先のセント・ジョセフ病院には、金子の重体を知った教授や友人たちが駆けつけました。金子は、穏やかな微笑みと謝意をもって迎え、恩師のガスト教授に「アメリカに埋葬されたい」との希望を伝えました。1895年5月15日早朝、金子は29歳の若さで天父のもとに召されました。

5月17日、ランカスター神学校の礼拝堂で行われた葬儀では、F&M大学と神学校を通じて金子を慈しみ育てた恩師のアップル教授と、賜暇帰国中のホーイが弔辞を述べました。アップルは、10年を越える金子の勤勉と労苦はいったい何のためだったのだろうかと問いながらも、彼が祖国の伝道に懸けた夢と祈りはけっして虚しくは終わらないだろうと結びました。

果たして、異郷の地での金子謹三の「英雄的」な死は、ドイツ改革派教会全体に大きな感動を巻き起こし、間もなく開かれた年次総会では金子の名を付した「金子記念基金」を募る動議が採択され、募金が始まりました。(続く)

(東北学院史資料センター 日野哲)



ランカスター神学校礼拝堂

(2019年5月10日掲載)

## “FAITHFUL UNTO DEATH” (6)

### 「金子謹三の貢献—金子記念印刷所—」

「金子記念基金」への反応は目覚ましく、ついには外国伝道局の一年間の予算総額に匹敵する二万五千ドルもの巨額に達しました。『メッセンジャー』(1895年9月5日)は、東北学院理事局が6月25日の会合で、金子を支えてきたアメリカの同信の兄弟たちに公式に感謝の意を表し、金子の記憶が同国人の間に長く保持されるように基金を用いることを確約したと報じています。

この基金は、ホーイが提案した「金子記念印刷所」の設立の時に初めて用いられました。当時、東北学院には働きながら学ぶ学生のための労働会という組織があり、市内の東八番丁に開設された印刷所では1898年12月から日本語による印刷を開始し、翌年1月からは英文印刷も始められました。

金子記念印刷所は、東京より北では最も優れた印刷所として評価され、多くのキリスト教伝道文書が印刷・発行されて、特に東北伝道に大きな貢献をすることになりました。(続く)

(東北学院史資料センター 日野哲)



金子記念印刷所

(2019年6月4日掲載)

## “FAITHFUL UNTO DEATH” (7)

### 「金子謹三の貢献—校地の取得—」

金子記念基金は、押川とホーイが相次いで東北学院を去った後に全責任を委ねられたシュネーダーが、その存立と発展に必要であった校地の取得のためにも用いられました。シュネーダーが院長に就任した1901年の時点で東北学院が所有していた施設は、南町通りの神学部校舎と隣接する寄宿舍だけで、ここに130名以上の生徒を収容していたこと自体が驚きでした。

シュネーダーは、既に1900年8月には東二番丁に手頃な土地が売りに出ており、金子記念基金を用いることを外国伝道局に提案し、翌年2月8日付の手紙ではこの土地の



見取り図も添えて決断を迫っていました。シュネーダーは、これを校地として取得して普通科（後、中学部）を移転し、さらに1916年には南六軒丁にも校地を取得して専門部を移転させています。



中学部と専門部の校舎建築に際して、シュネーダー夫妻がたびたび帰米して募金活動を行ったことはよく知られていますが、その校地取得に際して金子記念基金が用いられたことはあまり知られていません。（続く）

シュネーダー手書きの地図 1901年 院長シュネーダー（東北学院史資料センター 日野 哲）

(2019年7月9日掲載)

## “FAITHFUL UNTO DEATH” (完)

### 「金子謹三 — 歴史の架け橋として —」

8月8日の夕方、ランカスター神学校のリッチ学長をはじめ4名の神学部関係の方々と私たちは、ランカスター公共墓地の金子謹三の墓前に集まりました。司式を行った学部長のメロット教授が、金子の人生と彼を支えたアップル教授やホーイ等の存在を神の“贈り物”(gift)として感謝し、「この関係と絆が今後も永く続くよう我らを祝福し給え」と祈りを捧げた後、献花を行いました。

金子の小さな墓は、その3年後に亡くなった恩師アップル教授の大きな墓石の傍らに、寄り添うように残されています。そして、その背後には、金子の死の翌年の1896年に花巻の両親が記念として送った一本の銀杏が、巨木に成長して包み込むように見守っています。

ランカスター墓地にある金子謹三の墓石は、新たに協定を結んだランカスター神学校と



アップルの墓と金子の墓



墓地での記念礼拝

東北学院とをつなぐ印であるだけでなく、キリストを信じて、死んでもなお生きるキリスト者の証しとして、これからもあの地に置かれています。

(東北学院史資料センター 日野 哲)

(2019年9月2日掲載)

## 東北学院の草創期 (1) 「創立の事情」



最初の生徒と教師(1886年)

我が東北学院の「創立の事情」については、30年前に発刊された『東北学院百年史』に詳しく書かれていますが、約1300ページで7センチもの厚さのある書物に目を通すことは容易ではありません。

そこで、東北学院がささやかな誕生を迎えた頃に帰って、「だれが」、「いつ」、「どこで」、「なにを」、「どうして」、「どのように」という書き方に従って、これから数回にわたって記してみたいと思います。

創立25周年を迎えた1911(明治44)年7月発行の『東北文學』記念特別号には、次のように書かれています。「明治十九年六月を以て開校せられたる我が仙臺神學校は、一小塾の如きものにして、教ふるものは僅かに押川、ホーイの兩先生に過ぎず、學課の如きも只聖書講義と時々精神講話のみにして、今日の如く授業時間に一定の制度なく、午後は大抵力を角して心身を練り、元氣旺盛當たるべからざるものありき。」

まさに創立当初の自由奔放な生き活きとした雰囲気を感じられます。(東北学院史資料センター 日野 哲)

(2020年10月9日掲載)

## 東北学院の草創期 (2) 「だれが?①」



押川方義



W.E.ホーイ

創立に関わる「だれが」という問いについては、創立したのは誰かと、最初にいた生徒は誰かとの二つに分けてみたいと思います。

まず、創立したのは誰か。前号の『東北文學』の記述のとおり「押川、ホーイの兩先生」です。

押川方義は、幕末に四国松山藩士の子として生まれ、明治維新後に洋学(英学)を学ぶために上京した時にキリスト教信仰へと導かれ、横浜で洗礼を受けました。当時日本はまだキリスト教禁令下にありましたが、押川は「キリストによる日本の救い」を志に抱き、新潟を経て仙台を伝道の拠点として、東北各地、北海道にまで活発な活動を開始しました。

ウィリアム・E・ホーイは、押川の8つ年下で、アメリカ東部ペンシルヴェニア州の農家に生まれ、伝道者を志してランカスター神学校を卒業し、外国伝道局の3人目の日本派遣宣教師に選任されました。

1885(明治18)年12月、ホーイは来日して3日後に横浜で押川と出会い、翌年1月早々には仙台に移り、学校設立を模索します。当時、押川は36歳、ホーイは28歳。二人の運命的な出会いとホーイの迅速な意思決定なしに、仙台神学校の創立はあり得ませんでした。

(東北学院史資料センター 日野 哲)

(2020年11月12日掲載)

## 東北学院の草創期 (3) 「だれが? ②」



六人の生徒と教師

最初の生徒は「だれか」について、ホーイは創立1年後(1887年)7月の手紙で7人の名前と年齢を報告しています。生徒の出入りも自由な私塾であったので、従来から言われている「最初の生徒は6人」という時期もあったと思われます。左の写真はそれを裏付けるものですが、名前も判明しており、右から順に次のとおりです(年齢はホーイの報告による)。

安部保次郎(20歳)、田村兼哉(19歳)、西堀幸八(32歳)、松田順平(23歳)、島貫兵太夫(20歳)、早坂千三郎(24歳)

ホーイの手紙には、7人目として橋本宗之進(23歳)の名前も出て来ますが、右の写真はランカスター神学校での資料調査の際に初めて見付かりました。しかし、東北学院の卒業生名簿には、神学部卒業生として島貫(第1回)と田村(第3回)が記録されているだけです。島貫は当時の授業の様子について、次のように回顧しています。

「ホーイ先生のヨハネ伝の講義を押川先生が訳して聞かせる。けれども訳がまずいのか、言うことが六ヶ敷い(むづかしい)のかさっぱりわれわれには理解できなかった。それでがくりがくり居眠りをしてしまう。」

(東北学院史資料センター 日野 哲)



橋本宗之進

(2020年12月4日掲載)

## 東北学院の草創期 (4) 「いつ?」

東北学院が創立記念日を5月15日と定めたのは、1908(明治41)年です。4月30日に開かれた理事会で決議されたことが記録されています。しかし、たびたび引用している『東北文學』(創立25周年記念特別号、1911年)には、「明治十九年六月を以て開校せられたる我が仙臺神学校」と記されており、また『東北学院七十年史』(1959年)は、「春から準備が進められ、実際の授業を開始したのは六月に入ってからであつたといわれている」と記しています。

しかし、創立された1886年4月30日付のホーイの手紙は、「四人の青年たちが神学を学びたいと言っている」ことを伝え、さらに7月30日付の手紙には「五月以来、四人が私のもとで勉強を始めしており、まもなくもう二名が加わる」と明記されています。

**Four young men of considerable education wish to study theology now. They have been Christians for a number of years. If we go into this school they will be ours.**

*Since May four young men have been studying for evangelistic work under Bro. Hoy's directions; two more will soon join the class.*

この新たな資料の発見により、『東北学院百年史』は、「六月創設を語る必要はもはやない」と断言し、理事会が5月を創立記念と決議した時には「創立当時の想憶がまだ生きていたとも考えられる」と付け加えています。むしろ実際の授業は、5月初旬から始まっていたとも考えられます。

(東北学院史資料センター 日野 哲)

4月30日付の手紙は、ドイツ改革派教会の機関誌『メッセンジャー』に掲載されたものです。

(2021年1月12日掲載)

## 東北学院の草創期 (5) 「どこで？」

最初の生徒の一人で岩沼出身の島貫兵太夫は、家族の反対を押し切って、初めて神学校を訪れた時の様子を次のように回想しています。

「仙台に到着して、この度開校するという神学校を尋ねて行って見ると何もない。・・・よく聞いて見ると、木町通りで北六番丁と北七番丁の間だという。そこへ行って見ると、家はあるにはあるが、茅葺の破れ家があるので、それには驚いてしまった。」

創立の場所について、より詳しく記述しているのは『東北学院七十年史』です。「市内木町北六番丁から西へ二軒目（現在、東北大学医学部付属病院の一部、元仙台第二中学校の辺）に一軒の民家を借り、これを教室兼寄宿舎に宛て」と明記されています。掲載した地図は、ランカスター神学校に保存されていた明治十七年発行の「仙台区全図」（部分拡大）です。ホーイ自身の手書きにより「VIII」と赤字で記入され、当時の呼称と思われる“Training School for Evangelists”と説明されています。しかし、一区画南（木町通り・北五番丁角）に印されているのは明らかにホーイの誤りです。

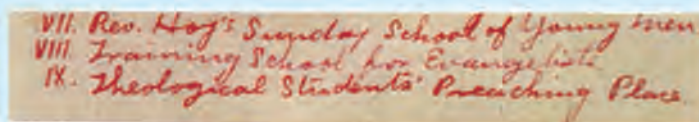
神学校は翌年の1887年5月には東二番丁と南町通り角にあった本願寺仙台別院跡に移転しました。本堂を仙台教会が、西側の僧坊と長屋を神学校が使用しましたが、やがてこの西側の敷地をホーイが自費で購入し、壮麗な校舎が建築されます。仙台神学校はここで1891年に「東北学院」と改称したことから、現在この場所に「東北学院発祥の地」の記念碑が建てられています。



最初の教場



○印が創立の場所  
(木町通北六番丁角)



ホーイ自筆の説明書き

(東北学院史資料センター 日野 哲)

(2021年2月8日掲載)

## 東北学院の草創期 (6) 「なにを？」

創立から一貫して東北学院を支え続けたドイツ改革派教会は、伝統的に教育を重視し、十分な神学的訓練を受けた牧師と教育のある信徒の育成には努力を惜しまない教派でした。ホーイが来日した1885年12月の時点で既に日本に派遣されていたグリーンとモールの両宣教師は、東京と北関東に教会を設立すると共に、日本橋には小さいながらも学校を開設していました。(写真①)

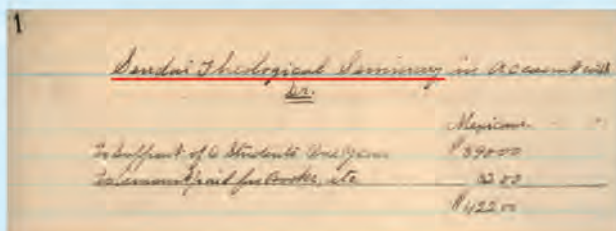
ホーイは来日3日後に押川と出会い、すぐに仙台を視察しました。「仙台は重要な、そして将来性豊かな地方の中心都市」であり、現地の要望は青年男女のための「キリスト教学校」を設立することであると報告します。翌年1月早々に持たれた三人の宣教師による会議では、ホーイの仙台派遣を公式に決議し、7月に女学校設立の使命を帯びて仙台に着任した二人の婦人宣教師を迎えて行われた会議では、日本橋の学校を閉鎖し、本格的に仙台に集中することを決議しました。

この公式な決議に添えて、ホーイは既に5月から自らの判断で伝道者を養成する学校を始めたことを事後報告します。学校の会計簿には、ホーイの筆跡で“Sendai Theological Seminary”（仙台神学校）と書かれています。(写真②)

(東北学院史資料センター 日野 哲)



写真①



(2021年4月8日掲載)

## 東北学院の草創期 (7) 「なぜ？」

東北学院は、なぜ?伝道者を養成する神学校として始められたのか。これには、学校設立をめぐる同志社の新島襄と競合したことが関係しています。

新島は、北日本における伝道の拠点として仙台に教育機関を設置する夢を抱き、旧仙台藩士で当時日本銀行副総裁の地位にあった富田鉄之助の助言を得ながら、仙台市長や宮城県知事らにも強く働きかけていました。他方、押川もすでに仙台を中心に東北・北海道にまで強力な伝道を展開し、男子校設立の願いをもち準備を進めていました。

1886(明治19)年に入ると、新島はデフォレスト、押川はホーイの各宣教師と共に、東京と仙台で精力的な四者会談を重ねますが、県や市の支援を得ている新島が圧倒し、同年秋に新島を校長とする「宮城英学校」(翌年「東華学校」と改称)が創立されました。しかし、当時吹き荒れたナショナリズムの影響を受けてキリスト教色を一掃したことから、宣教師等の総辞職を招き、開校からわずか5年半の明治25年3月で廃校となります。

こうした中、押川とホーイは明治24年には仙台神学校校舎を完成させ、校名を「東北学院」と改称して、一般教育機関を設立します。土樋キャンパスに保存されているデフォレスト館は、このような事情を物語る重要な建物です。(東北学院史資料センター 日野 哲)



仙台神学校校舎(1891年)



デフォレスト館(1887年)

(2021年5月7日掲載)

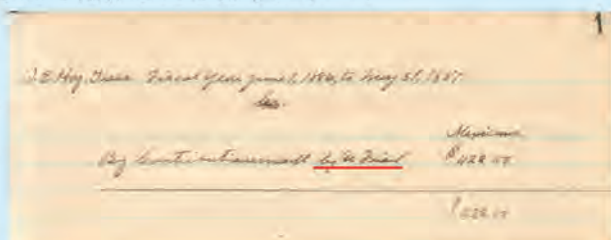
## 東北学院の草創期 (8) 「どのように？」

1886(明治19)年の春、押川は前号で紹介したとおり新島との調整が不調に終わり、ホーイも仙台での学校設立がドイツ改革派教会外国伝道局の賛同を得られず、二人とも困惑していました。

その矢先、一人の寡婦が古銀十二枚を携えて押川を訪ねました。婦人は香味チカといい、押川が創立した仙台教会の会員でしたが、神学校設立の計画を聞き、老後のために蓄えた一分銀十二枚をすべて捧げました。押川は目に涙を浮かべながらホーイに「私たちの祈りは聴かれ始めた」と報告します。ホーイはこの義挙に心を打たれ、そのうちの九枚を自分で買い求めて、これを外国伝道局本部に送り、決断を促しました。さらに自分のもつて伝道者を志している六人の青年の「今後一年間の生活の面倒をすべて自分がみる」と押川に約束しました。

当史資料センターには、ランカスターの資料保存室に永く展示されていたこの九枚のうち一枚の銀貨が返還されて保存されており、ホーイの最初期の会計簿(1886年6月1日～1887年5月31日)の収入欄には、ただ一行「by "A Friend"」として、ホーイがこの約束を誠実に果たしたことが記録されています。

(東北学院史資料センター 日野 哲)



(2021年6月2日掲載)

## 東北学院の草創期 (9) 「最初の学生」

創立当初の学生は、ホーイが一年後の7月に報告した手紙から、以下の7名であることはよく知られています。

松田順平 (23歳)、早坂千三郎 (24歳)、西堀幸八 (32歳)  
橋本宗之進 (23歳)、安部保次郎 (20歳)、田村兼哉 (19歳)  
島貫兵太夫 (20歳)

ホーイが最初の「一年間の生活の面倒をすべて自分がみる」と押川に約束したことは前号で紹介しましたが、その後は外国伝道局をとおしてアメリカの教会や信徒から支援を受けていました。ランカスター神学校の資料保存室には、仙台で撮影された彼らの個人写真が保存されており、裏面には支援した教会や個人の名前が記されています。

彼らは、卒業後5年間は日本基督一致教会という教派において伝道に従事するという誓約のもとで、奨学金を給付されることになっていました。仙台神学校は、東北学院と改称するまではこの一致教会の伝道者養成機関と位置づけられていたからです。しかし、様々な理由から一人二人と離れて行き、最終的に神学部卒業生として記録されているのは田村と島貫の2名だけです。

次号からは『百年史』に記された順に、学生一人ひとりの生涯をたどってみたいと思います。

(東北学院史資料センター 日野 哲)



次号で紹介する西堀幸八



裏面に書かれている教会名

(2021年9月1日掲載)

## 東北学院の草創期 (10) 「最初の学生」

### — ① 西堀幸八 —

西堀は青森県の出身ですが、原籍は北海道余市郡と記されています。28歳で札幌教会にてタムソン宣教師から洗礼を受け、3年後の1886年に仙台神学校に入学します。入学時にはただ一人30歳を超えており、ホーイよりも年長でした。

西堀は10歳以上も年下の同級生と一緒に勉学を重ねるよりは伝道の実践に出ることを願ったのか、1889年には神学校を退学して押川が開拓伝道をした室蘭講義所の伝道師として赴任しました。翌年からは伊達紋別も兼任しましたが、「親戚の迫害甚だしかりしを以て」(『信仰三十年基督者列伝』) わずか2年で釧路に移住し、教籍を聖公会に移しました。

西堀は実業に転じてからも教会員としての責任を忠実に果たし、私立釧路幼稚園を設立して自ら園長として聖書の話をするなど、キリスト者としての生涯を全うして、1927(昭和2)年5月に亡くなりました。

『東北学院時報』は、寄付者の欄に繰り返し西堀の名前を挙げ、中学部校舎の再建(1922年)や専門部校舎の建築(1926年)に際しても、それぞれ数百円という多額の寄付をしたことを報じています。

1988(昭和63)年に弟子屈におられたご遺族を訪問した際には、植村正久や井深棍之助等の署名がある愛用の聖書を寄贈していただきました。釧路の墓石に刻まれた「聖名ヨブ」が心に残っています。

(東北学院史資料センター 日野 哲)



晩年の西堀

(2021年10月8日掲載)

## 東北学院の草創期（11）「最初の学生」

### ② 安部 保次郎

安部の原籍地は押川と同じ伊予松山ですが、どのような事情で仙台に来たのかは不明です。仙台教会の会員名簿には、押川から1886年10月に洗礼を受けて「仙台神学校内に居住」とあることから、受洗後まもなく献身して神学校には多少遅れて入学したものと思われます。しかし彼も「忍耐強く勉学を続けられなくなり、早く実際活動に入りたかった」（ホーイの手紙）のか、1890年の12月には神学校を退学して三重県の鳥羽で伝道活動を開始します。

鳥羽での伝道開始からわずか1年後の1891年、当時日本の未熟なキリスト教世界に入り込み始めていた「宇宙神教」の機関紙『自由基督教』には、安部は「信仰の変動よりして過般宇宙神教々会に加入」と報じられています。宇宙神教は、神の愛を強調し、最後の審判では異教徒や悪魔をさえ含めて、すべての靈魂が救われると説く「万人救済」の立場を取るもので、伝統的な正当信仰とはかけ離れたものでした。同教団の要職に挙げられて大阪で華々しい活動を展開した安部は、1895年に東京の赤坂溜池教会の担当牧師に転じたのを最後に、その年の暮れには辞任し、その後の消息は不詳のままです。

当時日本のプロテスタント教界を二分した「新神学」の影響を、最初期の仙台神学校もその出身者も受けてしまったと言えます。

（東北学院史資料センター 日野 哲）



宇宙神教の教職者たち(安部は前列左端)

(2021年11月2日掲載)

## 東北学院の草創期（12）「最初の学生」

### ③ 松田 順平

松田は会津の出身です。福島で押川と出会い、仙台神学校創立の1886年5月に福島講義所で押川から洗礼を受けました。その年の10月には神学校に入学しますが、2年後の1888年には許可なく神学校を退学して東京に行き、組合教会の講義所を担当して、新島襄と親密な交流を持つようになります。

新島の死後（1890年）も、新潟県長岡の組合教会の講義所で伝道していた松田は、1891年には神学校に再入学を願い出て復学し、仙台教会の長老に選出されます。社会問題への関心が高かった松田は、他の神学生と共に廃娼運動や貧民救済に奔走し、1891年10月の濃尾大地震では震地伝道隊に参加して救済と伝道に挺身しました。そこで孤児救護への関心に触発された松田は、翌年神学校を退学して仙台孤児院を設立します。しかし半年後にはその孤児たちを北海孤児院に預けてしまいます。

常に高い問題意識を持ち行動力に富みながらも、永続性に欠けるという重大な欠陥を持つ松田は、その後伝道者として日本基督教会の伊勢津、鶴岡、名古屋、越谷を転々とし、1910（明治43）年頃からは級友の島貫が始めた移民事業に従事しました。1916年に開かれたシュネーダーの叙勲祝賀会にはわざわざ福岡から駆けつけて、恩師への思慕の念を表したことが『時報』に記録されています。

（東北学院史資料センター 日野 哲）



ランカスターに保存されていた写真(23歳当時)

(2021年12月1日掲載)

## 東北学院の草創期（13）「最初の学生」

### ④ 早坂 千三郎

早坂は古川の出身で、若くして押川の薫陶を受けてキリスト者となり、1885（明治18）年4月の古川教会の創立に際しては、最初の14名の会員の一人となりました。翌年春の神学校開設と共に入学しましたが、「ハヤサカは結婚して二人の子供がいます」（ホーイの手紙）という家庭の事情によるのか、途中で中退します。しかし伝道の志は捨て難く、宣教師ミロルを助けて宮城、岩手両県下の伝道に従事しますが、その間に持ち前の潜在的な愛国的熱情が表面化し、ついには伝道者の職を辞して郷里古川の郡役所に勤務するようになりました。

さらに1892（明治25）年には、「自分自身がキリスト教の誤りに気付いたからには、同国人が同じ過ちに陥るのを黙視することはできない」という主旨の序文を付した書物『通俗非基督教全』を刊行します。その的確な内容は、逆に当時の神学校の教育水準の高さを推察させると言われています。

晩年の早坂は信仰を取り戻し、1937（昭和12）年には数十年ぶりに教会に足を運ぶようになり、自宅を開放して家庭集会を開いたり、教会の財政を助けるなど、母教会の古川教会を支えて、1943年7月にその生涯を終えました。

（東北学院史資料センター 日野 哲）



晩年の早坂千三郎

（2022年1月13日掲載）

## 東北学院の草創期（14）「最初の学生」

### ⑤ 田村 兼哉

田村は、宮城県牡鹿郡湊村に1869（明治2）年12月に生まれました。生い立ちや入信した動機は不明ですが、1886年に7人の学生の中で最年少の18歳で神学校に入学します。ホーイは彼について、「オハイオ州ウィンチェスターの教会から奨学金を受けて在学している」と報告する程度で、それ以外の言及はほとんどないことから、特に目立つ学生ではなかったのかも知れません。1896（明治29）年に第3回生として卒業します。同期生には後に第3代院長となる出村悌三郎も含まれていました。

卒業後は山形県の上山で伝道し、1900年に米沢に転任して翌年結婚した後、1904年から埼玉県に移り、越谷、岩槻、大宮、蓬田などを中心としてモール宣教師のもとで伝道しています。1908（明治41）年に宮城県の白石に移り、大河原をも兼牧していましたが、翌年12月に何らかの事情により宮城中会から解職されました。

しかし田村は、伝道界は去っても母校への愛情を失うことはなく、『東北学院時報』では1916（大正5）年の上山での同窓会に参加して「大宮に在住し日本育児院のために働いて」と記され、1929（昭和4）年にはシュネーダーの帰米を見送る同窓生の一人として紹介されています。

（東北学院史資料センター 日野 哲）



田村兼哉夫妻

（2022年2月9日掲載）

## 東北学院の草創期（15）「最初の学生」

### — ⑥ 橋本 宗之進 —

橋本は、宮城県古川の出身で、神学校の入学以前については不明ですが、1886（明治19）年の入学時の年齢は22歳です。彼もまた早くから神学校を離れて直接伝道に携わり、1889年には古川で伝道を始めます。しかし翌年から東京の組合教会で働くようになり、1894（明治27）年には日本基督教会に復帰して、浪華中会の伊賀上野で伝道します。そして翌年からは当時宮城中会に所属していた北海道の室蘭講義所に転任しました。

その後、橋本は1903（明治36）年北見のクネネツ原野開拓のために設立された宗教共同体「北光社」に迎えられ、翌年北光社講義所を設立し、さらに現在の遠軽町の学田講義所をも兼任します。いずれも神学校の恩師押川が積極的に関わっていた場所で、押川が自ら開拓した伝道拠点に教え子たちを配置したものと思われます。

しかし、早くも1905年には宮城県の白石と大河原に移り、1908年には前回紹介した田村と交代する形でこの地を去り、再び組合教会と関わりを持って石巻の教会（現在の石巻栄光教会）の伝道者となります。その後は日本基督教会に復帰して1913（大正2）年には郷里古川に戻り、自宅を古川教会の新年祈祷会に提供しています。二つの教派を何度も行き来した橋本も、最後は平信徒に戻っていたのかもしれませんが。

（東北学院史資料センター客員研究員 日野 哲）



（2022年5月9日掲載）

## 東北学院の草創期（16）「最初の学生」

### — ⑦ 島 貫 兵太夫 —

最後に紹介する島貫は宮城県岩沼の出身で、神学校入学時は19歳です。彼は小学校卒業後、岩沼小学校の初等訓導をしていましたが、同僚のクリスチャン教員の感化を受けて押川から洗礼を受けました。勤務先で校長を除く教員18名全員をキリスト教に導くほど伝道の情熱に燃えていた島貫は、家族の反対を押し切って神学校に入学します。

島貫は在学中から霊肉救済を唱え、キリスト教会は「靈魂の救済」と「貧民の救済」を併せて行うべきであるとの信念を持って、1892（明治25）年には同志とともに東北救世軍を組織して宮城・山形・福島 of 三県を徒歩で伝道旅行し、その活動は全国の教会に知れ渡りました。

1894（明治27）年に神学部の第1回生として東北学院を卒業した島貫は、東京の日本橋元大工町教会（翌年から神田美土代町に移転し、神田教会と改称）の牧師として伝道しながら、苦学生の救済を目的とした東京労働会を創設します。翌年には渡米視察の経験から、学生の渡米促進や相談に応じる渡米部も設置し、1900年には名称を「日本力行会」と改称して、苦学生支援と日本の海外移民を中心に事業を拡大してゆきました。

島貫は1913（大正2）年に47歳で亡くなりますが、その事業は現在も受け継がれています。

（東北学院史資料センター客員研究員 日野 哲）



（2022年6月7日掲載）

## 東北学院の草創期（17）「最初の学生」 — 終わりに一枚の写真から —

紹介してきた創立当初の学生7名が一堂に会している写真を見つけました。押川の実兄橋本経光ら当時の在學生15人と、ホーイ、吉田、菅田など仙台神学校の関係者5人が前列中央の髭の老人を迎えた記念に撮影したものと推測できます。校長の押川がいないことから、撮影時期は押川が外遊中（1889（明治22）年3月～翌年5月）とも考えられます。

仙台神学校は1888年12月に日本基督一致教会の神学教育機関として位置づけられました。この時期は一致教会（押川等）と組合教会（新島等）との教派合同に関する話し合いが続けられており、1889年3月の「合併委員会」は、「全会一致一名の不同意者なく誠にめでたき会議なりし（『基督教新聞』第296号）」と報告されています。この会議には一致教会を代表して長老格の奥野昌綱も出席していますが、上の「髭の老人」と酷似しており、奥野がこの会議の成果報告を兼ねて加盟したばかりの仙台神学校を訪問したと想像すると、この写真は特別の意味を持ってきます。

地域や教派をさえ越えて日本国中を駆け回った草創期の学生たちから、未熟ながらも自分の志に従って生きようとした明治の若者のエネルギーを感じます。  
(東北学院史資料センター客員研究員 日野 哲)



(2022年7月7日掲載)

日野 哲プロフィール

HINO, Satoshi

1949年生まれ。東北学院大学文学部英文学科卒業。1972年東北学院勤務。大学総務部長をもって2015年3月定年退職。同年4月から東北学院史資料センター調査研究員、2022年4月から同客員研究員。

# 仙台市戦災復興記念館「戦後80年 戦災復興展」 企画展「配属将校と学校教練—東北学院の苦悩—」開催報告

会 期：2025(令和7)年7月5日(土)～13日(日)

会 場：仙台市戦災復興記念館 地下展示ホール

東北学院史資料センターでは、2025年7月5日から13日にかけて仙台市戦災復興記念館が主催した「戦後80年 戦災復興展」に参加し、企画展「配属将校と学校教練—東北学院の苦悩—」を開催した。2021年に続き4年ぶりの出展となった本年は、戦後80年であると同時に、学校教練を指導させるため陸軍将校を全国の学校に配属した配属将校制度が開始されてから100年でもあることから、東北学院での

配属将校の受け入れ、実際の学校教練の様子、配属将校が本院に与えた影響などについて、当センター所蔵資料を中心に紹介した。なお、本企画展の制作にあたっては、当センターのピアサポート制度である「アーカイブズ・サポーター」の学生2名にも協力いただいた。

本展示会は、次のとおり四つの章にかけてパネル展示などを実施した。



会場全景



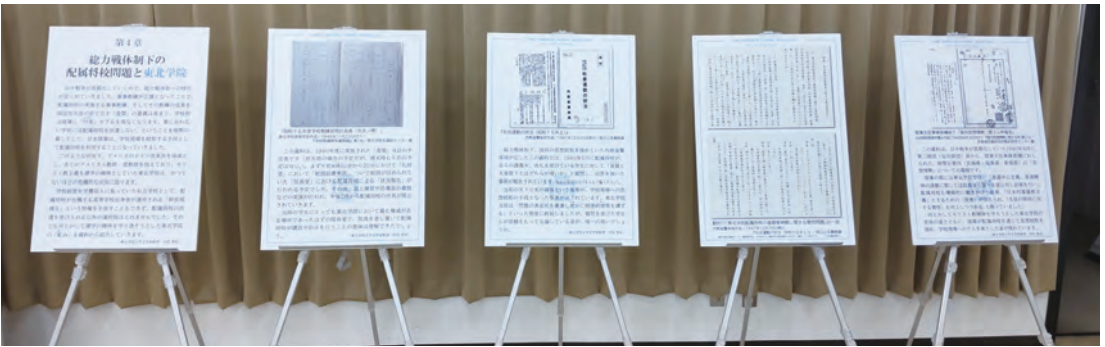
ごあいさつ・第1章



第2章



第3章



第4章



原物資料 (左は『学校教練関係書類』)

- 第1章 配属将校の受け入れと東北学院
- 第2章 配属将校制度の運用と東北学院
- 第3章 東北学院卒業生 鈴木義男の「軍教批判」
- 第4章 総力戦体制下の配属将校問題と東北学院

第1章では第一次世界大戦後の軍備縮小といった社会情勢のなか私立学校である東北学院が配属将校を受け入れた背景について、第2章では配属将校制度の学生・生徒にとってのメリットや学校と陸軍双方にとっての運用リスクについて、第3章では普通教育に軍事的要素を取り入れることを批判した鈴木が最終的に帝国大学教授の職を追われるに至ったことについて、第4章では配属将校制度によって学校を統制しようとする陸軍と何とか建学の精神を守ろうとする東北学院とのせめぎ合いについて、それぞれ紹介した。

あわせて、当時の配属将校の姿も映った記念映画「東北学院の40年」を上映するとともに、『学校教練

関係書類』の原本や同窓生のご遺族から寄贈いただいた軍服などの貴重な原物資料も初めて展示することとなった。

前回までと比べて約1週間という短い会期ではあったが、戦後80年という節目の年もあって多くの来場者にお越しいただいた。

また、本展示会に関連して、2025年8月9日午後3時55分から午後4時25分までの間にミヤギテレビ「終戦80年 報道特別番組「諸君はすべて兵だ～東北学院と陸軍との極秘文書発見～」が放映された。当センターは資料提供と取材に全面協力するとともに、同番組には、戦時中に現在の東北学院大学土樋キャンパス内で幼少期を過ごされた志子田光雄本学名誉教授、「極秘文書」(『学校教練関係書類』)の解説者として河西晃祐東北学院史資料センター所長、そして展示制作に協力したアーカイブズ・サポーターの学生2名が出演した。

# 2025年度公開シンポジウム 「土樋キャンパス百年のあゆみ」開催報告

日 時：2025(令和7)年11月15日(土) 13時～  
会 場：土樋キャンパス ホーイ記念館ホール  
参加者：約70名



を迎えるのを機に、その歴史を概観するとともに、歴史あるキャンパスを今に受け継ぐキリスト教系の2校より講師を招き、各校の歴史を共有。第二部のパネルディスカッションでは他大学の事例を学びつつ、土樋キャンパスに積層する有形無形の歴史的財産を継承する方途を考察するという趣旨で企画された。

当日は、東北学院史資料センター調査研究員の伊藤大介氏（本学教養教育センター助教）が司会を務め、前半に外部講師を含む4名の基調講演、後半にパネルディスカッションが行われた。

大西晴樹氏（東北学院院長・学長）の開会挨拶の後、第一部の基調講演では、最初に日野哲氏（東北学院史資料センター客員研究員）が「東北学院創立40周年と土樋キャンパスの開設：記録映像を見ながら」と題して講演を行った。冒頭、東北学院の草創期から創立40周年までの歩みについて詳細な資料を用いて解説した後、創立40周年記念式および専門部校舎（現・東北学院大学本館）落成記念の記録映像が上映された。続いて、本シンポジウムのコーディネーターである崎山俊雄氏（本学工学部環境建設工学科准教授・東北学院史資料センター調査研究員）が「土樋キャンパスの100年：1926-2025」と題して講演を行った。1886年の仙台神学校設置から土樋キャンパス開設に至る歴史的経緯を年表で解説し、キャンパス内の歴史的建造物について、図面や写真を用いた詳細な研究成果を発表した。

休憩を挟み、後半の基調講演では、まず赤江達也氏（関西学院大学社会学部教授・関西学院学院史編纂室長）より「キリスト教主義学校の空間思想史——関西学院のキャンパスから——」と題して講演いただいた。関西学院の創立経緯や建学の精神「キリスト教主義にもとづく全人教育」、スクール・モッ

11月15日(土)、東北学院史資料センター主催の公開シンポジウム「土樋キャンパス百年のあゆみ」が、土樋キャンパスホーイ記念館ホールを会場に開催された。

本シンポジウムは、二部構成となり、第一部の基調講演では2026年に土樋キャンパスが開設100周年





日野 哲 (基調講演講師)



嶋山俊雄 (基調講演講師)



赤江達也 (基調講演講師)



岡部桂史 (基調講演講師)



伊藤大介 (司会)



齋藤 誠  
(パネルディスカッション司会)



パネルディスカッション

トである“Mastery for Service”（奉仕のための練達）について説明がなされた後、草創期から40年にわたる神戸原田の森キャンパス時代、および1929年の西宮上ヶ原キャンパス移転後の約100年について、映像や資料に基づき詳述された。最後に、キャンパスイメージの統一性を維持・強化しつつ、異なる建築様式や新旧の意匠が並存している点が同校の特徴であると締めくくられた。

最後に、岡部桂史氏（立教大学経済学部教授・立教学院史資料センター長）より「立教大学池袋キャンパスの戦前・戦後—2つの震災と1つの戦争を経験して—」と題して講演が行われた。1874年に最初の校舎が築地に建築された後、米国聖公会の東アジア伝道戦略の中核として池袋に広大な敷地を取得した経緯が語られ、東北学院を去った後の押川方義が土地取得交渉に関わっていた事実が紹介された。その後、関東大震災による被害や、太平洋戦争時の空襲で建築被害が皆無であった理由について、諸説を交えながら資料映像とともに解説された。最後に、自校史教育の重要性に触れ、歴史的建造物が「自由の学府」を具現化しており、なかでも礼拝堂（立教学院諸聖徒礼拝堂）の存在が教育の軸となってきたと結んだ。

（※基調講演の詳細は、『東北学院史資料センター年報』Vol.12（2027年3月刊行予定）に掲載予定）

基調講演後、再び休憩を挟んでパネルディスカッションが行われた。齋藤誠氏（元東北学院大学副学長・東北学院史資料センター客員研究員）がファシリテーターを務め、登壇者4名による討論が展開された。あらかじめ来場者から受け付けた質問に回答する形で議論が始まり、3校の歴史的建造物、キャンパスの立地とアイデンティティ、そして東日本大震災の影響について意見が交わされた。東北学院は震災で礼拝堂に被害を受けたが、都市中心部に留まり続けた歴史を持つ一方、関西学院は郊外型を維持し、立教大学はカレッジ・ゴシック様式を都市型キャンパスにおいて継承していることが語られた。各校の差異と共通点を浮き彫りにする奥深い議論を経て、パネルディスカッションは終了。

最後に河西晃祐東北学院史資料センター所長の挨拶をもって閉会した。

（登壇順）

- |      |  |
|------|--|
| 日野 哲 | 東北学院史資料センター客員研究員                             |
| 嶋山俊雄 | 東北学院大学工学部環境建設工学科<br>准教授・<br>東北学院史資料センター調査研究員 |
| 赤江達也 | 関西学院大学社会学部教授・<br>関西学院院史編纂室長                  |
| 岡部桂史 | 立教大学経済学部教授・<br>立教学院史資料センター長                  |

# 受贈資料一覽

2025年2月～2026年1月


日付	寄贈者	受贈資料
2025.02.01	明治学院歴史資料館・ 明治学院大学キリスト教研究所	井深梶之助日記 大正編
2025.03.19	西南学院史資料センター	神と人々に誠と愛を ～E. B. ドージャー先生の生涯とその功績～ 第2版
2025.04.01	福澤諭吉記念慶應義塾史展示館	慶應義塾と戦争 -モノから人へ-
2025.04.01	福澤諭吉記念慶應義塾史展示館	藤山一郎がゆく！ -「若き血」から国民栄誉賞まで-
2025.04.17	専修大学大学史資料室	専修大学史資料集 第二巻 -相馬永胤日記 留学編-
2025.05.13	同志社大学同志社史資料センター	山岡家文書目録
2025.05.14	拓殖大学拓殖アーカイブズ事業室	桂太郎没後一一〇年記念回顧展図録
2025.05.20	仁昌寺正一	福島県九条の会ブックレット12 鈴木安蔵・鈴木義男と日本国憲法の誕生 ～福島県出身の「ダブル鈴木」～
2025.07.08	神戸女学院大学図書館	神戸女学院創立150周年記念展示Ⅲ Bridging Generations -神戸女学院の150年と織りなす未来- 展示目録
2025.07.22	大宮司俊彦	戦災五十年・柳町会復興四十周年記念 御譜代町 やなぎまち
2025.08.29	福澤諭吉記念慶應義塾史展示館	ある一家の近代と戦争 -上原良春・龍男・良司とその家族-
2025.09.29	荒孝夫	雲の柱 ガラスアーティストが行く
2025.10.02	荒孝夫	わが杯はあふるる 上巻 余韻
2025.10.02	荒孝夫	わが杯はあふるる 下 夕照
2025.10.02	荒孝夫	野(ヤ)に在れば視野は広く、底も見え時の流れが、読めて来る
2025.10.21	東北学院大学セツルメント会	セツル60年の歩み
2025.10.27	日本キリスト教会横浜海岸教会	横浜海岸教会150年史
2025.10.29	立命館史資料センター	立命館創始155年・学園創立125周年記念誌
2025.11.28	『同志社百五十年史』編纂委員会	同志社百五十年史 各学校と関連団体
2025.12.16	京都産業大学大学史編纂事務室	学校法人京都産業大学60年のあゆみ
2025.12.16	成城学園百年史編纂委員会事務局	成城学園百年
2025.12.17	荒孝夫	迷之霧 一名基督教感問弁解

※他逐次刊行物類多数をご寄贈いただきました。感謝申し上げます。

## 東北学院の沿革

年 代	歴代役職者	事 項
1886(明治19)年		W.E.ホーイ仙台着任(1月)。押川方義、W.E.ホーイ兩名により、キリスト教伝道者養成の目的をもって仙台市木町通に「仙台神学校」開設(5月)。教師2名、生徒7名で始まった。E.R.プルボー、M.B.オールドが来日(7月)、宮城女学校を創立(9月)。
1887(明治20)年		東二番丁の本願寺別院跡を取得し、仙台教会と仙台神学校を移転(5月)。
1888(明治21)年		D.B.シュネーダー夫妻仙台着任(1月)。オールド記念館落成(11月)。
1891(明治24)年		南町通りに仙台神学校校舎が完成(9月)。校名を「東北学院」と改称し、神学生のみに限らず、広く生徒を募集し、普通科を設置。予科2年・本科4年・神学部3年とする。
1892(明治25)年	押川方義	労働会創設(3月)。東北学院理事局を組織、初代院長に押川方義、副院長・理事局長にホーイ就任(8月)。東北学院開院式を挙行(11月)。
1895(明治28)年		予科・本科を改組し、普通科5年、その上に専修部(文科・理科)2年を設置。
1896(明治29)年	W.E.ホーイ	島崎春樹(藤村)、作文・英語教師として着任。
1898(明治31)年		理科専修部を廃止。
1900(明治33)年		第2代理事局長にD.B.シュネーダー就任(10月)。
1901(明治34)年	D.B.シュネーダー	第2代院長にD.B.シュネーダー就任。普通科長に笹尾糸太郎就任(4月)。普通科に制帽を制定。徽章TG章制定。
1903(明治36)年		東北学院同窓会結成。
1904(明治37)年		全校を普通科(5年)と専門学校令による専門科(3年)とに分け、専門科に文学部と神学部とを置く。専門科長に出村悌三郎就任(4月)。
1905(明治38)年	笹尾糸太郎	専門科を専門部、文学部を文科、神学部を神学科と改称。東二番丁に普通科校舎完成。専門部に角帽を制定。徽章は全校TG章を用いる。普通科長に田中四郎就任(9月)。
1906(明治39)年		普通科寄宿舎完成。
1908(明治41)年	田中四郎	「社団法人東北学院」設置。創立記念日を5月15日に定める。同窓会会報第1号発行。
1910(明治43)年		校旗制定。
1911(明治44)年		創立25周年記念式典挙行。
1915(大正4)年		普通科を中学部と改称(5月・生徒数357名)。中学部長は田中四郎。
1916(大正5)年		『東北学院時報』創刊(1月)。南六軒丁(現大学土樋キャンパス)に専門部校地取得。
1918(大正7)年		専門部を改組、神学科・文科・師範科・商科とする。
1919(大正8)年		南町大火のため中学部校舎・寄宿舎全焼(3月)。仮校舎建築(9月)。
1920(大正9)年		中学部長に五十嵐正就任(1月)。
1921(大正10)年	五十嵐正	中学部寄宿舎再建(9月)。



年 代	歴代役職者	事 項
1922(大正11)年		<p>中学部校舎再建(東二番丁・通称赤レンガ校舎)(6月)。</p> 
1923(大正12)年		<p>東北学院教会設立(5月)。</p>
1925(大正14)年		<p>神学科を専門部より分離し、神学部(第1科・第2科)とする。専門部は文科、師範科、商科となる。</p>
1926(大正15)年		<p>南六軒丁に専門部校舎完成(現大学本館)、9月より使用。創立40周年記念式ならびに専門部校舎落成式を挙行政(10月)。</p> 
1928(昭和3)年		<p>専門部3科とも予科を廃止、4年制とする。ハウスキーパー記念社交館完成(3月)。</p>
1929(昭和4)年		<p>専門部を高等学部と改称。神学部第2科を廃止、第1科を神学部本科と改称し、3年の予科を置く。「財団法人東北学院」と改組(8月)。</p>
1930(昭和5)年	出村悌三郎	<p>高等学部師範科に専攻科1年を置く。</p>
1932(昭和7)年		<p>高等学部は3学期制を2学期制に改める。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂完成(3月)。労働会寄宿舎を廃止。中学部寄宿舎を廃止し、神学部寄宿舎をその跡に移す。</p> 
1933(昭和8)年	E.H.ゾーグ	<p>高等学部制帽を角帽より丸帽に改める。</p>
1934(昭和9)年		<p>神学部、南六軒丁ブラッドショウ館に移る。</p>
1936(昭和11)年		<p>高等学部文科を文科第一部、師範科を文科第二部と改称。創立50周年記念式典を挙行政。院長シュネーター、「我は福音を恥とせず」と題する説教を行う。第3代院長に出村悌三郎就任(5月)。旧労働会建物および敷地を売却。第3代理事長にE.H.ゾーグ就任(6月)。</p> 
1937(昭和12)年		<p>神学部廃止、日本神学校と合同(3月)。高等学部は3年制となる。高等学部長にゾーグ就任(4月)。</p>
1938(昭和13)年	小泉要太郎	<p>中学部長に田口泰輔就任(4月)。</p>
1939(昭和14)年		<p>中学部長に出村剛就任(4月)。</p>
1940(昭和15)年		<p>南町通り旧神学部校舎および敷地を売却。東北学院維持会を組織。花淵浜高山に修養道場建築用地を取得。第4代理事長に出村悌三郎就任(10月)。</p>
1941(昭和16)年	宮城音五郎	<p>高等学部長に出村剛、中学部長に小泉要太郎就任(4月)。</p>
1942(昭和17)年		<p>高等学部商科第二部および中学部第二部を設置(ともに夜間)。</p>
1943(昭和18)年		<p>高等学部商科を高等商業部、中学部を東北学院中学校と改称。中学校長を出村悌三郎院長兼任(4月)。</p>
1944(昭和19)年	杉山元治郎	<p>航空工業専門学校設置。航空工業専門学校長に宮城音五郎就任(4月)。第5代理事長に杉山元治郎就任(6月)。</p>
1945(昭和20)年		<p>中学校長に出村剛就任(4月)。航空工業専門学校を工業専門学校と改称(12月)。中学校校舎空襲により焼失。</p>
1946(昭和21)年	出村剛	<p>高等商業部および同第二部を廃止(3月)。東北学院専門学校(英文科・経済科)および同第二部を設置。第4代院長に出村剛就任。中学校長に月浦利雄就任(4月)。専門学校長に出村剛就任(4月)。</p>

年 代	歴代役職者	事 項
1947(昭和22)年		工業専門学校廃止。新制中学校設置。専門学校校舎木造2階建4教室増築完成。第6代理事長に鈴木義男就任(7月)。
1948(昭和23)年	月浦利雄	新制高等学校、同第二部を設置。月浦利雄同高等学校長ならびに中学校長兼任(4月)。専門学校長に小田忠夫就任(4月)。
1949(昭和24)年		東北学院専門学校から新制大学に昇格。東北学院大学文経学部(4年制、英文学科・経済学科)を設置。小田忠夫初代大学長に就任。東九番丁寄宿舍完成。
1950(昭和25)年	月浦利雄	専門学校二部を東北学院短期大学部(2年制、英文科・経済科)と改称。第5代院長にA.E.アンケニー就任(3月)。
1951(昭和26)年		「学校法人東北学院」と改組。専門学校を廃止。短大別科を設置。第6代院長に小田忠夫就任。中高理科教室鉄筋コンクリート3階建完成。
1952(昭和27)年	鈴木義男	短期大学部に法科を設置。
1953(昭和28)年		中学高等学校分離、中学校長に五十嵐正躬就任(4月)。総合運動場を宮城郡多賀城町(現多賀城市)に開設。シュネーダー記念東北学院図書館完成(10月)。
1954(昭和29)年	A.E.アンケニー	多賀城第2寄宿舍完成。
1955(昭和30)年		創立70年記念式典挙行。中学校校舎鉄筋コンクリート造3階建9教室完成。『東北学院創立七十年写真誌』を刊行(5月)。在米同窓生、創立70年記念として鐘を寄贈(12月)。蔵王にTGヒュッテ「栄光」完成。
1956(昭和31)年	小田忠夫	中学・高等学校体育館完成(3月)。W.E.ホーイ碑、出村悌三郎墓を北山墓地に建立(4月)。大学音楽館完成(10月)。
1958(昭和33)年		中学高等学校一本化、中学校長を月浦利雄高等学校長兼任(1月)。中学校赤レンガ校舎は都市計画により9教室を失う(4月)。中学・高等学校鉄筋コンクリート造4階建8教室完成(4月)。大学体育館「アセンブリー・ホール」完成(9月)。
1959(昭和34)年	五十嵐正躬	短期大学部を東北学院大学文経学部二部(英文学科・経済学科)に改組。高等学校榴ヶ岡校舎を開設。『東北学院創立七十年史』を刊行(7月)。大学研究棟鉄筋コンクリート造4階建完成(9月)。自然科学研究室青根分室を開設(10月)。
1960(昭和35)年		短期大学部を廃止(3月)。
1961(昭和36)年		文経学部英文学科に専攻科を設置。
1962(昭和37)年		多賀城町に東北学院大学工学部(機械工学科、電気工学科、応用物理学科)を設置。同校地に東北学院幼稚園を開設。初代幼稚園長を小田忠夫院長兼任(4月)。
1963(昭和38)年		押川記念館完成(2月)。工学部寄宿舍開設。大学オーディオ・ヴィジュアルセンター完成。野間記念剣道場完成(7月)。第7代理事長に杉山元治郎就任(9月)。
1964(昭和39)年		東北学院大学文経学部一部・二部を文学部一部・同二部および経済学部一部・同二部に改組。大学院文学研究科英語英文学専攻修士課程を設置。大学64年館完成(10月)。第8代理事長に山根篤就任(11月)。
1965(昭和40)年	山根篤	東北学院大学法学部(法律学科)および大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を設置。宮城郡泉町市名坂字天神沢(現仙台市泉区天神沢)に10万坪の校地を取得(5月)。同窓会にTG十五日会発足(7月15日)。工学部4号館完成(10月)。中学校新校舎、中高礼拝堂完成(11月)。大学土樋寄宿舍完成。
1966(昭和41)年		大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻修士課程を設置。創立80周年記念式典挙行。大学66年館完成(6月)。大学泉寄宿舍完成。青根セミナーハウス完成。



年 代	歴代役職者	事 項
1967(昭和42)年	 二関敬	工学部に土木工学科を増設。中学・高等学校運動部室完成（3月）。大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を経済学研究科経済学専攻修士課程に改組。大学67年館完成（5月）。中学・高等学校向山寄宿舎開設。
1968(昭和43)年	 二関敬	大学院経済学研究科経済学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻博士課程を設置。工学部5号館・6号館完成（3月）。中学・高等学校弓道場完成（3月）。大学新研究棟68年館完成（8月）。『東北学院大学学報』第1号創刊（10月）。
1969(昭和44)年	 二関敬	工学部旭ヶ丘寄宿舎開設。第9代理事長に月浦利雄就任（4月）。
1970(昭和45)年	 二関敬	工学部校地に東北学院プール完成。
1971(昭和46)年	 二関敬	大学院工学研究科機械工学専攻修士課程、電気工学専攻修士課程を設置。倉石ヒュッテ完成。中学・高等学校長に二関敬就任（9月）。榴ヶ岡高等学校長に五十嵐正躬就任（9月）。大学文団連棟焼失（9月）。
1972(昭和47)年	 二関敬	榴ヶ岡高等学校として独立（4月）。高山セミナーハウス完成（7月）。 <b>泉市市名坂に榴ヶ岡高等学校校舎が完成移転（8月）</b> 。榴ヶ岡高等学校体育館完成（12月）。
1973(昭和48)年	 二関敬	東北学院同窓会館完成（4月）。米国アーサイナス大学に第1回夏期留学生を派遣。中学・高等学校寄宿舎完成。幼稚園長に渡辺平八郎就任（7月）。
1974(昭和49)年	 二関敬	大学院工学研究科機械工学専攻博士課程および電気工学専攻博士課程設置。第10代理事長に小田忠夫就任（3月）。
1975(昭和50)年	 二関敬	大学院法学研究科法律学専攻修士課程設置。大学67年館増築完成（6月）。
1976(昭和51)年	 二関敬	<b>創立90周年記念式典挙行。</b>
1977(昭和52)年	 二関敬	中学・高等学校長に田口誠一就任（4月）。榴ヶ岡高等学校長を小田忠夫院長兼任（4月）。
1978(昭和53)年	 二関敬	大学90周年記念館完成（2月）。榴ヶ岡高等学校長に清水浩三就任（4月）。中学・高等学校赤レンガ校舎、宮城県沖地震のため一部倒壊（6月）。TGヒュッテ焼失（8月）。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂（土樋キャンパス礼拝堂）に新パイプオルガンを設置（11月）。
1979(昭和54)年	 二関敬	大学院法学研究科法律学専攻博士後期課程を設置。工学部計算センター完成（3月）。中学・高等学校赤レンガ校舎見送り式（3月）。大学78年館および部室棟完成（9月）。蔵王TGヒュッテ再建（10月）。東北学院展開催（十字屋仙台店・10月）。
1980(昭和55)年	 二関敬	中学・高等学校シュネーター記念館完成（3月）。工学部機械工場および機械実験棟完成（3月）。榴ヶ岡高等学校礼拝堂および北校舎完成（8月）。泉校地総合運動場および管理センター完成（9月）。中学・高等学校文化部室完成（9月）。
1981(昭和56)年	 二関敬	大学81年館完成（3月）。『東北学院報』発刊（『東北学院大学学報』を改称）（4月）。情報処理センター設置。総合運動場プール完成（5月）。榴ヶ岡高等学校第1回海外研修（8月）。工学部体育館完成（10月）。
1982(昭和57)年	 二関敬	米国アーサイナス大学と国際教育交流協定を締結。 <b>第7代院長・第2代大学長に情野鉄雄就任（4月）</b> 。第11代理事長に児玉省三就任（4月）。図書館工学部分館完成（11月）。
1983(昭和58)年	 二関敬	高等学校第二部廃止（3月）。榴ヶ岡高等学校校舎増築完成（3月）。工学部礼拝堂完成（10月）。
1984(昭和59)年	 二関敬	新シュネーター記念図書館完成。高等学校第1回海外研修（7月）。
1985(昭和60)年	 二関敬	大学整備計画案（教養学部泉校地移転など）公表（1月）。旧シュネーター記念東北学院図書館を大学院校舎に改装（11月）。 <b>幼稚園新園舎完成（12月）</b> 。

年 代	歴代役職者	事 項
1986(昭和61)年	 脇田睦生	創立100周年記念式典挙行。米国フランクリン・アンド・マーシャル大学と国際教育交流協定を締結。榴ヶ岡高等学校北校舎増築完成（3月）。
1987(昭和62)年		中学・高等学校長に宗方司就任（4月）。榴ヶ岡高等学校長に半澤義巳就任（4月）。中学・高等学校体育館武道館完成（12月）。
1988(昭和63)年	 出原莊三	大学泉キャンパス完成、大学教養部を移転。榴ヶ岡高等学校礼拝堂増築完成（3月）。幼稚園長に橋本清就任（4月）。
1989(平成元年)		泉キャンパスに教養学部（教養学科人間科学専攻・言語科学専攻・情報科学専攻）を設置。幼稚園長に新妻卓逸就任（4月）。『東北学院百年史』発刊（5月）。
1990(平成2)年	 杉本勇	大学院工学研究科土木工学専攻修士課程を設置。
1991(平成3)年		多賀城キャンパス1号館完成（3月）。榴ヶ岡高等学校部室棟完成（3月）。中学・高等学校長に武藤俊男就任（4月）。中学・高等学校社会科教室完成（7月）。
1992(平成4)年	 赤澤昭三	大学院工学研究科土木工学専攻博士後期課程を設置。榴ヶ岡高等学校柔道・剣道場および校舎増築完成（4月）。第12代理事長に情野鉄雄就任（6月）。法学政治学研究所を設置。
1993(平成5)年		工学部2号館完成。中学・高等学校移転決定（3月）。
1994(平成6)年	 星宮望	大学院人間情報学研究科人間情報学専攻修士課程を設置。
1995(平成7)年		榴ヶ岡高等学校を男女共学制に移行。第8代院長に田口誠一就任。第3代大学長に倉松功就任（4月）。人間情報学研究所を設置。
1996(平成8)年	 松本芳哉	大学院人間情報学研究科人間情報学専攻博士後期課程を設置。榴ヶ岡高等学校家庭科実習棟完成（2月）。榴ヶ岡高等学校長に脇田睦生就任（4月）。榴ヶ岡高等学校第1回ホームカミングデー実施（9月）。
1997(平成9)年		大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻修士課程、アジア文化史専攻修士課程を設置。工学部運動場等新設。
1998(平成10)年	 久能隆博	幼稚園長を田口誠一院長兼任（4月）。高山セミナーハウス閉鎖。
1999(平成11)年		大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻博士後期課程、アジア文化史専攻博士後期課程を設置。大学設置50周年記念式典を挙行。青根セミナーハウス閉鎖。第13代理事長に田口誠一就任（4月）。
2000(平成12)年	 永井英司	文学部英文学科、経済学部経済学科と商学科に昼夜開講制を導入。文学部二部英文学科と経済学部二部経済学科は募集停止。幼稚園長に長谷川信夫就任（4月）。土樋キャンパス8号館（押川記念ホール）・体育館完成（9月）。大学第1回ホームカミングデー（同窓祭）開催。大学設置50周年記念事業（講演会・シンポジウム・シンボルマーク決定）を実施。仙台市宮城野区小鶴地区に中学・高等学校移転校地取得（3万1千坪）。
2001(平成13)年		文学部基督教学科をキリスト教学科に、経済学部商学科を経営学科に、教養学部教養学科言語科学専攻を言語文化専攻に改称（4月）。東北学院資料室開設（5月）。東北学院シーサイドハウス完成。
2002(平成14)年	 平河内健治	工学部機械工学科を機械創成工学科に、電気工学科を電気情報工学科に、応用物理学を物理情報工学科に、土木工学科を環境土木工学科にそれぞれ改称。大学院経済学研究科に経営学専攻修士課程を設置。中学・高等学校長に出原莊三就任。榴ヶ岡高等学校長に杉本勇就任（4月）。
2003(平成15)年		第14代理事長に赤澤昭三、第9代院長に倉松功就任（4月）。幼稚園長に長島慎二就任（4月）。東北学院同窓会100周年記念式典挙行（11月）。
2004(平成16)年		法科大学院・総合研究棟完成（2月）。第4代大学長に星宮望就任（4月）。中学・高等学校長に松本芳哉就任（4月）。大学院法務研究科法実務専攻専門職学位課程（法科大学院）を設置（4月）。榴ヶ岡高等学校校舎増築（4月）。



年 代	歴代役職者	事 項
2005(平成17)年	 湯本良次	<p>中学・高等学校新校舎完成(仙台市宮城野区小鶴)(1月)。東北学院同窓会館閉館(3月)。文学部史学科を歴史学科に、教養学部教養学科人間科学専攻、言語文化専攻、情報科学専攻を教養学部人間科学科、言語文化学科、情報科学科に改組し、教養学部地域構想学科を新設(4月)。</p> 
2006(平成18)年	 湯本良次	<p>工学基礎教育センター完成(3月)。工学部機械創成工学科を機械知能工学科に、物理情報工学科を電子工学科に、環境土木工学科を環境建設工学科に改称(4月)。榴ヶ岡高等学校長に久能隆博就任(4月)。創立120周年記念式典挙行(5月)。</p>
2007(平成19)年	 大橋邦一	<p>中学・高等学校新寄宿舎完成。ハイテク・リサーチセンター完成(3月)。第10代院長に星宮望就任(4月)。中学校・高等学校長に永井英司就任(4月)。秋田オープンキャンパス開催(7月)。多賀城市と連携協定締結(11月)。</p>
2008(平成20)年	 大橋邦一	<p>第15代理事長に平河内健治就任(6月)。榴ヶ岡高等学校体育館・管理棟完成(9月)。教養学部創設20周年記念式典挙行・同窓会設立。</p>
2009(平成21)年	 大橋邦一	<p>経済学部経営学科を経営学部経営学科に改組、経済学部に共生社会経済学科を新設(4月)。大学院経営学研究科(修士課程)を設置(4月)。幼稚園長を平河内健治兼任(4月)。榴ヶ岡高等学校創立50周年記念式典挙行(11月)。東北学院大学博物館開設(11月)。</p>
2010(平成22)年	 松本宣郎	<p>バイオテクノロジー・リサーチ・コモン棟を開設(3月)。東北学院発祥の地に記念碑建立(10月)。</p>
2011(平成23)年	 松本宣郎	<p>中学校・高等学校跡地に記念碑建立(3月)。文学部キリスト教学科を文学部総合人文学科に改組(4月)。幼稚園長に佐々木勝彦就任(4月)。</p>
2012(平成24)年	 松本宣郎	<p>榴ヶ岡高等学校長に湯本良次就任(4月)。工学部設置50周年記念式典挙行(11月)。</p>
2013(平成25)年	 佐々木哲夫	<p>第5代大学長に松本宣郎就任(4月)。中学校・高等学校長に大橋邦一就任(4月)。幼稚園長に阿部正子就任(4月)。文学部史学科・歴史学科創設50周年記念式典挙行(11月)。</p>
2014(平成26)年	 佐々木哲夫	<p>第16代理事長に松本宣郎就任(4月)。</p>
2015(平成27)年	 佐々木哲夫	<p>東北学院資料室を改称し東北学院史資料センターを設置(4月)。</p>
2016(平成28)年	 佐々木哲夫	<p>第11代院長に佐々木哲夫就任(4月)。法学部法律学科創設50周年記念式典挙行(5月)。</p>
2017(平成29)年	 佐々木哲夫	<p>ホーイ記念館完成(3月)。創立130周年記念式典挙行(5月)。東北学院旧宣教師館(デフォレスト館)が国の重要文化財に指定(7月)。</p>
2018(平成30)年	 佐々木哲夫	<p>工学部電気情報工学科を電気電子工学科に改称し、情報基盤工学科を新設(4月)。「東北学院の歴史」刊行(10月)。</p>
2019(令和元年)	 佐々木哲夫	<p>文学部に教育学科を新設(4月)。米国ランカスター神学校と国際交流協定締結(7月)。</p>
2020(令和2)年	 佐々木哲夫	<p>教養学部創設30周年記念式典挙行(3月)。第12代院長に松本宣郎就任(4月)。第6代大学長に大西晴樹就任(4月)。中学校・高等学校長に阿部恒幸就任(4月)。榴ヶ岡高等学校創立60周年記念式典挙行(11月)。</p>
2021(令和3)年	 佐々木哲夫	<p>記念映画「東北学院の40年」完成(3月)。第13代院長に大西晴樹就任(4月)。第17代理事長に原田善教就任(4月)。幼稚園長に島内久美子就任(4月)。</p>
2022(令和4)年	 佐々木哲夫	<p>榴ヶ岡高等学校長に河本和文就任(4月)。</p>
2023(令和5)年	 佐々木哲夫	<p>工学部設置60周年記念式典挙行(11月)。</p>
2024(令和6)年	 佐々木哲夫	<p>大学五橋キャンパス完成、大学工学部・教養学部を移転(4月)。五橋キャンパスに地域総合学部(地域コミュニティ学科・政策デザイン学科)・情報学部(データサイエンス学科)・人間科学部(心理行動学科)・国際学部(国際教養学科)を設置(4月)。</p>
2025(令和7)年	 佐々木哲夫	<p>中学校・高等学校校長に帆足直治就任(4月)。</p>
		<p>東北学院史資料センター事務室設置(6月)。</p>
		<p>百五十年史編纂室設置(4月)。</p>



## 利用案内

東北学院史資料センターは、広く一般の方々にも開放しております。

### 開室時間

月～金 9:00～17:00

(土・日・祝祭日および大学の定める休業日は閉室)



学校法人 東北学院

発行日 2026(令和8)年3月1日  
編集 東北学院史資料センター年報編集委員会  
発行 学校法人 東北学院  
〒980-8511  
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号  
TEL.022-264-6538  
<http://www.tohoku-gakuin.jp/>  
印刷 株式会社 東北プリント

ISSN 2434-6314



#### 表紙の写真

#### 「東北学院大学多賀城キャンパス 春の風景と礼拝堂(左)」

1962年の工学部設置以来、61年の歳月を刻んできた多賀城キャンパスは、2023年4月の五橋キャンパス開学をもってその歴史に幕を閉じた。これまで時代の変遷に合わせて進化を続け、東北の産業界を支える数多くの技術者を世に送り出してきた。その伝統と使命は五橋の地へと引き継がれ、加速する技術革新や社会構造の変化という新たな課題に挑みながら、次代を担う人材を育み続けていく。(写真は2002年度、2005年度卒業アルバムより)